

鷺流狂言『宝暦名女川本』 「盗類雑」 「遠雑類」 翻刻

著者	永井 猛, 稲田 秀雄, 伊海 孝充
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	44
ページ	67-165
発行年	2020-03-25
URL	http://doi.org/10.15002/00023226

鷺流狂言『宝曆名女川本』『盗類雑』『遠雑類』翻刻

永井 猛

稲田秀雄

伊海孝充

凡例

一、鷺流狂言『宝曆名女川本』のうち、「盗類雑」「遠雑類」（法政大学能楽研究所蔵）の二冊を翻刻する。

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、通読の便宜を考慮し、左の方針に従った。

- 1、仮名遣い、送り仮名は底本通りとした。
- 2、濁点・拗音・促音の表記は、底本のままとした。
- 3、合字等は通行字体に改めた。

（例）ㇿより、ㇿ↓コト、ㇿ↓トモ

- 4、漢字の異体字や旧字体は、原則として通行の字体や新字体に改めた。ただし、一部そのままとしたものもある。

（例）哥 嶋 寫 附 鉢 喚 鼓

- 5、漢字の振り仮名の表記は底本のままとした。特に読みにくい漢字には適宜振り仮名を（ ）に入れて傍記した。

- 6、片仮名と平仮名の共通の書体である「ニ」「ハ」「ミ」は、片仮名として翻刻した。

- 7、片仮名の「セ」「ツ」「リ」と平仮名の「せ」「つ」「り」の判定が困難な場合は、平仮名にした。

- 8、得・之・見・茂・和・居の類は、文意によって適宜「え」「の」「み」「も」「わ」「あ」とした

- 9、反復記号については、二字以上の繰り返しの「〱〱」はそのまま用い、漢字一字の繰り返しは「々」、平仮名一字の繰り返しは「ゝ」、片仮名一字の繰り返しは「ゝ」に統一した。

- 10、句読点は底本のままとしたが、それが施されていない場合は、文の切れ目（句点を打つべき箇所）を一字空とした。

- 11、各役の初めの「は」に改めた。底本においてそれが欠落していたり、そこに記されている役名に誤りがある場合は、() に入れて傍記した。
- 12、役名(またはそれに代わる記号)は、ポイントを落とし、右寄せとした。
- 13、抹消(ミセケチも含む)部分は示さず、訂正された本文に従ったが、抹消部分も参考になると判断した場合は、「」にくくって傍記するか、本文中に示した。
- 14、書き落とし部分の細字による書き込み等も本文に入るものは入れ、演出注記等も「」でくくって示した。
- 15、ト書き、言いかえ等、底本に割注の形で記された部分は「」でくくって示した。
- 16、節付けのある部分は「」でくくり、ゴマ点・上・下等の節付記号は省略した。
- 17、本文中に出てくる能・狂言の曲名は「」でくくった。
- 18、虫損・汚損・難読等により判読不能部分は推定字数分の□によって示した。
- 19、難読文字や誤写の推定などを()でくくって傍記したり、? を添えて曖昧な字体あることや、(ママ)として原文通りであることを示したりした。()でくくった部分はすべて校訂者の付加である。
- 20、傍記されている言い換えは、できるだけ傍記したが、長いものは※を付けて本文中に入れた。(※)が言い換えて、傍記の※がそれが入る個所である。

- 21、装束付等は、二字下げとした。
- 22、各曲曲名はゴチック体にした。
- 23、「遠雑類」で曲名等に、米偏に旁を「曼」、また、月偏に旁を「生」としているものがあるが、それぞれ「饅」「腥」として翻刻した。

一、書誌等については、「新出 鶯流狂言『宝暦名女川本』の離れについて」を参照されたい。

一、翻刻は、「盗類雑」の一〈連歌盗人〉一八〈茶壺〉を永井、九〈筍〉一七〈棒縛〉を稲田、一八〈合柿〉二五〈颯花〉を伊海、「遠雑類」の一〈緞粥〉一一〈折紙智〉を永井、一二〈無縁智〉二二〈六地藏〉を稲田、二三〈拄杖〉三〇〈泥閑〉を伊海が担当して原稿を作成し、全員が全体を閲覧点検した。

一、法政大学能楽研究所には、貴重な蔵書の翻刻公開許可ばかりでなく、研究所紀要『能楽研究』の紙面まで提供していただき、篤く感謝申し上げる。

〔本稿は、法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」二〇一九年度共同研究「新出・鶯流狂言『宝暦名女川本』の離れ〔笹野本〕についての基礎研究」(代表…永井猛、稲田秀雄、伊海孝充)の成果の一部である。〕

〔盗類雜〕

(目次)

一	連歌盗人	拾四	舎弟
二	子偷兒	拾五	衛
三	瓜賊徒	拾六	仁王
四	盆山	拾七	棒縛
五	金藤左衛門	拾八	合柿
六	磁石	拾九	隠狸
七	長光	廿	八句連哥
八	茶壺	廿一	胸突
九	筍	廿二	包橘
拾	太刀奪	廿三	附子
拾一	真奪	廿四	口真似
拾二	文山立	廿五	颯花
拾三	昆布壳		

一 連歌盗人

シテ「是ハ此他りに住居致者で御座ル 某似合ぬ事ながら初心講を結んで御座る 某斗でも御座ない 爰に相当が御座ル程にあれへ参り談合致さうと存て罷出た 先急で参らふずる 何としたくをせられたかしらぬ迄 定てゆだんハ有ルまひと存ル いや参る程に早是じや 物もふ 案内もふ アト「表に物もふと有か案内とハたそ シテ「物もふ アト「物もふとハ 同
「いゑそなたか シテ「中々身共じや アト「何としてわせたぞ
シテ「夫ならバ追付申さふ 内々のしよしんこうがそなたと身共の当番にあたつた さだめてそなたハ日比才覚な人じやに依て何ぞしたくをさしまして有ふ アト「身共も方々と御無心の申せ共今においてとゝのわぬ シテ「扱夫ハにがく敷事じやな アト「又そなたハ何ぞ才覚さしまして有ふと思ふてあてにしていた シテ「才覚せぬでもなひ きうにハ成まひとおもふて杉楊枝を二三百本けづつておいた アト「杉やうしを シテ「中々 アト「杉楊枝ハ今と云ても成事じや
シテ「やあく成事じや アト「中々 シテ「扱わごりよハ何を用意さしました アト「身共ハかひしきを馬に二三駄きつておいた シテ「かいしきの切置がなんの役に立物じや
アト「やくにたゝぬ シテ「中々 アト「是ハ兩人ながら何も用意せいでハ何とした物であらふぞ シテ「されば何とした物であらふぞ いや夫に就てわごりよと談合する事が有つて

きたが客ハなひか アト「いや誰もなひ 先こふ通らしませ

シテ「心得た 「夫ならハ通ふか」 アト「先下二いさしま

せ シテ「心得た 「シテトアト入替りアトシテ柱の方ニシテ

ハ笛座の上二下ニあくらをかきて」 扱ハ談合と云ハ別の事で
ハなひ わごりよハ何の誰様を知つたか アト「おふしつた共

シテ「其所へ ゐひにくひハ アト「いやくるしうなひ

シテ「其所へわごりよと身共と同道していて案内なしに何ぞ
一色か式色とつてくれば今度の当ハざつと済と云物じや

アト「ふん わごりよハ心実さふ思ふて居るか シテ「何が偽
りであらふぞ アト「何をかくそうぞ 某もそふ思ふていて

な シテ「やあ／＼わごりよもそふお思ふて居るか アト

「中々 シテ「当が相番なれば心迄「が」相腹中じや アト「其通

りじや シテ「夫ならバ追付行ふ アト「一段とよからふ シテ

「さあ／＼おりやれ／＼ アト「心得た 「ト云テ右へ一返廻ル」

シテ「此様な事ハ宵からついたかよひという アト「いやわご

りよハ殊外こうしやじや シテ「あや「ツネニ」皆の咄を聞た

アト「さふであらふ シテ「いや参る程に是じや アト「此びッ

しひでハ中々はいられまひ シテ「尤表ハ此躰なれ共裏ハ殊外

ろはな こちへおりやれ アト「心得た シテ「是見さしませ

表とちごふて格別な事でハなひか アト「誠に相違した事じや

シテ「此垣をやぶれば其ま、座敷じや アト「さらばやふらし

ませ シテ「わごりよハ何ぞ道具を持しませぬか アト「いやな

にもてこぬ シテ「身共ハ此様な事があらふと思ふて是を持

てきたハ アト「よひ心懸じや さらば急でやぶらしませ シテ

「心得た「ト云テ扇ヲはもの、心にしてかきをきるてい 尤か
きのなわをすかり／＼ずか／＼ト云テ三所程きる」

「さあ／＼なわを切た 是へよつてかきをやぶらしませ アト

「心得た ト云テ二人寄てかきへ手をかくるていをして両方
へ「めり／＼ ト云テ二人共二うろたへて下にいる

み、をふさき」

シテ「是ハいかな事某ハ殊外うろたへた事かな 今のした、か
になつたを人に聞すまひとおもふて身共の耳をふさいだ

あ、殊外うろたゑた 誰も聞付ぬそうな アト「其通りじや
シテ「さあ／＼急でかきをこさしませ アト「心得た

「シテさきへかきをこすてい 両手ニてかきを分て右の足を上
へあけてこし又左りの足を入テこしテアトもシテのごとくにし

てこす シテとハちとちこふようにしてよし」

シテ「此せうじをあくれば其ま、座敷じや 「此戸を明ると其

ま、さしきじや共」 アト「さらば明さしませ シテ「心得た わ

ごりよも是へよらしませ アト「心得た 二人「さら／＼

「二人寄テあくるてい」 シテ「火が／＼「ト云テ二人共二跡へよ

つて」 シテ「火かとほして有ルに仍テれうしにハはいられま

い アト「其通りしや ト云テ二人共二すかしてとくと見ては

いる」

シテ「誰もなひ 是ハなぜに火をともいておいたぞ アト「され

ばふしぎな事じや 急ではいらしませ シテ「心得た 是ハ宵

に客が有たそうな 見さしませ 茶湯道具が取ちらいて有よ

アト「誠にわごりよのいわします通道具がちらいて有よ シテ

「是を一色かりてゐても此度の当ハざつとすむ」アト「中々シテ「されひな道具でハなひか」アト「誠にされひな事かな」シテ「是ハ床じやハ 掛物などハ見事な事じや 是になにやらかいた物が有 なんじや かゞくじやさふな」アト「何じや よふでみさしませ」シテ「水に見て月の上成木の葉かな 十月二日 是ハ移徙の懷紙さふな」アト「是ハ移徙の懷紙にハ殊外できたな」「キンジテミテ」シテ「のふ」アト「なんじや」シテ「わごりよと某の是迄くるも是故にじや程にいざそへ発句をせうでハなひか」アト「よからふ」シテ「さあ」アト「下に居さしませ」アト「心得た」シテ「互に出がちに致さう」アト「よからふ」シテ「こふもあらふか」アト「はやくな」シテ「木末ちりあらわれやせん下紅葉」アト「あゝ殊外出来た」シテ「何と有ぞ」アト「が其中に少指合が有ルよ」シテ「やれ爰なもの 発句に指合ハ有まひぞ」アト「尤じやが ハごりよと身共がこよひ是へ」「しのふで」 来に依てあらハれやせんがいやじや」シテ「夫ハわごりよが聞様がわるひ あらわれやせんでハなひ せぬじやよ」アト「ぬかあゝなをつたれ」シテ「さあ」アト「わごりよ付さしませ」アト「此あとでハこわ物じやが何としてよからうぞ こふもあらうか」シテ「何と」アト「時雨の音を盗む松風」シテ「はゝあできたぞ」同「とてももの事にゆるりといて面ハ句を致さう」アト「よからふ」シテ「此様な所でハせう」アト「でさする事でハないぞ」アト「中々よせつくる事でハなひ」「ト云内二亭主太刀持出ル」
主「座敷がさわがしひ 何事じや 是はいかな事 さればこそ盗人がはいった やる事でハないぞ」「ト云テかたきぬのかた

をぬいて」やい／＼其たひ松をだせ」「まききわの方を見て云テ太刀をぬき大臣柱の方を見て云テシテ柱の先ニイテ」 是にハ身共がひかへて居るぞ」「シテアト二人共二大臣柱の方ニイル」シテ「盗人でハ御座りませぬ お座敷を見物に参りました御座る」主「夜中に座敷を見物にくると云事ハなひ のがす事でハなひ」アト「どふにまよふて参りました」「ト云テ少出ル」主「どふにまよふたと云事が有物か」「ト云テ太刀ふり上る」 盗人とはいへども物をこふせうに云たが何事を云たぞ」シテ「盗人でハ御座りませぬが お座敷を見物に参りましたが是に懷紙が御座りましたに依て夫に添発句を致ました」主「何と付たぞ」シテ「木末ちりあらわれやせん下紅葉と付まして御座」「レ」 爰に一人小盗人が御座りますがあらわれやせんがさしやいじやと申て御座る」主「おのれ出をるまいか」アト「小盗人でハ御座りませぬ 此者がつれで御座りまする 時雨の音をぬすむ松風と迄付て御座りますが楊枝を一本ちがへハいたしませぬ」主「汝等ハ盗人とハ云ながらやさしひ物じや」シテ「はあやさしいと被仰る、」「二人少出ルト」主「おのれちこふよるな」「ト云テ太刀ふりあくるト二人共二あとへ引也」 やい身共がこれて第三をせう程に是によふ付たならば命をたすけう」シテ「もはやでそうな」「ト云テ又少出ル」主「ちこふ寄おるな」「ト云テ又太刀ふりあくる」同「こふもあらふか」二入
「あゝおはよふ御座りまする」主「やミの比月をあわれと忍ひ出」シテ「天神もなりますまひ」アト「人丸もなりますまひ」「ト云テ少出ル」主「あゝちこふ寄おるな」「まだちこふよりおる

主 「早う付ひ^{シテ}」わごりよ付さしませ^{アト}「先ぞなた付さしませ^主」何と早う付ぬか^{シテ}「今のハ何で御座りまし^主た」やミの比月を哀と忍び出テ^{シテ}「さむべき夢と^{アト}ゆるせ鐘の音^主」弓矢八幡でかい^{シテ}た^主ゆるす^{急で通れ}「ちとそこをおひらきななれませひ^主」心得た^{（少開テ）}「さあ^{シテ}」急でとをらしませ^{（マ）}「シテアト共二右の袖をか^{シテ}を、にあて通ル^主」何者じや^{少顔を見てやらふと存ル}「ト云テシテ袖を顔へあてくると亭主袖を取テ顔ヲ見る^{名ヲ云テ}」^{シテ}「はあ面目も御座らぬ^{（ト云開ク}あとへアトもシテノヤウ二右の袖かをへあてくるを是もそてを取テ顔見る^主」いゑわこりよか^{アト}「は、私で御座ります^主」先下にいさしませ^同「何としてわせたぞ^{シテ}」いや私ハ参るま^主ひと申て御座ルが此者が是悲共と申て御座ルに依ふつと参て御座る^{アト}「いや左様でハ御座りませぬ^主」先さむからう程に酒を一ツのましませ^{シテ}「いやもふ被下ますまひ^{（？）}」佐云致ませう^主「ひらに一ツ吞ましませ^{先夫にまましませ}」ト云テ太鼓座へ行テ^{シテ}「すかぬ事じやな^{アト}」其通りじや^{シテ}「は、是ハたそ被仰付ませひで^主」さあ^{（？）}吞しませ^{（たかにしきして）}「あ、けつこうな御酒で御座ります^主」なふ^{（？）}何ぞ肴をおませうと思へ共なにもなひ^{是を持合た}わごりよにおまするぞ^{シテ}「いやもふ御酒を被下る、さへ御座ルに^{アト}」おじぎを申せバ返て両外な程にいたゞかしませ^{シテ}「夫ならハいたゞこうか^主」なふ^{（？）}わごりよにも何ぞおませたひけれ共何もなひ^{是ハきざしふるばひたれ共わごり}

よにおまする^{アト}「は、あれにやらせらるれば同じ事で御座る^{御無用で御座る}」^{シテ}「いわれぬ事をいわず共いただかしませ^{アト}」夫ならバいたゞこふか^主「も一こんツ、参れ^{シテ}」それならば被下ませふ^主「なふ夫に就いてわごりよ達に云たひ事が有^{今度わするをりハ案内をこふておもてからきさしませ}」か様に夜中にわすれバわごりよ達とハしらいて殊外きづかひな^{シテ}「重て参ると申て^{（も）}」あれが参ならでハ参りませぬ^{御氣遣を被成る、な}^主「でも氣遣な程にさふ心得さしませ^{二人}」心得て御座る^{シテ}「もふおいとま申ませう^主」おりやるか^{三人}「さ^{（？）}らば^{（？）}」^{三人}一所二居テ亭主ハ太鼓座二下ニイル^{二人ハふたいにいて}

主 「なふ^{（？）}」おりやれ^{夢のさめたよふな事じや}^{アト}「其通りじや^{シテ}」何とおもわしますぞ^{これと云も日比わごりよと身共が和哥の道に心をよするに依て天神か玉津嶋の御利生でかなあらふ}^{アト}「其通りでおりやる^{シテ}」さあらば此よるこびに和哥を上て帰らう^{アト}「先わこりよあけさしませ^{シテ}」夫ならば某が上う^{実和哥の道ニハ鬼かミ迄ものふじうとハ}「ふし」か様の事をや申覽^{二人}「実よの常の習にハ盗人をとらへてハ切こそ法と聞物を此盗人ハさわなくて連哥にすけるやさしさに^{（ムカイ合テ）}」喚入てげんぎふし酒一ツ吞せて^{シテ}「太刀^{アト}」かたな^{（二人共にさし出しテ両手ニていたゞき）}^{二人}「たびにけり^{（右へ小廻リスル）}」是かやことのとたとへに盗人においと云事ハか、る事おや申覽^{（返しよ}

り早く出テよし」^{シテ}「なふ聞しまするか」^{アト}「何事ぞ」^{シテ}

「そなたと身共ハ五百八拾年」^{アト}「七まわり」^{二人}「二段と目出

たからふ」^{シテ}「いざこちへおりやれ」^{アト}「心得た」^{シテ}「早う

おりやれ」^{アト}「参る」

〔わたましの発句〕

水に見て月の上成木葉かな

引のけての発句

木末ちりあらわれやせん下紅葉

ワキ

時雨の音をぬすむ松風

第三

闇の比月を哀としのびいて

四句目

さむべき夢そゆるせ鐘の音」

シテアト 共二嶋の物 狂言上下 腰帶 扇 そ、を成出

立よし

主 紅段熨斗目 小サ刀 扇 太刀ヲさけテ出ル 尤長上

下

〔す、をぬすんでみ、をふさくと云か あ、身共ハ殊外うろたへた 惣してとのぬす人事に入テ云テもよし〕

二 子儼児

〔女〕扱も〳能う御寝なる事かな 少座敷へおよらせまして置ふ
〔ト云テ子ヲ笛座の上へねせて上へ小袖をかけて 二〕ねんね〳ト云 是でよう御寝なれよ わらハ、お次へ参て少休息をいたして参りませうぞ 〔ト云テ太鼓座二下ニイル〕^{シテ}
〔是ハ此他りに住者で御座る 某およはずながら初心講を結んで御座る 夫ニ就当月ハ某の番に当つて御座るがいまだ何も用意致さぬに依て何と致さうと存ル所に爰に誰殿と申て大有徳仁が御座る 今宵沙汰なしに一色か二色かりて参らふと存て罷出た 先急で参らふずる 〔ト云テ道行〕 常々皆のうわさを承るに忍びハ宵からつめたが能ひと申 漸暮に及んだ あわれ留守であれかし じゃ【と】 参ル程に是じゃ 此中見ぬ内に普請をせられたと見へた はや表ハこと〴〵立た 扱々奇麗な普請かな これハ近ひ普請と見へた 此分でははいられまひ裏へまわらう 〔ト云テ小廻して〕 定てうらハろはに御座らう さればこそろはなわ まだ扉の手もろくになひ 是ハ垣ばかりじゃ つつと念の入人なれ共どこやら愚かな所が有ル 某の為にハ垣斗がよびが此様なことも有ふと思ふて刃物を用意した 先縄を切う 〔ト云テかきのなわを三所程きる〕 ずかり〳ずか〳 まんまと縄が切た さらば破う めり〳〳 扱も〳した、かになつた 誰も聞付ハせぬがしらぬ 是ハいかな事 某ハ殊外うろたゑたことかな 今のし

た、かになつたを人に聞すまひと思ふて身共が耳をふさいだあ、殊外うるたへた 誰も聞付ぬそうな 此戸をあくると其ま、座敷じや「ト云テ戸ヲ明ルテイ」ざらゝゝ 火がゝゝ「ト云テあとへよりて」火がともしてあるに依て聊尔にははめられまひ 誰もなひ 是ハなせに燈で置たぞ いや是ハ宵に客が有たそうな 茶湯道具が取ちらいて有よ 扱もゝ見事な釜かな 是ハあられがまそうな 此茶碗も見事じや 秘蔵で有ふ どれを一ツかりて参ても此度の当ハざつと済「ト云テ道具を立ていて見るていをする 扱小袖を見て」いや是に結構な小袖がある 是が則座によひ物じや 是に致さふ「ト云テ小袖ヲ取テ見付ル」爰に子をねせて置た なふゝよひ子や 目があひて居るハ ちとだこふか しをらしや だかれうと云て手をさしだいた おりやれ だこう いやゝゝ此様な所に長居ハいらぬ物じや おふだがゝ 御座れゝゝどこゑも行ませぬぞ のふいとおしや 定て二親ハ秘蔵であらう シテ「いや是ハ誰殿にハ似ぬ あ、よいうまれつきじや 此大事の子を広ひ所へひとりねせて置たぞ ちいがわざであらふ ちとわらやゝゝ くつゝゝゝ を、誰がゝ 身共が大に笑ふたに仍テきもをつぶした たがゝ おじひじやぞゝ 何ぞ芸がなるか と、の目やと、の目や にぎゝゝやにぎゝゝ つむりてんゝや れろゝゝゝや お、きげんがなをつた 扱々人おくめんをせぬよひ子じや くつゝゝゝや おふだかゝゝ しをらしや かいつくつてさらば今度ハ肩車に乗う やつとな 「ト云テ右のかたへのせて」

むかい殿のゑのころ まためがさめぬ ころゝゝゝや「かたにのせておどりて 女立テ」女「わこさまを座敷にねさせて置たがお目のさめじぶんしや 参て見う 「ト云テたいヲ見てまゝの方ミテ」 申御座りまするか 主「何事じや 女「しらぬ男がお子様をだいておりまする 主「夫ハ盗人であらう やいゝ盗人がはいつた 裏へ人をまわせ 是にハ某がついて居るぞ 「ト云テかたきぬのかたをぬき太刀ヲぬきシテ柱へ出」 女「なふゝ皆の衆でさせられひ 「はしかゝりにていう」 主「おのれやる事でハないぞ シテ「盗人でハ御座らぬ お座敷を見物にまいました 主「夜中に見物にくるという事ハなひ のかす事でハなひぞ 「ト云テ太刀ふり上ル 女ていしゆの方とめル」 シテ「いや真実盗人でハ御座らぬ 御子様のもりに参りました 主「もりにきたとハにくいやつ の から竹わりにしてやらうぞ 「女とめル」 シテ「とふでもきらずにハおくまひか 主「おんてもない事 「女」申ゝおこさまがあふのふ御座る 其お子をこちへ返せ 「主」のけゝゝ「女ていしゆへとりつく」 シテ「某を命をたすくるならハ此子をそちへもとす 「ト云テ子ヲ下ニ置テにけて行」 「主」ちへ行ぞ にくひやつ の やるまひそゝ 女「のふいとおしの ちやつとこちへ御座れ やれゝゝあふない事で御座つた シテ出立 嶋の物 狂言上下 こしおひ 扇 又かたきぬ なしにもきどうにする

アト主 のしめ 長上下 小サ刀 刀 太刀さけて出ル
女 薄の物 さけ帯 ひなん

○子ハ人形也 薄^薄かうつくしき小袖にても

三 瓜盗人

アト「是ハ此他りで田はたを数多持た者で御座ル 此中ハかれ是致してはたへも見舞まらせなんだ 今日ハ参つて様子を見うと存ル いや是からが身共のはたじや 最早瓜などもじつくり致ス時分じや なふく見事になつた 殊外色づいた いやしぜんけだ物なとがまいつてつるやなど切れハわるひ 案山子を致て置ふ (ト云テか、しをつくる 昔ハ鼓ニ竹を通してうそ吹ノ面をかけすわふの上をさせ大臣ゑほし前の方折テかぶせ竹つへを持せ下の方につなを置也 今ハ鼓ハもちいず わらを鼓程に二所ほど青小縄にてゆひ長サも鼓のたけ程にする)」

シテ「是ハ此他りの者で御座る 今晩去ル方へ夜咄に参る 先急で参らふする いやあれへ参ればいつも夜がふくるに依て今晚ハはやく帰様に致たひが いや是ハ垣が有 なんの垣じやしらぬ (ト云テ他りヲかぎて) 瓜畠じや 扱もくむまひにをかな 殊外じゆつくわ致したそう^{イレズ}な どうぞ是を咄ツ武ツ取たひが いやく瓜田にクツをと^{イレズ}りず李下冠をた、さずと申時ハ近頃ふぎな事でハ御座れ共是ハこらへられぬ 盗も^うが他りに人ハ見へぬかしらぬ いや人ハ見へぬ さいわひは物が有 是で垣をやぶらう (ト云テ常のことくにかきをやふりはある) 扱々おびたしひ事じや 急でとらう (ト云テ一ツ二ツ取まねをする) いや是ハこの葉じや いや思ひ出した(ト)」

夜の瓜おとるにハころびをうツたがよいと承た 急でうとふ (ト云テころひを打ツテ) もはや有ハ (ト云テ取テふところへ入ル) 又爰にも有ルハ (ト云テふところへ入テか、しを見付テきもをつふし) まつひらゆるさせられて被下ひ 重てハふつつりと参りますまひ 左様に物を仰られませねば弥々迷惑に御座る ゆるすと被仰ひ。やあ。申。是ハいかな事 扱もく腹の立事かな か、せじやハ いやよふ作たぞ 其ま、人のよふな よひきもをつぶさせた にくさにもくし つきくずしておけ (ト云テか、しをくす、まねをして下ニ置ク也) 足本のあかい時に急で参らう (ト云テ楽ヤへ入ル) アト「先日見舞ましたれば瓜が殊外様になりました 弥じゆつくわ致さうと存ル 是ハいかな事 いや何者が此様な事をしたぞ つるをも切か、せなどもたをして置 是ハけだ物のわざでハ御座らぬが 扱もくにくい事かな いや今度ハ某が、せになつていませう (ト云テゑほしヲかぶり面をきすほふの上をきて竹杖となわを持そへてこしをかけている) シテ「夕へ去ル方へ参るとて道のはたけに瓜が御座ツたに依て少と取つてまいつてみやげに致たれば殊外むまい瓜じやがはハそちの瓜かとおしヤツたに依て中々身共の手作で御座ルと申たれば余りむまひ程に又持て参る様におしヤツたに依て約束を致した 則今晩持て参るはづで御座る 先取に参らふと存ル 扱々いらぬ事を致してもつて参つて今さらめいわく致す 夜前も殊外きもをつふして御座るに依て何とやらむねがおとツてきびがわるひ。ゑひ。是じや 是ハいかな事 夜前やぶつて置いた垣が其ま、(アル)」

是ハいかな事 扱々手まめな事でハ有ル 又か、せをこしらへて置た 是ハやう人にたハ 是ハ何ぞにならふが いや思ひ出した 近日身共の在所にふりうが有 若某の鬼になる事もあらう さいわひ人も見ず よいけいこばじや程にいざさらば稽古致さう 「ト云テせめ」 なんとやら責ちからかのふてわるひ しぜん罪人に成事もしれぬ さい人の方も稽古致さう 「ト云テ繩両手ニて持首へかけて引はりて」 ゆかんとすれば引と、む と、まねんば杖にてちやうと打 「か、し杖ニテかたをた、く」 是ハいかな事 と、まねんば杖にてちやうと打と云たれば ゑひ つがひにうつたに仍^{（い）}テきもをつふした 「ト云テなわヲ取引テシル」 是じや よひかげんにこしらへた物じや 「又ふしを付テ」 ゆかんとすれハ引と、む と、まれんば杖にてちやうと打 「謡の内ニアトそろく」とすわふや面ヲ取テ」 アト「かつきめ やるまひぞ 「ト云テ杖ニテうつ」 シテ「是ハだまされた アト「なんのだまされた」とハ シテ「はあたすけて被下ひ アト「やるまひぞ」

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇
アト 出立シテ同前

〔後ニアトか、しニ成時すわふの上ヲキテ面を懸大臣ゑほし前へ折つへとつなを右の手ニ持テイル〕

四 盆山

シテ 「是ハ此他りの者デ御座る 爰に「アトノ名ヲ云テ」と申

人が御座る 是が見事な盆山を持れまして御座る 度々所望いたせ共ついにくれられませぬ 今日ハ案内なしに盗ん「デ」参らうと存ル 先急で参らう 何と宿にいらりやうかいられまひかしらぬ事じや ゐやは是じや 此中見ぬ内に普請のせられたと見えた 此び、しいでハ中々はいられまひ さりながら近ひ普請と見えた うらへまわろふ 「ト云テ小廻り」 定て裏ハろはに御座らふ さればこそろはなわ まだへひのてもろくに なひ 是ハ垣斗じや 此様な事もあらふと思ふてはものを用意した 先繩をきろう 「ト云テかきのなわを三所程きる」 ずかりく ずか ずか まんまと繩を切た さらばやぶろう めりく 〔かきを手ニてやふる ずあぶんしつかに左の方へやふりテ〕 めりく 〔両手ニて右の方へやぶる 是きつくむりにやふるてい〕 はあ 「ト云テシテ柱のきわに下ニてみをふさぐ」 扱もくした、かにうろたへた今のなつたを人にきかすまひと思ふて身共が耳をふさいだあ、殊の外うろたへた 誰も聞付ハせぬぞふな さらバ急で垣をこそう 「ト云テ両手ニてかきをおしわけてかた足つ、はいる」 まんまとこゑた 此戸をあくると其ま、座敷じや 「戸明ルテイ」 さらく 火がく 「ト云テあとへ引テ」 火がともしてあるに依てりやうしにハはいられまひ いや是ハ宵に客が有たそうな 茶湯道具が取ちらいて有よ して身共の尋る盆山ハ見へぬ 爰に有ル 扱もく 見事な盆山かな 見つてもみあく石でハなひぞ くれられぬこそどうりなれ 扱もく 扱もく 盆山かな 「ト云テ色々ほめている内に亭主出ル」

「座敷がさわがしい 何事じや さればこそぬす人がはいつた」「かたきぬの右のかたをぬく」やい／＼盗人がはいつた はやうまわれ 是にハ某が居るぞ 「シテうるたヘテアトに行あひかを、見付ル シテ其ま、ほん山のかけにかくる、」 是ハいかな事 「シテノ名ヲ云テ」 内々あの盆山のほしがらる、に某のやらぬに依てわせた物であらう 何とぞめいわくするやうに云たいが 思ひ出した あらふしぎや 盆山のかげに何やら見ゆるハ なんじや 野猫じやハ いやねこと云物ハ人を見て其ま、ふひたりおどす物じやがおどさぬハねこでハ有まひ 人ならば致様が有ル さいわい此太刀でたつた一打にしてやらう ^{シテ}「是ハなかつハ成まひ」「ト云テねこのまねをする アト笑う」アト「ねこじやと云たれば其ま、まねをする 是ハよひなぐさミじや 今のねこハやうない事かな 是ハめがちこふた 猿じやハ さると云物も人を見るとなく物じやが なかつハ人かしらぬまで 人ならば致様が有ル から竹わりにしてやらう ^{シテ}「是りやなかつハ成まひ」「ト云テさるのまねをする アト笑テ」アト「人と猿と見ちがよふ物の様に」「ト云テ又笑テ」今度ハあれが多いわぬ物を云たひが 思ひい出した 扱々今の猿ハよふない事かな 是ハ又ちこふた 珍敷ひ生鯛じやハ いやたひと云物ハひれをのす物じやが さあ／＼のそうぞ 「シテ扇を開テひれのすまねをする」「たいと云物ハおひれをたつる物じやか さあ／＼たてうぞよ」是から尾もたてうぞよ 「しりをのまね扇ニてする」 おひれをのしてからハ程なふ鳴物じや ^{シテ}「たひの鳴様をしらぬが」アト「お

なきやらすハ「但シ」人かしらぬ 人ならハ致様が有ぞ やりをもてこひ ^{シテ}「是ハなかつハ成まひ たひ／＼」アト「鯛たひがいつ物を云た事が有 ^{シテ}「鯛」アト「たひ にくいやつ」の ^{シテ}「あ、助て被下ひ」アト「なんのたすけひやれ やるまいそく」

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

○アト 無色段のしめ 長上下 小サ刀 扇 太刀さけて出ル

〔仁右衛門方ノ勤方〕

「是ハ此他りに住ひ致者テ御座る 此間かなたこなたの盆山くらべハおひた、しい事で御さる 某ハいつれもとくらべまするやうな盆山を持ませぬ 又爰に誰殿と申て盆山ずきが御座るが此仁ハ数を持ていられます程ニ今晚さたなしに参てかりて参らうと存ル 先急テ参らう

○かきを越テ

いやれいのせんすい むかいより見ればちいそう見ゆるがついにうしろより見た事ハないか 是ハ大きなせんすいじや いや此せんすいへ月のくまなくうかんた所ハあ、おもしろいていじや 是ハおひたゞしい木にもかゝる 爰なさ、ハよい所へうゑられた いかさ爰へハうへずハ成まい あ、よい物つきな人ぢや 扱あれにはしが見ゆるがあれままでまはろうか いや／＼あれ迄ハまわりぢや 爰にとびこへが有ル 先是をどひこ^(マ)よう よいとま まんまとこへた よいとひ石かな こふ見た所ハよいけいぢや あ、浦山しい事かな さて身共の尋る盆山

ハどこに有ぞ いつもゑんに数多出しておかるゝが されハこそ是に有ル」

五 金盗左衛門

シテ「是へ罷出る者ハ雲の上の金藤左衛門と云てだひいたづら者で御座る 此比ハ打続て仕合がわるひ けふハ山中へ参て仕合を致さうと存ル」
 「道行」先急で参らうと存ル 何と今日も仕合があれハよふ御座るが 則爰元が人里も遠しき場もよひ程に是にまどふ
 「ト云テ笛座の上二下に居る」
 アト「わらハ、此山のもとの者で御座る 山のあなたに親里を持て御座る 久敷見舞ませぬ程にけふハ見舞ふとおもひまする 先急で参らふ」
 「小袋おは初よりつむりにのせて置ク 道行一返廻る」
 山道とハいゝながらいつもかよひつけた道で御座るに依て人もつれずわらハひとり出て御座る 此度もゆるりとなくそふで帰らふと思ひまする
 シテ「やいゝそこへ行女 おのれハどこへ行者じや」
 アト「どこへゆこふとかまふての用ハ」
 シテ「其袋をおいてゆけ」
 アト「なふをそろしい事を云者が有ル 他りに誰もないかのふ」
 シテ「やいゝ何をかしまういゝをる 其袋さへ置て行は命を助てとらせう」
 アト「是ハわらハが手道具で御座る程に進ずる事ハ成まひ」
 シテ「扱ハおのれハ某がとうぞくを事のしらぬと見へた さらば書た物をよふできかせう」
 「ト云テふところより文出してよむ」
 何々雲の上の金藤左衛門がとうぞくの事 「ひとつなんによによらず」 何にてもとら

る、物あらばとるべし 手ごわき物ならバはないてやるべし
 おのれ此様なかないた物をもつたをしらいで其つれを云と見へた
 どうでもとらいでハおかぬ 早ふおこせい」
 アト「其義ならばわらハ女成共おめゝとやる物でハないぞ」
 シテ「しかとおこすまひか」
 アト「思ひもよらぬ事 やる事でハないぞ」
 「ツメテ」
 シテ「夫ならばおのれ長刀にのせてくれう 是でもおこすまいか」
 「ト云テ切テかかる」
 アト「あゝやりませう」
 シテ「急でおこせ」
 アト「夫ならバ進上」
 「ト云テ袋ヲ下二置シテ長刀のいし付ニテ引よせる」
 シテ「命おもとらうとおもへ共助てやる程にはやうどちへぞうせおれ」
 アト「命さへ助て被下るゝならば爰元にいまする事でハ御座らぬ」
 シテ「夫ならば早ふどちへなりともゆけ」
 アト「おる事でハ御座らぬ」
 シテ「まだそこにおるか」
 「女はしかゝりへにけて行 一の松にて下二いる」
 シテハあとを見おくりてふたいへ行 大臣柱の方二下にて長刀をば右ノ方二置」
 此なかにハ何が有ぞしらぬ
 「小袖を取出して見ルを女見付て」
 アト「是ハいかな事 わらハが大事の小袖をだしおつた 何とぞして取たい事じやが」
 シテ「是ハいかな事 けつこつな小袖が有ルハ 女共が上ぎをほしがつた程に先是をやらう」
 扱もゝ見事な鏡が有
 「アト」又かゞミをだした あれハたいせつなかゞみじやが
 くもらせねばよひが きのとくな事じや」
 シテ「女共の鏡は錢のまわり程ハなひに依て大きな鏡をほしがつたに是を女共にとらせう まだ何が有ぞしらぬ かもしもある」
 「アト」かもしをもだした あゝたれぞとをれバよいか」
 シテ「是ハ猶々

女共が調法じや おれが女房ハかミが十すじ程ならでハなひ
 是を入させたらばよからふ べにざらまで有 (アト)「何とぞ
 してとりた事じやが何とした物であらう」と云テ其内ニ長刀
 を見付てそりくはしか、りよりぶたいへぬき足にて出長
 刀のいしづきをそつととりて又はしが、りへ行 (シ)「先此長刀
 をとればよい」と云テいて (シテ)「幸ひの事じや 女共が口
 びるハあをひに依て常々見くるしいと思ふたに此べにを付させ
 たらば定てしをらしうならう (シテ段々見て又元の様に袋へ
 皆入ル時女ぶたいへ出テ長刀をついて) (アト)「やいわ男め よ
 ふわらハが大事の手道具をよふと思ふたなあ おのれた
 つた一打にしてやらふぞ 夫をかへすまひか」(ト云テ女
 長刀ふりて見せる) (シテ)「やい」(ト云テ)「おのれハ其長刀をなぜとつ
 た ちへ帰せ 返さす仕様が有 (アト)「にくいことを云おる
 早う手道具を歸せひ 返さすハおのれ切ころしてのきやうぞ
 シテ「おのれ女だてらだいたんな事を云 しかと長刀をおこ
 すまいか (ト云テにぎりこぶしヲしてかゝる) (アト)「まだ其
 つれを云おる (おのれ) 其手を打おとしてのきよう (きうに
 きてつかゝる) (シテ)「やい」(ト云テ)「あぶなひ事をしをる (ト云テ
 めいわくする 女いよ」(ト云テ)「きしよくをする」(アト)「おのれがさ
 いたをおこせひ (シテ)「女だてら刀を何にする (アト)「はよふお
 こせい おこすまいか (切かゝル) (シテ)「やるぞ」(ト云テ)「こり
 や」(ト云テ)「女取テこしにさし」(アト)「其袋もおこせひ (シテ)「さ
 あ」(ト云テ)「是も返す (皆々なげて返す) (アト)「わらはをなぶつた
 がよいか おのれ もとぐひをきりはなさねばきかぬ (シテ)

「あ、かなしや せめて命をば助てくれひ (アト)「なんの (命
 ヲ) たすけい どれへうせおる (シテ)「あ、助てくれひ (アト
 「やるまいぞ」

シテ 厚板 狂言袴括ル 麻くず頭巾 髭掛ル 小サ刀

上ニ厚板ヲつ折ニして文懷中する 長刀ヲ持テ出ル
 アト女 薄の物 さけ帯 びなん 小袋 中ニはく かも
 し かゞミ べに (おしろい) まへはき入テつむり
 へかついで出ル

六 磁石

アト「是ハ東国方の者で御座る 某都を一見致さうと存て罷出
 た 先急で参らうずる 若ひ時に国を廣う見ておかねば年寄で
 物語がなひと申に依てふと思ひ立て御座る 参る程に是ハどこ
 じや 尾張じや 誠ニ尾張ハ山も見へず た、びやう」(ト
 広ひ国じや 先急で参らふずる 殊の外道のはかが参る 是ハ
 どこじや 近江じや 誠に近江ハ二十四郡拾二郡ハ海じやと申
 が誠で御座る あ、打ひらひた海で御座る 其元のにぎやかな
 ハ何ンじや 坂本の市じや 是 (ハ) 幸の所へ参た 少と見物
 致そうと存ル 是は茶湯道具と見えた (此道具を見テイル内
 シテ出テ名乗) (シテ)「是ハ此他で心のすぐにもなひ者で御座ル
 此間ハ打続て仕合が悪う御座る 今日ハ罷出一仕合致うと存
 ル 先急で参らふずる 何と仕合があればよふ御座ルが (アト
 道具を見て居るヲ見付テ) 是に何者やら道具に見入て居る

致様が有ル のふ久しうおりやる 「アトしらぬかほしてい
 る」是はいかな事 めのさやのはつれたやつじや さりながら
 某のかゝつてハやる事でハなひ アト「是ハ子共のもて遊びと
 見へた「アトのまねをして」 シテ「はて扱わごりよハ久しう
 でおふたなふ アト「そなたハさいぜんから久しひ」とおし
 や「ル」か身共ハしらぬぞや シテ「そなたハ物の人じやハ
 アト「おふ某ハ物の物じや シテ「そなたハ アト「三河の者じや
 シテ「夫々三河の者」 アト「三河にとつても岡崎 シテ「岡
 崎 アト「おかざきの橋を渡つて シテ「わたる」 アト「右へ
 きりりと廻つて シテ「廻つて「アトノ云アトヨリ云」 アト
 「高もがりの 同「となりの家の内の「シテモ同しヤウニイ
 ウ」者で「シテハ候ト云」 なひ シテ「なひ」 某がよふ
 してゐる程に有様にいわしませ アト「はてわこりよハよふ
 しらしました「某ハ遠江の見付の者じや シテ「夫々見付の人
 シテ「ひだりへ アト「廻りそふでまわらぬ シテ「まわらぬ」
 アト「はてわこりよハよふしらしました シテ「おふしつてあ
 る アト「白壁作りの隣の シテ「となりの アト「ちいさい家の
 内の シテ「内の アト「者で シテ「者で アト「候 シテ「候々
 夫でおりやる アト「はてわこりよハよふしらしました シテ
 「そなたのおばにおふ アト「お寮か シテ「おふ其お寮様ハ御息
 災なか アト「中々息災でおりやる シテ「身共ハ其お寮様にだ
 きそたてられた物じや アト「扱ハ頭にたいじなひちか「づ」
 きが有ル」といわれたが扱ハわこりよが事であらう シテ

「おんでもない事 みが事」 同「ひとたびハ参つてお礼
 をも申筈じやが其段ハゆるして呉さしませ アト「少もくるし
 うなひ事でおりやる シテ「扱わこりよハ今時分くる人でハな
 ひが何としてきさしましたぞ アト「親共が知つて御座らふな
 らば中々おこす事でハなひが忍で登つておりやる シテ「そふ
 見えた 定て爰許不案内にあらふ 某が引廻しておませう
 アト「夫ハ忝なふ御座る シテ「さあ」おりやれ」 アト「心
 得ました シテ「是が天津松本と云てつと不用心な所じや
 細ものなどがあらバ某におわたしやれ アト「成程わたしませ
 う シテ「是ハ石山の観世音と申てげんぶつしやじや 是へも
 お参りやれ アト「心得て御座る シテ「是に某のいつも泊る定
 宿がある 是へとまらしませ アト「心得ました シテ「こふ通
 しませ アト「通つてもくるしう御座らぬか シテ「中々 アト
 「某ハ草臥てふせりとふ御座ルが寝る事ハ成ますまひか シテ
 「安事 おねやれ 某ハ是二居るぞ「ト云トアトねル」亭主
 御座ルか ヤト「誰で御座ル いやそなたか シテ「中々 ヤト
 「わこりよを待兼て居た 先度のやつハ役に立ぬ シテ「やあ
 役いた、ぬ ヤト「中々 シテ「たまらぬりはつそうなもの
 じやが ヤト「見かけハリこうそうなが仕ふてみてつと鈍な
 物じや シテ「夫ならバよひ事が有ル けふつかひざかりの若
 ひ者を同道して表にねかせて置た あれと取替ておませう
 「シテていしゆとはなしの内ニアトヲキテはなしをき、」
 ヤト「して国ハどこ元じや シテ「云まいとしたを漸とひ落たれ
 ば遠江の見付の者じや ヤト「先国がゆかしひ 同「夫ならば取

かへてくれさしませ^{シテ}「夫に就てあした六ツ太鼓の時分に鳥目が式百疋入程にかしてくれさしませ^{ヤト}」「心得ておりやる^{シテ}」「きやが心元ない^{ヤト}」某ハあれへ行ぞ^{シテ}「ト云前二アトしらぬかほして又ねている」^{ヤト}「はやうゆかしませ^{シテ}」「心得た^{シテ}」「ト云テアトのねている所へきて」湯でも茶でもおのミやらぬかや^{ヤト}「某も是にぬるぞ^{シテ}」「シテねルトアトヲきて立テシテ柱へ行テ」^{アト}「是ハいかなこと^{シテ}」某をよふしつた者かと存たれば日本一の人売に出よふた^{ヤト}「足をはかりに^{シテ}」「にぎやうと存ル」乍去よいに承れば某を鳥目式百疋にねないてあした六ツ太鼓の時分に請取うの渡さふのと申て御座る^{ヤト}「是を取て路銀に致さうと存ル^{シテ}」「ト云テ下ニイテふたいた、く」^{ヤト}「おひ^{シテ}」「ト云テ両手の上二のせた心ニて出スていする^{ヤト}」「アトたまつて請取テこしへまくていする」^{アト}「先急て参らう^{シテ}」「ト云テ目付柱より大臣柱の方へ行」が殊外夜ふかな^{ヤト}「先是ニまどろもう^{シテ}」「ト云テ下ニイルトシテヲキル^{ヤト}」キモヲツブシテ^{シテ}「む、わ^{ヤト}」夜が明た^{シテ}「ト云テシテ柱ニて下ニイテふたひをた、く^{ヤト}」^{亭主}「たれじや^{シテ}」「ト云^{シテ}」「夕への物、く」^{ヤト}「夕への者ハわたした^{シテ}」「やあ、く渡した^{ヤト}」「中々^{ヤト}」身共ハ請取ぬ^{シテ}「先爰を明さしませ^{ヤト}」「亭主ざら、くト云テ^{ヤト}」「そなたか^{シテ}」「中々^{シテ}」あ、夕へのやつがしてのいた物であらふ^{ヤト}「あ、夫ハ合点がゆかぬ^{シテ}」「先またしませ^{シテ}」「ト云テアトノねた所をさくりミテ」行ともとをひハゆくまひ^{ヤト}「きやつがねた所が如來はだな^{シテ}」某ハおつかけてみようと思ふ^{ヤト}「是ハ一段とよからふ^{シテ}」「シテゆこうとして」^{シテ}「が某ハ無刀

じや^{ヤト}」何ぞきれ物をかさしませ^{シテ}「是ハ十代じや程にきずを付ぬやうにさしませ^{シテ}」「心得た^{ヤト}」あとの事ハ頼ぞ^{ヤト}「何が扱心得ておりやる^{シテ}」はやうゆかしませ^{シテ}「ト云テ亭主ハ太鼓座ニイル^{シテ}」シテ目付柱の方より正面へ行^{シテ}「はて扱にくひ事で御座る^{シテ}」先急て参らう^{アト}「もはや夜が明た^{シテ}」先そろり、くと参らうずる^{シテ}「ト云テ正面のまん中ニて行合テ」^{シテ}「がつきめ^{シテ}」やる事でハないぞ^{アト}「人売よ、く」^{シテ}「おのれこそ人売なれ^{シテ}」たつた一打にしてやらふぞ^{アト}「まひやいの延たやつじや^{シテ}」少とおどそう^{シテ}「ト云テ両手をにきりよこはらへあて口をあきて」あ、く^{シテ}「やいそこなやつ^{アト}」「なんじや^{シテ}」「おのれは何者なれハ此太刀をぬいてきしろ打てか、るにあ、くと云ハ何者じや^{アト}」「扱ハ某をしらぬか^{シテ}」「い、やしらぬ^{アト}」「唐と天竺のさかひにぎしやくせんと云山が有ル^{シテ}」其山ニ住む磁石成ルがけさも式百疋の鳥目をのふだれば唐金で喉につかへてわるひ^{シテ}「汝がぬいた太刀ハ銘一ツか、ゑた物とミゑた^{シテ}」きつさきからなかごさきまでたつたひとのミにしてやらう^{シテ}「あ、く」^{シテ}「いかに磁石にてもあれぎしやくにてもあれ^{シテ}」此太刀がのまればのふでみさしませ^{シテ}「かちらたけわりにたつた一打にしてやらう^{シテ}」「ト云テ打か、ル時アトかを、引テ太刀を引ト又向い出ス」^{アト}「あ、く」^{シテ}「是ハいかな事^{シテ}」きや^{シテ}「ツ」があ、くと申に依て見て御座れば今迄水のたる様な太刀がどんどりと致した^{アト}「やひ磁石^{アト}」「なんじや^{シテ}」「此太刀をこふ見すれば何と有ぞ^{アト}」「心がせひ、くとなる^{シテ}」「かくせば^{アト}」「きがとほふなる^{シテ}」「夫

手ヲかける」^{アト}「いや某の物じや」^{シテ}「どうでもこちへよこせ」^{アト}「ヤル事ハならぬ」^{シテ}「やれおふちやく者　誰も御座らぬか　二人」^{目代}「出合／＼」^{目代}「やい／＼やいそこのもの　汝等ハ何事を云　アト」^{目代}「身共のさげております太刀をあひつがとらうと申まする」^{シテ}「私のはいています太刀をとらふと申まする」^{目代}「どふあらふ共是をば某にあづけひ　アト」^{目代}「こなたにあづけ置まする程に構てあひつにやらせられまするな」^{目代}「中々やる事でハなひぞ」^{シテ}「申あづけます　かまへてあの者にやらせらるゝな」^{目代}「中々渡す事でハなひ　ト云テ目代太刀を請取テ正面二下ニ置」^{アト}「扱々おふちやくなや（ツ）じや」^{シテ}「はてにくい事かな」^{目代}「やい／＼汝等ハ此納た御代に何事を云　アト」^{目代}「してこなたハどなたで御座ル」^{目代}「所の目代じや　アト」^{目代}「先お礼を申まする」^{目代}「礼迄も有まい　何事を云た　アト」^{目代}「某ハ田舎者で御座ルが爰に売物によねんもなふ見いつておりましたバあれ／＼」（少出テシテノ方ヲ見る）あそこなやつが某の持てをりまする太刀をいつのまにやらそろりとはきまして夫をおこせひと申せ共よこすまいと申てかへつて雑言の申まする　是ハラうぜき者で御座る程に急度仰付られて被下ませひ　^{目代}「扱ハ汝のか　アト」^{目代}「中々私ので御座る」^{目代}「そちが口斗でハしれぬ　あれにもきこう　夫にまでアト」^{目代}「畏て御座る　目代」^{目代}「やい／＼汝ハ何事をわつはと云　シテ」^{目代}「してこなたハどなたで御座ル　目代」^{目代}「此所の目代じや　アト」^{目代}「は先お礼申まする　目代」^{目代}「只今ハ何事を云たぞ　シテ」^{目代}「某ハ田舎者で御座るが爰に売物によねんもなふ見いつておりましたれたる

ば「ト云テ出テアトノ方ヲ見て」あれ／＼あそこなやつが「イツノマニヤラマイツテ」某のはいておりまする太刀へ手をかけ物じやと申まする 是はらうぜき者で御座る程に急度仰付られて被下ませひ 目代「扱ハ汝がのがじやうか シテ「中々私ので御座る 目代「やい／＼あれが「ぢや」と云に汝ハむさとした事を云 アト「扱ハあれがじやと申まするか 目代「中々アト「扱も／＼だいたんなやつが御ざりまする いや某の太刀のせうこにハ国銘作を申ませうがあひつハゑ申ますまひ 目代「誠に是ハよひせうこじや アト「はあ 目代「あれにも様子を聞う程に夫にまで アト「畏て御座る 目代「やい／＼シテ「やあ 目代「あれが太刀のせうこにハ国銘作を空で覚てゐる今成其身が前でいわふと云が汝ハいうか シテ「あのいおふと申まするか 目代「中々云共 シテ「扱も／＼代にハだいたんなやつが御座りまする 我が物でなふてさへいわふと申まするにまして某の太刀で御座ル物を申ませいでハさりながらあつハゑ申ますまひ程に先あれからいゑと仰られませひ 目代「心得た さあ／＼先汝からいゑ アト「畏て御座る 先あれハ備前物で御座ル 備前にとつても長光 ながハちやうのじ みつはひかると申字で御座る 目代「奇特と云た あれにも其通りをきこふ さあ／＼汝も急ていへ シテ「畏て御座る「シテ目代のうしろにてそろ／＼と聞云テ目代のむきそうな時ハかまハぬかほしている」先あれハ備前物で御座る びぜんにとつても長光 ながハてうの字 光ハこふ／＼「ト云テ光の字ヲ正面の方へ扇ニてかくまね」 ひかると申字で御座る 私ハ字迄寛

ておりまする 目代 「む、慥な事じや やきハなんと有ルぞ

アト 「はゞきもとから物打迄桜の花をかさねたごとくくわつ／＼とかさなりまして扱物打から上へ大のたれにのたれてきつさきとなつてやき返しが御座つて見事なやきで御座る 〔是もアト目代へ云ヲ聞まねをする〕 目代 「是ハ見事に」 そふであらふとも やきハなんと有ルぞ 「アトの通り云」 是ハふしぎな事じや 「ト云テアトノ方へ行テ」 じはだハ アト 「物にたとへ〔テ申〕まぜうならば霜月しわすの水の上へ薄雪などのさつとふりかゝつたごとくさながらおこりも落さうな太刀で御座る 目代 「そふであらふ共 じはだハ何と有ルぞ シテ 「物にたとへて申まぜうならば霜月師走の水の上へ薄雪などのさつと降かゝりました」 ごとくさながらおこりも落さふな太刀で御座る 〔アトノヲ聞其通りヲ云 さつとふりかゝりましたと云所手にてしかたする〕 目代 「やい アト 「や 目代 「いやそちが云もあの者の云も少もかわぬハ合点のゆかぬ事じや アト 「あ、仰らる、〔二〕付て思ひだいて御座る 某ハ田舎者で御ざるに依て物をこふせうに申たをきやつが聞て申物で御座らふ すんの申ませう程二是を御座りませひ 目代 「心得た 〔大臣柱のわきへよひアト目代の耳へさゝやくていする〕 アト 「すんな是で御座ります 〔シテも目代のうしろへ付テ行きこふとするさゝやく故二きこゑす シテはしかゝりの方へゆこうとするを〕 目代 「やい／＼どこへ行 先こちへこひ シテ 「や 目代 「汝もすんのいへ シテ 「すんハもふよう御座ります 目代 「よいといわずといへの シテ 「すんハ桜の花をかさねたごとくく

アト 「申々口がちがひまして御座る はかせられませひ シテ

「おのれハそこにすつこんでおれ 〔ト云テアトヲつきたをす〕

目代 「いわれぬ事をいわずともすんのいわぬか シテ 「霜月し

わすの アト 「又口がちがひました はがせられませ 目代 「心得た にくいやつ 〔ト云テ二人して羽折の上二細帯してい

る夫をときはおりをはく〕 シテ 「いやもゆるして被下ひ 目代

「なんのゆるせとハ シテ 「あゝ助て被下ひ 二人 「やるまいそ

／＼ 〔アトハ太刀を持テおつかくる〕

〔正本ノ通

「みつハくわう共又光ルト申字で御座る 私ハよミこへまで致

しておりまする

「物にたとへ候へハ物打迄ハ桜の花をかさねたごとくにくわ／＼

と乱まして扱物打から上ハ大のたれにのたれてきつさきとなつ

てやきかへしが御座つて見事なやきで御座る ウスコウ

「物にたとへませうならば霜月しわすの水の上 〔二〕うす雪

などのさつとふりましたやうに見事て御座る〕

シテ出立 嶋の物 狂言袴 腰帯 たすきかけ 小袋さけ

帯 ふくさ 何二てもゆい付ル 上羽織ヲきて帯する

布切二ても吉

アト 嶋ニテモのしめ二ても 狂言袴ク、ル 肩衣 腰帯

扇 太刀さけて出ル

目代 のしめ 長上下 小サ刀 扇

八 茶壺

〔酒によふて出ル こしかけをおふて出ル 橋かゝりにて小謡うとう〕きんちやうのもとゝわん^(ママ)ろさんの雨のよ そうあんの内ぞおもわる、此謡が又ハ^(ママ)のめたのもしき春もちゝの花さかり ニても此内一番うとふてよし〕

アト「あゝよふたよ 道が二すしにも三すじにも見ゆる 是じやいかりやせまひ 爰ににやう 〔ト云テ右ノ手ヲ枕ニして左りのかたをはつして〕 シテ「是ハ此他りで心のすぐにもなひ者で御座る 此中ハ打つゝいて仕合があしう御座る 今日ハ昆陽野のしゆくあたりに罷出何ぞ一仕合致さふと存ル 何と仕合があればよふ御座ルが 〔ト云テアトにいきかゝり見つくる〕」

是ハいかな事 爰に何者やらよねんもなふねいつて居る やい／＼爰ハ海道じや おきてゆけやい そこな物 やい／＼ 〔ト云テおこす アト〕む、と云テのひをする 〕む さかく

さい事かな 思ふまゝにたべたと見へたよ みれば何やらよさそうな物をせおふてゐる 致やうが有ル 〔ト云テアトノ左りのかたをはつしたるこしかけのひはへ左り手ヲ入ねル〕 アト

「む、あゝ、は 是ハ海道にねた 是ハいかな事 やい／＼そこな者やひ シテ「む アト「こゝはなせ シテ「是ハ身共のじや アト「いや某の物じや シテ「どうでもこちへよこせ アト「やる

事ハならぬ 〔シテ〕やれおふちやく者たれも御座らぬか ト云テせりやう内に目代出る 目代「やい／＼やいそこな者 汝

等ハ何事を云 アト「某の物をあれがとらふと申まする シテ

「身共の物をあいつかとらうと申まする 目代「どうあらふ共是をバ某にあづけい アト「こなたにあつけ置ます程二かまへてあひつにやらせられまするな 目代「中々やる事でハなひぞ

シテ「申あづけまする かまへてあの者にやらせらるゝな 目代「中々渡す事でハなひ 〔ト云テ目代こしかけを正面ニ持テ行内ニシテアトノことば〕 アト「扱々おうちやくなやつじや

シテ「はてにいくいやつかな 目代「やひ／＼汝等は此治た御代に何事を云 アト「してこなたハどなたで御座ル 目代「此様な事をさばく者じや アト「扱ハ目代殿で御座ルか 目代「中々 アト

「先お礼を申まする 目代「して只今ハ何事を云たぞ アト「先あれハ茶壺で御座る 某ハ中国の者で御座るが榎の尾へ茶をつめに参て路次で殊外御酒に被下よひまして是によねんものふねいつておりましたれバあれ／＼あそこなやつがいつのまにやら

参つて某のいつほうのかたをはづいておのれがうでをさしこふで我が物じやと申まする ろうぜき者で御座る程に是をハ急度と被仰付て被下ませ 目代「扱ハ汝がのか アト「中々 目代「そ

ちが口斗でハしれぬ あれにもきこう 夫にまで アト「畏て御座る 目代「やい／＼汝ハ何事をわつとはと云 シテ「してこなたハどなたで御座る 目代「此所の目代じや シテ「はあ先お礼を申まする 目代「して今ハ何を云たぞ シテ「某ハ中国の者で

御座ルが榎の尾へ茶をつめに参て路次で殊外御酒にたべよひまして是によねんもなふせつておりましたればあれ／＼あそこなやつがいつのまにやら参て某の一方のかたをはづいておの

れがうでをさしこふで我のじやと申まする 是はろうぜき者で御座る程に急度被仰付て被下ませ 目代「あれハ汝がのがじやうか シテ「中々わたくしので御座る 目代「やい／＼あれがじやと云が汝ハむさとした事を云 アト「扱ハあれがじやと申まするか 目代「中々 アト「扱も／＼だいたんなやつが御座りまする いわばぬわしてをかせられひ 某の壺のせうこにハ中に入日記が御座る こと／＼く空で覚ておりまする 只今なりともお前で申ませうがあひつハゑ申しますまひ 目代「誠に是ハよひしやうこじや アト「はあ 目代「あれにも様子を聞う程に夫にまで アト「畏て御座る 目代「やい／＼ シテ「やあ 目代「あれが壺のせうこにハ中に入日記が有を今成共身が前でそらでおうと云が汝ハゆうか シテ「あのいおふと申まするか 目代「中々云共 シテ「いや代にハだいたんなやつが御座りますわが物でうてさへいわうと申まするにまして某の御座る物を申ませひでハ さりながらあひつハゑ申しますまひ程に先あれからいわばいへと被仰ませひ 目代「心得た さあ／＼先汝からいへ アト「畏て御座る とてももの事にふしを付て申ませう 目代「こりやよからう フシ アト「我が物ゆゑにはねをる／＼心の内ぞおかしき 「地ヲトル」 アト「左候へばこうそうさ候へばこそ おれが主殿ハ中国一の法師にてひの茶をたてん事なし 一族のよりやひに本の茶をたてんと五十貫のくりを持 おふくの足をつかふて兵庫の津にもついたり 兵庫を立て二日に梅の尾にもつきしかば峯の坊谷の坊殊に名譽しけるハあかひの坊のほさを拾斤斗かひ入れうしろに急度せおふて兵庫をさ

して下れハ昆陽野々宿の遊女が袖をじつとひかへていまやうをらうゑひしをりはぎをうとふておさへて酒をしひたり 酒にようてねたるを日本一の太ふの古博奕打が来つて我が物と申を判断なしてたび給へ 所の検断殿様 目代「寄特と云たよ アト「はあ 目代「さあ／＼汝もいそいでゐる シテ「心得ました とももの事にふしを付て申ませう 目代「よからふ 「シテアトノ通り云也 仕舞も同前なり」 シテ「所の検断殿様 目代「きどくと云たよ シテ「はあ 目代「今のを聞ひたか アト「中々承て御座ル マミとくと申上て御座る 目代「やい是でハ両方がたいようなによつてりひが付られぬ 某のおもふハどふをんにいわせてどち成ともちこふた方をくせ事に云付ル程にさふ心得へ アト「畏て御座る ○ 目代「さいせんのでハリひか付にくひ今度ハ同音にいわせてどち成共ちこふた方をくせ事に云付る 「○次」 汝もそう心得い シテ「はあ 目代「さあ／＼急でいへ アト「畏て御座る おのれハいおふと思ふか シテ「いわひでなんとせう アト「おうちやく者か シテ「だひたんなやつかな アト「にくいやつ 「アトシテニはりかゝる シテもはりかゝるていにてむかへべし 目代両方ヲトムル」 目代「いわれぬ事をいわずとはよいいへの 二入「はあ 「シテアトノまねヲスル」 アト「我が物ゆゑにはねをる／＼ 「アドよりハあとより云」 二入「心の内ぞをかしき 「地ヲ取テ」 アト「さ候へバこそう左候へバこそ おれが主殿ハ中国一の法師にてひの茶を シテ「ひの茶を アト「たてん事なし 一族の寄合に本の茶をたてんと五十貫のくりを持 おふく足をつこふて兵庫の津二も

シテ「もう アト「ついたり^(ママ) 兵庫を立て二日に梶尾にもつき

しかば峯の坊谷の坊殊にめいよしけるハあかひの坊のほさを十斤斗かい入うしろに急度せおふて兵庫をさして下れば昆陽野々宿の遊女が袖を シテ「袖を アト「じひ シテ「じひ アト

「じひとひかへて今やうをらう多ひしほりはぎをうとふておさへて酒をしひたり 酒によふてねたるを日本一の大ふのふるばくち打がきたつて 二人「我が物と申を判断なしてたび給へ

所の検断殿様 (シテアトノまねをする ふちやうほうニしてよし ひやうしもわるくふむ也 アトハたますふりにて仕舞をする) 目代「兩人ながらきどくと云た 二人「はあ 目代「さあ

／＼つとはへでひ 二人「畏て御座る 目代「是を汝にやればあれがうらむる 又そちにくればあの者がうらみおうくる

昔からも論ずる物ハ中からとれと云 是をば某のにするぞ アト「わが物にもならぬ シテ「我物にもならぬ アト「しらく

二人「やれおふちやくもの^{ヤルマイゾヒキヤウモ}の やるまひぞ シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇 (連哥盗人)より猶

そゝを成がよし
アト出立 同前 袴クハル 茶壺をうしろにおふて出ル
腰懸ニひなん付てよし
目代 のしめ 長上下 小サ刀 扇

九 筍

アト「是ハ此他りてはたを数多持た者て御座ル 此中は一円に

隙が御座らぬに依て見舞ませぬ 何と二三日参らぬ内に定て色

付ひてあらふ はや是从からか身共のぢや 扱々此中見まわぬ内に何もかもよふなつた いや是はいかな事 竹の子 是ハぬか

すハ成まい (両手ニてぬくまねをする) ほん 是ハたくさんな事かな も二三本ぬいてみやけに致そう (テカケヌクマネヲスル) シテ「やい／＼やいそこな者 (右ノ足ヲ引テ出る)

アト「こちの事か シテ「なせに竹の子をぬく アト「そちのハぬかぬ なかもふぞ シテ「かもふなとハ 身共のやふからきた筍を其ごとくにぬいてもぬかせまいかな アト「それハ誰が

シテ「身共か (アト笑テ) アト「はてさて我がまゝな 其様な事ハをけいの シテ「してそれハ誠か アト「誠じや シテ「心実

か アト「しんしつじや シテ「いちせうか アト「一定ぢや シテ「にくいやつ^{アト}の 「あゝあぶない 誰も御座らぬか やれ出

合／＼ 目代「やい／＼是ハらうぜき 何事じや 先そこをひらけ やい／＼只今は何事云たぞ アト「してこなたハとな

て御座る 目代「此様な事をひはんする者ぢや アト「扱ハ目代殿て御座るか 目代「中々 アト「先お聞なされて被下ませい

私のミねんぐを立てつくる田へ筍かはへましたに依てぬいて御座ればぬかすまいと申てあのしたゝかなほうを持まして私をてうちやく致しまする らうせき者て御座ル程に急度仰付られて被下ませい 目代「そちが口ばかりでハしれぬ あれが口をもき

こふ 夫にまで アト「畏て御座る 目代「やい／＼唯今ハ何事を云たぞ シテ「してこなたハとなて御座ル 目代「此様な事をさばく者ぢや シテ「扱ハ目代殿て御座ルか 目代「中々 シテ

「其義ならハ先お礼を申ます 別にれうじハ申さぬ 是よりあれまでか某のやふて御ざるかそれよりねをさしました筈をぬくに依てぬく^{シテ}と申して御座る 目代「いや／＼それハきこへぬ もとよりあれがはたなれバナにをまこうともとり其上あれがミねんぐを出す田畑にはへた物をとらすまいと云ハなんぢの^{シテ}かあやまりじや 目代「それならはいよ／＼ことわりが御座る 此いせんあれかうしが私のまやへ参子をうミまして御座るをがれ^{シテ}か見付おや子共につれて帰りました あれがミねんぐを出すはたゑ某が竹が根をさした筈を取ルと申さば我等のミねんぐを納ル家へ参てうんだ其牛の子をとると被仰い 目代「ふう是ハ尤な やい今のを聞たか 目代「中々承て御座るか筈をぬいたと申て時すきたうしの子をとらふと云やうなきすいな事か有物で御座るか 目代「是でハリひがわけにくい あさをもしろいくじなれバ某の思ふハ是によそへて当座「ヲ」よませて其できた方へりを付ふ 是より外にわけよふがない 目代「中々私ハよませう あれもよむか」とわせられい 目代「心得た今の分^{シテ}でハリひか付られぬに仍テ哥を一首よませて其かちまけに依てりひを付ふと云たればあの者ハ哥をよもふと云がそちもよもふか 目代「あれさへよミますならバ身共もよミませふ まづあれからよめと仰せられい 目代「心得た さあ／＼急てよめ 目代「こふも御座りませふか 目代「なんと 目代「わがはたへとなりの竹のねをさいておもしろうけぬ筈ぞとる 目代「できた さあ／＼よめ 目代「わかまやへとなりの牛が子をう^{シテ}ミて思ひも^{シテ}うけぬ牛の子ぞとる 目代「きとくとうようだ」(ト云

テアトへ) やい／＼是でハ両方がたいようなに仍テりひが付られぬ 今度ハ何をせうぞ 目代「私ハすまふを取ませふ あれにもとるか聞せられい 目代「心得た やい 目代「やあ 目代「今のでハ両方がたいよふなに依てりひか付られぬ 今度ハ何をするぞと云たればあれハすもふをとらふと云か汝もとるか 目代「某ハ成ますまい 目代「なせに 目代「御らふしらるゝごとく 目代「とらねハなんじかまけじやぞよ 目代「まけで御座る 目代「中々 目代「それならバ取ませう 目代「とらう 目代「中々 目代「さあ／＼とらふと云程に急でとれ 目代「畏て御座る 目代「身共の行事をせう 目代「頼上まする (二人トモニ立ならひ) 目代「おてつ 目代「やあ／＼」(シテアトヲほうにてうとふとする) 目代「あゝあふない 先まで 目代「是ハ何事ぢや 目代「あのほうをとれと仰られい 目代「心得た 其ほうをとれと云ハ 目代「私ハ此ほうが一方のすねで御座るに仍テとる事ハならぬと仰られい 目代「尤しや 今のを聞いたか 目代「中々承て御座るか あれハすもふと申物でハ御座らぬ かちあいと申物で御座る 目代「どふなりとしてとれ 目代「あのほうに取つくようにゐたいたらバよ御座らうか 目代「ぜひに及ませぬ とらふと仰られい 目代「心得た さあ／＼とれ 目代「はあ 目代「おてつ 目代「やあ (ト云テ両方へとんでシテハほうにてくわそうとする アトハほうへ取つこうとする也 又とふ所をアトほうへ取つくと一返廻し又廻り返してシテをなぐる) 目代「見えたか (こかしてから) おてつ (シテハおきながら)

シテ「やい／＼すもふハ壺番でハしれまい も一番かへせや
れやるまいぞ／＼」ト云テほうをつきびつこを引テかくやへ
はいる」

シテ出立 嶋の物 狂言袴 こしおひ 扇 十徳 角すき
ん ひげ懸ル 造物ニテほう一寸四方長サ

アト 嶋の物 狂言上下 こしおひ 扇

目代 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

拾 太刀奪

アト「是ハ此他りの者で御座る 先召遣ふ者を出し談合致事
が有ル 太郎官者居るかやい シテ「はあ アト「いたか シテ
「お前に アト「はやかつた 汝を呼出すハ別の事でなひ 今日
ハ北野々おてうずのゑをはつたと失念をしたハ シテ「誠に私
もわすれまして御座る お参被成ましたらばよふ御座りませふ
アト「よかるう シテ「中々 アト「さあ／＼こひ／＼ シテ「畏
て御座る アト「内ニ斗いれば気がくつしてわるひが此様に出
れば心がはれやかになつてよいぞなあ シテ「被仰る、通り此
様に御出被成ますれば御心がはれやかにならせられてやう御座
りまする アト「夫よ／＼ 通テ「是ハ此他りの者で御座る け
ふハ北野々おてうずのゑで御座る程に参らうと存ル 扱も
／＼是ハはやおひたゞしひ参りかな いやれいけんあらたて
御座るに依てあゆミをはこぶ事で御座る 急て参らふ (シテ)
「申あれを御らふじられましたか (アト)「中々見た (シテ)「け

つこうな太刀でハ御座りませぬか (アト)「誠にけつこうな太
刀じやなあ (シテ)「こなたハあれをほしいとハ思召ませぬか
(アト)「ほしいと云たりと何とせう (シテ)「夫ならば身共のとつ
て上ませう (アト)「なんと人の物がとらるゝものじや (シテ)
「私が取て上ませふ程に其お腰の物をおかし被成ませ (同)「て
まもらず取テ参ませう (アト)「夫ならば急で取テこい (シテ)
「畏テ御座る ト云テ行ウトシテ (シテ)「申私ハ丸こしで御座る
其おこしの物をおかしなされませい かやうにも云なり」
(アト)「是ハ某の大事の刀じや かす事ハ成まひ (シテ)「きすハ
付ハ致しますまひ ひらにおかし被成ませ (アト)「夫ならばか
す程にぬからぬ様にして取てこひ シテ「畏テ御座る (主の刀
をかりさして行 通り手道具ニ見入テイル) (通手)「いや是か
らかこふくみせじや 少と見物致さう なんじや あやにしき
きんらんとんずどんきん 夫ハなんておりやる やあ／＼せ
てん 笑テ (通手)「はてめつらしい織ものでおりやる (通手)
(通手)「めつらしいおり物でおりやる と云ながら通り手の左り
の方ニて太刀のこしりを引テ見ると其時通り手シテをにらめる
シテしらぬかほにてシテ柱の方へ行テ (シテ)「目のさやのは
つれたやつしや さりながら某のか、つてハやる事でハ御座ら
ぬ と云テ又行 其内ニ通り手ハ又道具に見入っている (通手)
「爰ハなんしや 是ハ茶の湯道具と見へた ふろかま茶入茶わ
んひしやくも有ルハ 爰元ハ子共のもて遊びと見へた ひなは
りこぶり／＼ つちて作たゑのころも有ルハ ト云時シテ (通手)
おふ／＼つちて作たゑのころも有とも／＼ 通り手 (通手)「是ハ下

向にハ求めてみやけに致さう シテ「おうみやけ／＼」ト云テ又太刀を引 シテ「扱も／＼夥敷い参りかな 通手「やいそこなやつ シテ「なんじや 通手「おのれハなぜに人の腰物にさわつた シテ「此大勢の中で少とさわつたらば大事か 通手「だいいかにくいやつ シテ「あ、助てくれひ 通手「大事かにくいやつのおのれ其つれを云たらハ目二物を見せうぞ シテ「夫ハたれか 通手「身共か シテ「シテ笑テ シテ「わこりよの目に物見せだておいてくれい 通手「夫ハ誠か シテ「誠しや 通手「おのれハにくいやつ 通手「たつた一打にしてやらう シテ「あ、助てくれい 通手「アトハ切テか、りシテにけて入替り大臣柱の方二下ニイル 通手「なんのたすけいとハ ケテクレイ「さいぜん某をなぶつたがよひか 通手「是がよひか 通手「おのれ胴ほねをま二つにしてのきやう シテ「あ、助てくれひ 通手「おのれが腰にさいたハなんじや シテ「是ハ刀じや 通手「夫をこちおこせ シテ「是ハたのふだ人のじや 通手「やる事ハならぬ 通手「やる事ハならぬとハ物をいわたるに仍テおのれくしぎしにしてのきやう シテ「あ、やる／＼ 通手「さあ／＼よこせ シテ「そりや シテ「ト云テつかの方以テさし出ス 通手「つかの方からおこそう シテ「夫程あぶなくハおけ 通手「ト云テ腰二さすまねをする 通手「なんじや シテ「おけとハにくいやつ 通手「ていどおこすまいか シテ「おふやる／＼ 通手「ト云テ取直してつかの方出ス 通手「通て左手ニて刀ヲ取右の手の太刀ニて切はらふ 同「はてあぶなひ 通手「某ハ今迄いき物を切たためしがなひ 通手「おのれをうでだめしに胴ほねをま二つにしてのきやう シテ「あ、助て

くれひ 通手「夫ならば今ハ参りじや程にゆるす シテ「げこうにそこ^こにいたらばうらをか、する程にそう心得 シテ「何が扱いる事^事でハなひぞ 通手「構て居るな シテ「心得た 通手「ト云テ通手太鼓座二下ニイル シテ「して其あとをみおくりてシテ柱の方へ行 同「是ハいかな事 通手「人の物をとるとて我物をとられた シテ「先此由頼ふだ人に申そう 通手「頼ふだ人御座りまするか シテ「アト「ゑひ太郎官者が声じやかとつたか シテ「とつて御座る／＼ アト「でかいた／＼ シテ「どりや見せひ シテ「いやこなたのお腰の物をあつちへとつて御座る アト「なんじやこちのをあつちへとつた シテ「中々 アト「夫じや程に成まひおきをれと云に丸腰で身共ハ何とせう シテ「誠にこなたも某も丸腰でハしつかひてつきをいむような物で御座る アト「最前から成まひ 通手「おきをれと云にか／＼しひ シテ「なんとする物じや シテ「あ、思ひだひて御座る アト「なんと シテ「今ハ参りじや程にゆるす 通手「下向に夫にいたらばうらをか、すると申て御座る シテ「王 通手「てつきをいむやうなとハ鈍な事をぬかす シテ「夫じやに仍テさいせんから成まひおきおれと云に身共ハなんとやとへ帰らる、物じや シテ「あ、思ひ出しまして御座る アト「なんと シテ「きやづが申まするハ今ハ参りしや程にゆるす下向に夫にいたらばうらをか、すると申て御座る シテ「定てもはやきやつがもどる時分で御座る程にこなたと身共と兩人あれへいましてこなたつかまへさせらりやうず アト「某の引しバリまして太刀もかたなも皆取て進ませせふ アト「是ハ一段

とよからうがかへつてからめられぬやうにせひ シテ「畏て御

座る 是にお待被成ませひ アト「心得た 通手「扱もくくおも

わぬ仕合をいたるた 先急で参らう 是ハ北野をしんごふ仕故

で御座る （ト云テシテ柱ニテ云ヲ二人共ニ笛座の上ニ見付テ）

シテ「申あれで御座る アト「さあくつかまへ シテ「こなた

つかまへさせられひ （ト云テ二人してたかひに手を以テおし

たす 夫よりシテ主をつきたすと主通手をうしろよりたきつき

て アト「さあくつかまへたぞ 通手「是ハ何事ぞ アト

「何事とハ シテ「さあく見たか （最前某をなぶつたがよ

ひか是何かよひか （ト云テシテしつへひをあてる） アト「いら

ぬ事をせずともはやうしはりおれ シテ「畏て御座る （ト云テ

なわをとてきてよるまねをするト通手太刀のこしりにてシテの

せかなをつくとこりりところひおきてよる 又太刀にてころは

かす アト「其様なじやうだんせずともしはりおれ シテ「はあ

「ト云テなわをふたひニ丸くして置テ」きやつが足を是へい

れさせられひ （アト「其様なじやうだんをせずともうしろか

らしはりおれ シテ「はつ （ト云テ両手にて繩を以て横ニかけ

うとするときニ アト「其様な事をしをらずともうしろからか

けひ シテ「心得て御座る （ト云テうしろより主へかける）

かけました アト「夫ならばはなすぞ シテ「中々はなさせられ

ひ （アト「そりや シテ「かつきめ アト「是ハいかな事 身共

じやハ シテ「誠にたなふだ人じや やれやるまひぞ アト

「とらへてくれひ やるまひぞくく
シテ太郎官者 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

アト主 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

通テ のしめ 長上下 小サ刀 大刀さけて出ル

拾一 真奪

アト「是ハ此他りに住居致者て御座る 先召仕ふ者を呼出し談

合致事が有 太郎官者いるかやい シテ「はあ アト「居たか

シテ「御前に アト「汝を喚出スハ別の事でなひ 此間ハ宿に斗

いて気がくつしてわるい けふハどれへぞ遊山に出うと思ふが

何とあらふぞ シテ「是ハ内々御意なく共私の方より申上うと

存て御座ルに一段とよふ御座りませう アト「よからふ シテ

「中々 アト「夫ならば其小太刀をもて シテ「畏て御座る （太

鼓座へ行太刀持テ出ル」はあ持まして御座る （ト云テ二人共

廻ル 道行 アト「やい何と思ふぞ やとに斗いれれば気がくつ

してわるいが此やうにすれば心かはれやかになつてよいそなあ

シテ「御意被成る、通り御内に斗御座被成れうよりかやうに

ふと御出被成る、が一入の御慰で御座る アト「夫よくく

又ト「是ハ此他りに住者で御座ル 去ル方へ御約そく致て花を

持て参る 先急で参らう 内々花の事を仰らるれどよひ花が御

座らぬ わこさま方のお待兼被成る、と申程に是成とも持て参

らうと存ル シテ「申たなふだ人 あの花を御らうじられて御

座ルか アト「扱もくくうつくしい花じや あのやうな花をほ

しい事ぢや シテ「扱ハこなたハ夫ほどほしう御座ルか アト

「中々 よひ花じやに仍所望がしたひことじや シテ「夫程に思召ならば私の参て所望申ませふ アト「いやあやそちが分でハ呉まい程にをけ シテ「いや御きつかい被成まするな 私のものらうて参りませう アト「なんぢや もらうてくれう シテ「中々 アト「夫ならば所望してミよ シテ「心得ました 申々そこな人 又アト「こちの事て御さるか シテ「中々 又アト「何事で御座ふ シテ「そこつな申事で御座ルが其花ハ見事な花て御座るが夫ハもらうて御座つたか 但しとれへぞ進上物で御座ルかならば近比申兼たがあれに立せられたハ某のたのふだ人で御座ルがその花を御らうしられて所望申たいと仰らるゝ程に呉さしませ 又アト「近比安ひ事でおりやるかさいぜんもふす通り去ル方へ約束致て持て参る程に成ますまひ シテ「いや夫ハそふなれ共花ハこふもぬすむも心有り ぜひ共所望致さう 又アト「はて扱そなたハ聞分もなひ よそへ進上に持て行程にならぬと云に シテ「いやそなたハおとこが所望申かけて御座るにいなとおしやる 此上ハうでつくで成共もらいませう 又アト「そなたハをかしい事を云人じや 此上ハうでつくで成共もらわふとおしやるか おそろくうでつくでもらわればもらうてみよ シテ「それハ誠か 又アト「誠ぢや シテ「一定か 又アト「いちじうじや シテ「いよゝもらわいで置物か 又アト「いややる事ハならぬ「ト云テ花をさし上ル」 シテ「どうでもとらいで置事てハないぞ「ト云テ太刀持テいながら両手を上テとらふとする内ニ太刀トかへる」 又アト「おもわぬ仕合を致た 先さきへ参

て此様子をはなそう「太鼓座ニイル シテハ花と太刀をすりかへられてしらずに花斗持テ」 シテ「なふゝうれしや まんまと所望しますゐた たなふだ人御座りまするか アト「太郎官者なんともらうたか シテ「中々もらいまして御座ルが先私の分別と御聞被成ませひ アト「なんとした シテ「呉まいと申て御ざるを色々と申て所望致て御座ルがなんと見事な花でハ御座らぬか アト「どれ見せい 呉兼たこそ道利なれ 見事な花じや よふ呉たなあ シテ「いやすでに成まいと申を私の申か、つた事じやと云てむりにとりまして御座る アト「先でかいた やい シテ「やあ アト「あれか呉まいと云を汝がむりにとつたならば定て今の者が無念に思ふて道にまちぶせをせまい物でない程に太刀を身に引そへてもて シテ「お太刀ハ最前こなたへ渡シまして御座る アト「汝ハむざとした事を云 あれ程そちに持せておいた シテ「いや私ハ持てハ参ませぬ アト「おのれハ鈍なやつじや あれほど持ていたか何としたぞ シテ「あ、誠に持ておりましたが余り花をとらふと存て情を入て花に心がうつて御座ルに仍テ花と太刀と取ちがゑた物で御座らふ アト「おのれハにくいやつ のどこにか花と取かゆると云事有ルものか シテ「あ、 アト「花など、云物ハ世間に沢山な物じやに大切な十代とかへる物か 扱々にかゝ敷事をしをつた なんとした物で有うぞ シテ「あ、よい事が御座る アト「何事ぢや シテ「今のやつがあれを通りました程に又此道をもとりませう程に是に少御待被成ませい アト「どれにまとうぞ シテ「是え御座りませい アト「心得た 今のやつが通らば早

う知らせい シテ「心得ました」(ト云テ二人共二笛座ニイルト) 又アト「思わぬ仕合をいたした いそいで宿へ帰らう」(是より太刀ばい)の通り 主ハ太郎官者ニ(一)とらゐい と云

太郎官者ハ主に(一)とらへさせられい と云テたがい(一)とらへい(一)とらへさせられい と云テ主とらへる 常の通り」

シテ 嶋の物 狂言上下 こしおひ 扇 太刀持テ出る

アト 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

○又アト のしめ 狂言上下 腰帶 何ニてもうつくしき作花を持テいつる

(アト)「汝を呼出スハ別の事でハない 此間あなたこなたの立花はおひた、しい事でハないか (シテ)「御意の通りした、かな事て御さります (アト)「某も近日おのくを申入て一立花せうと思ふが何と有うぞ (シテ)「内々御意なくハ私の方より申上うと存て御座るに一段とよう御ざりませう (アト)「よからふ (シテ)「中々 (アト)「夫ならハけふハ東山ゑしんを切ニ行う (又アト)「是ハ此他りニ住居致者て御座ル 去ル方へ花の真を約束致て持て参ル 先急て参ふ」

拾二 文山立

アト「やるまひぞく シテ「やれく アト「やるまいぞく シテ「やれく (アト)「やるまいぞく シテ「今のハなんとした アト「そちがやれく」と云たに依てや

つた シテ「やつた アト「中々 シテ「其方は山立のことばをしらぬか アト「い、や シテ「やれく」と云ハやれ打とめひと云事じや アト「打とめひならば打とめいと最前からいうたがよい シテ「もうたがよいとて先度の山伏もそくぎに打とむる所をそちがおくびやうゆへににがいた アト「夫もわごりよがおくびやうゆへにとりにがいた事じや シテ「そちときよふて今までは是ぞと思ふ仕合をした事がなひ きやうこふハふつと申つうぜんぞ (ト云テ道具をなくる) アト「そういうて道具をなげたハ某へのつらあてか シテ「つらあてでもあらふまてい アト「身も又汝とてよふてよい仕合をした事がなひ 此上ハ弓矢八満申あわせぬぞ シテ「そふいうて弓矢をすてたハ某をふむか アト「ふむでもけるでもあらうまでい シテ「おとこがそういわれてハかんにんがならぬ いざはたそう アト「いかにもはたそう (ト云テ両方かたかにむなくらを取右の手ヲこしの物に手ヲかくる) 二人「やあく シテ「まくる事でハないぞ 二人「やあく アト「あ、あぶなひ シテ「なんとした アト「うしろががけじや シテ「はてあぶない こちへよらしませ 二人「やあく シテ「あ、先まで アト「なんじや シテ「爰がいばらくるじや アト「やれ。あぶない (コレハイカナコト共云)「こちへよらしませ 二人「やあく シテ「何と思ふぞ 此いせいをほうばい共に見せたひ事でハないか アト「誠に皆の者共に見せたい事じや シテ「夫ならハ爰をちよつとはなさしませ しらせてこふ アト「いやくれうじニはなす事ハならぬ シテ「ソレナラバ」あいくと声を三つかけて三つ目に

はなそう アト「一段とよからふ シテ」さあ 二人「ゑい
 〳〵」(ト云テ開テ刀ニ手ヲ掛 シテ)ハトナ ト云)
 アト「ぬかる事でハなひぞ シテ」だまざる、事でハなひぞ アト
 「いざそりをなをさしませ シテ」あひなをしに致さう 二人「じ
 り〳〵」べつたり シテ「なふ何とおもわしますぞ 此分で
 しんでハいぬじにと云ものじや かき置をしてしなふとおもふ
 がなんとあらうぞ アト「是ハ一段とよからふ シテ」してわご
 りハ矢立などを持参せぬか アト「い、や シテ」其のふこ
 ろがけからおこつた事じや 身共ハ何ぞせふむをしたならば目
 録にのせうと思ふては見さしませ 矢立をしさんした アト
 「わごりよハよひ心がけじや シテ」してなんとかいた物であら
 う アト「されバ何とかいたらばよからう 一筆申断候など、
 かいてハ シテ」いや〳〵一筆所でハ有まひ こふかいてハ
 アト「なんと シテ」新春の御慶など、かいてハ アト「かきおき
 に御慶所でもないよ シテ」いや某が心得てよひやうにかこう
 「ふところより紙ヲ出し扇ニてすミをてんするまねしてかく」
 アト「何にやらひん〳〵とはぬるが手をしあげたそうな シテ
 「身も少しあげたよ さあ〳〵かいだハ アト「なんとかいた
 ぞ シテ」先筆立に扱も〳〵 アト「こりやおもしろい (シテ)
 「たゞかり染に内を出立をし。けつくとし〳〵ころんし。
 ひくなよ我もひかじとて。刀のつかに手をかくる (アトとひ
 のき刀のつかに手をかくる) アト「かつきめ シテ」是ハ何事じ
 や アト「刀のつかに手をかくるとハいわぬか シテ」わごりよ
 ハ何をきくぞ 今のがぶんていじや アト「ぶんていならハぶ

んていときいぜんからいうたがよひ シテ「是ハ身共があやま
 つた 是からがくどきじや 是へよつてよまします 二人「此
 ま、爰にてしぬるならばのぼり下りの旅人にふみころされたと思ふなよ かきとゞめたる水ぐきのあとにとゞまる女房や姫子
 共のほゑん事思ふやられてかなしき (二人共二なく) シテ
 「なにとしにともない事でハなひか アト「何がしたからうぞ
 いやい シテ」ゐやわごりよと身共さへしなねバ別の事ハなひ
 いざしぬる事ハやめにせう アト「一段とよからう シテ」さ
 あらバ此よろこび事に目出たふうとうてかゑらう アト「一段
 とよからう シテ」先わごりよ上さしませ アト「先ぞなた上さ
 しませ シテ」身共の上うか アト「中々 シテ」おもへばむよう
 のしになりと 二人〳〵ふたりの者ハ中なをり さるにても
 かしこは(あ)やまちするらうと手にてをとりて我が宿に犬じ
 にせでぞ帰りける〳〵 (アトノ手を引一返廻ツテまん中へ
 出) シテ「のふきかしますか アト「何事ぞ シテ」そなたと身
 共ハ五百八十年(アト)七まわり と云) 二人「一段と目出
 たからう シテ」いざこちへきさしませ アト「心得た シテ」早
 うきさしませ(アト)心得た ト云) シテ「さあ〳〵おりや
 れ〳〵 アト「参るまゐる

「シテ」何とおもふぞ 此いせいをほうばい共に見せたい事じや
 なあ アト「其通りじや共 (シテ)「此分でしんでハ犬しにと云物
 じや (アト)「誠にわごりよか云通り兩人かしぬる事と云事をし
 らせたい事じやまでい (シテ)「夫ならハこことをはなさしま

せ ちよつというてこゝろ (アト)「いや／＼爰をはりやうしには

なす事ハならぬ (シテ)「はてどうぞしてあとて成共しらせたひ

事じや (アト)「其通りじや共 (シテ)「思ひ出ひた (アト)「なんと

(シテ)「かきおきをしてしのふとおもふ (アト)「誠にこりやよ

からう (シテ)「さあらハ爰をはなさしませ (アト)「いや／＼り

やうしにはなす事ハならぬ (シテ)「あい／＼と声を三つかけて

三つ目にはなさう (アト)「是ハ一段とよからう 二人「あい

／＼ 二人「やつとな (シテ)「ぬかる事てハないぞ (アト)

「さあらハそりをなをさしませ (シテ)「先ぞなたなをさしませ

(アト)「さあらハあひなをしにせふ (シテ)「よからう 二人「し

り／＼／＼へつたり (シテ)「さあ／＼是へてさしませ (アト)

「心得た (シテ)「わこりよハ矢立てかなとをしさんしてか (アト)

「い、や (シテ)「其ふこゝろかけからおこつた事しや 身共ハ

又仕合をしたらハもくろくにのせうと思ふては見さしませ 矢

立を持参してきた (アト)「わこりよハよい所ニきかついた

(シテ)「してなんとかいてよからう」

(シテ)「たゞかり染に内を出山立をし人の物をばあとらずしけ

つくどし／＼こころんし」

(三人)「かしこハあやまちする論 (アト)と云」

シテ出立 嶋の物 狂言上下 右の肩ヲぬぎ 腰帶 小サ

刀 扇 麻くず頭巾 やり十文字よし 文

アト 嶋の物 狂言上下 腰帶 小サ刀 扇 弓矢ツカヘ

テ出ル 左りの肩ヲぬぐ

但シシテハもぎとうにて袴ク、リテモよし

拾三 昆布売

アト「是ハ此他りの者で御座ル 某所用御座つて都へ参る 先

急で参らふずる 小者をも持て御座れ共けふハ方々へ遣して宿

に一人もおらぬに依て自身太刀をさげて参る 先急で参らう

(シテ)「是ハ若狭の小浜の昆布売で御座ルが都へあきなひに参る

先急で参らう 何とあきなひがあればやう御座ルが (アト)

「のふ／＼のうそこな人 (シテ)「こちの事で御座りまするか (アト)

「中々 してそなたハどれへおりやる人ぞ (シテ)「某ハ若狭の小

浜の昆布売で御座ルがあきないに登りまする (アト)「何とおし

やるぞ 若狭の小浜の昆布うりじやかあきないに登る (シテ)

「中々 (アト)「夫ハ幸ひの事じや 某も都へ登ル程にお供を致さ

う (シテ)「いやこぶうりふぜひの者で御座るに依ておつれには

にやいますまひ 御ゆるされて被下ませ (アト)「いやくるしう

ない 某も一人てろしがとせんな程にはなしもつて登らうハさ

て (シテ)「いやどう御座つても御ゆるされて被下ませ (アト)

「やあらそなたハ人のつれだとうと云にいなとおしやるハけな

げにおりやる (シテ)「いやおともいたしませう (アト)「じやあ

シテ「中々 (アト)「さあ／＼おりやれ／＼ して其こふハ一日に

何程うるゝ事ぞ (シテ)「五貫拾貫うる日も御座り又五十貫百貫

うる日も御座ルに依てさだまつた事でハ御座らぬ (アト)「はて

夫ハ夥敷ひ事じやが して其鳥目ハどこにおかしますぞ (シテ)

「いや鳥目の事でハ御座らぬ 此昆布一本の一貫貳貫と申ます

る アト「某ハ又鳥目の事かと思ふたよ シテ「左様で御座りませう アト「なふ シテ「やあ アト「わこりよにむしんの云たいがきいておくりやらふか シテ「昆布売ふぜいの者に御用ハ御座りますまひが似合ました事で御座るならば畏て御座る アト「先夫ハうれしうおりやる シテ「お礼迄も御座らぬ アト「無心といつは別の事でない 某小者をもつた者なれ共けふハ方々へ遣して宿におらぬに依てお見やる通り自身太刀をさけて出た 是をちよつと持て呉さしますまひか シテ「おやすい御用で御座れ共御らふじらるゝ通に手があきませぬ アト「夫そちらの手があひて有ハ シテ「おもふ御座るによつてこふかたを替まする アト「又そちらがあくは シテ「又こつ替まする アト「やあらそなたハ人が無心のいおふと云たればきこふと云てさむらひほどの者に一礼迄いわせて今又なんのかのとおしやる ていとおもちやるまひか シテ「いや左様でハ御座らぬ アト「左様でないといへていどおもちやるまひか「ト云テ太刀に手ヲかくる」 シテ「まづ御待被成ませひ アト「なんと シテ「いや持ませう アト「おもちやらう シテ「中々 アト「こりやされ事じや シテ「はてこわいおざれ事で御座る アト「さあ／＼持てくれさしませ シテ「畏て御座る アト「めづらしひ事もあらバはなさしませ シテ「いや別に珍敷い事ハ御座らぬ アト「持てくれさしませといへば夫ハしつかい昆布のかたにと云物じや 手に持て呉さしませ シテ「はあ「ト云テ太刀の末を以てさきへする」 アト「手に持てといへばどこにか其つれな持様が有物か 身にひつそへて持てくれさしませ シテ「畏て

御座る「ト云テワキノ下にはさミ持也」 アト「身に引そへてといへば其様な持様が有物か そなたハ太刀の持やうをしらぬと見へた シテ「昆布売ふぜいの者で御ざるに依て左様の事ハ存じませぬ アト「某のおししよう 先其昆布をばとらうぞ シテ「此昆布をおめし被成まするか アト「中々「シテこぶを太鼓座ニ置テ出ル」 アト「惣いてわが太刀をば左りに持物也 主の太刀ハ右に持つよ そいうて某ハ主でハなければ共ちよつと右に持て呉さしませ シテ「畏て御座る こう持まするか アト「中々 はて扱わこりよハ太刀の持やうかよいハ シテ「申路次とうでおわかい衆におあひ被成ました時おるかなど、仰られまするならばお前にと申ませう アト「わこりよハ分別迄があがつた さあ／＼おりや／＼「シテワキへ開テ」 シテ「まいやいののびたやつじや 少おどそう アト「何ぞめづらしい事もあらばおはなしやれ「シテかたきぬのかたをぬいで」 シテ「がつきめ やるまひぞ アト「ざれ事をするな シテ「なんとざれ事とハ 最前某をなぶつたがよいか是がよひか おのれまツ二ツにしてのきやう アト「あ、助てくれひ「ト云テ大臣柱の方二かたひざ立テ下ニイル」 シテ「たすけい アト「中々 シテ「おのれが腰なハなんじや アト「こりや刀じや シテ「夫をこちへよこせ アト「是ハさむらいの一腰じや やる事ハならぬ シテ「やる事ハならぬとハ 物をいわするに依てまヾつしてのきやう「※ヲノレカラタケハリニシテやらう」 アト「あ、助てくれひ たすけてくれひ「小サ刀のつかの方持テさし出ス」 そりや シテ「つかの方からよこせ アト「夫程あぶなくハを

けいの シテ「おけ いもざしにしてのきやう アト「おふやう
う シテ「さあ アト「よこせ アト「こりや アト「ト云テつかの方
ヲさしいたす シテ取さまに太刀ニテ切はらい」 はてあぶな
ひ事をする シテ太刀を取テこしへさして」 シテ「はづかし
い事なれ共某ハ今迄いきものを切たためしがない おのれをう
でだめしに胸ばねをま二ツにしてのきやう アト「あ、助てく
れひ シテ「たすけい アト「中々 シテ「助ル事もあらうが某の
云事を聞か アト「何成共きこよう シテ「先夫にまで アト「ト云テこ
んぶを持テ出テ」 さあ シテ「此昆布をうれ アト「汝こそ昆布売
うりなれ 身共ハうる事ハならぬ シテ「ていどうるまひか
アト「おふうらふ シテ「いそいでうれ アト「やい昆布かへ
めし被成る、物じや シテ「いかにもこざしをかめて昆布めされ候
へ シテ「若狭の小浜のみ、あつが御座る アト「ト云テうれ・アト
「心得た シテ「ト云テ シテ「こふめされ候へ シテ「右の通云」
「一段とでかいた シテ「今度ハ小哥ふしにうれ アト「うろう程にう
ツてきかせひ シテ「某の云て聞せう 昆布めせ 若狭の浦の
めしの昆布 シテ「こふ云てうれ アト「心得た 昆布めせ 若狭の
浦のめしのこふ シテ「汝ハきやうな物じや シテ「今度ハ平家ぶし
にうれ 是をもうつてきかせう 昆布めされ候へ 若狭の小浜
のめしのこふ シテ「こうゆうてうれ アト「はてむつかしひ事じや
「ト云テシテの通りに云」 シテ「なんじハきやうな者じや
今度ハ淨瑠璃ふしにうれ 是も身共のうつてきかせう 是が則
三味線の心じや 昆布めせ シテ「おこふめせ わかさのおばま

のめしのこふ てつてん シテ「ト云テひやうしを太刀の
つかにてとる」 こふいうてうれ アト「心得た シテ「こふめせ
おこふめせ わかさのおばまのめしのこふ てつてん
 シテ「ト云テシテのことく云 扇ニて竹柄打テ」
「一段とでかいた シテ「今度ハおどりぶしにか、つてうれ アト「其
様にいつかいつまでなぶらる、事でハないぞ シテ「今度うつ
たらば此太刀をかへそう アト「夫ならバうろう 先うつてき
かせい シテ「心得た シテ「おとりふし」 こふめせ シテ「おこふめせ
若狭の小浜のめしのこふ シテ「しやツき シテ「こうゆ
うてうれ アト「心得た シテ「シテのことくにおとりふしニ云
シテのりテイテ笑テ_マアト云テ仕廻テ」 同「どれおこせ シテ「先
まで シテ「太刀にて切はらいで」 今度ハ某の行末はんじやうと目
出度よふ二うれ アト「其様にいつがいつまでもなぶらる、事
でハないぞ シテ「今度うつたらば太刀も刀も皆かへそう アト
「夫ハ誠か シテ「誠しや アト「心実か シテ「心実しや アト
「一定か シテ「一しやうじや アト「昆布かわし シテ「よろこぶめ
され シテ「こふめされ シテ「ふし」 あら シテ「数しらずの君が御代のよ
ろこぶやん シテ「何とよろこぶともかへすまひぞ わおとこ
「ト云テ太刀のさやへみをさいてアドに見せてはいる」 アト
「やれたまされた やるまいぞ シテ
「アト「汝こそこぶうりなれ 身共ハこぶうりでハないよ シテ
「某もわかさのおばまでハこものはじおもふんだ物じや 人に
無心の云かけて云おふせぬとあれバいかゝな おききやらうか
おききやるまいか ていどうるまいか」

〔シテ〕「今度うつたらば弓矢八満此道具を皆かへそうぞ」

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 竹二大臣ゑほしをはさミ
かついで出ル

アト 段のしめ 長上下 小サ刀 扇 太刀さけて出ル

拾四 舍弟

シテ 「此他りの者で御座る 去方へ少用有ツテ罷出た 急で参らふと存ル 少物を尋たい事が有て伺公致がお宿に御座らふか但しお隙なしじやに仍テ御留守で有ふか存ぜぬ事じや 参る程に是で御座る 物もふ御内に御座りまするか ヲシヘテ 「表二人声かするが誰もでぬかやい 案内とはたぞ シテ 「某で御座りまする ヲシヘテ 「はて扱ようこそおりやツたれ シテ 「扱申上まする 少こなたへ承りたい事が御座つて伺公致で御座る

ヲシヘテ 「聞たいとハいか様な事でおりやるぞ シテ 「其事で御座る 私か兄か某にあいました時分ハ我等の名をバ申さいで舍弟／＼と斗申まする 此舍弟と申事ハよい事かあしきか子細を存ませぬ程に仰聞されて下されませう ヲシヘテ 「何といわします わこりよか事を兄が舍弟と云に仍テ其子細ヲ聞たいとおしやるか シテ 「中々左様で御ざる ヲシヘテ 「いかにも子細があらふが去ながら空でハ覚へぬ 其様な事をしるいた書物が有程に見てきておしよう 夫にまたしませ シテ 「畏て御座る 「ヲシヘテ大臣柱へ少行テ」 ヲシヘテ 「扱もさても世間にハ鈍な者が御座る あのやうなうつけた者にハありやうにいわずとちとな

ぶつてやませう なふ書物を見てきたが舍弟と云ハよろしうない事じや程に聞すと置シませ シテ 「如何様な事なり共くるしう御座らぬ程に仰きけれませう ヲシヘテ 「尤云もせうがわこりよかきいたらば腹をたてうに仍テ夫がきのとくぢやよ

シテ 「何事でも腹をたてハ致しますまい程にぜび共承りとふ御ざる ヲシヘテ 「必腹立（ふくりうトモ云）さしますなよ シテ 「何しに腹をたてませう ヲシヘテ 「夫ならバいわう 舍弟と云ハ

金銀のい其外諸道具によらず何成とも案内なしにひそかにとつてくる事を舍弟したと云よ シテ 「扱ハ物をぬすむやうな事で御ざりますか ヲシヘテ 「中々 盗ミのから名を舍弟と申 シテ 「扱も／＼無念な事かな 兄とハいわせまい 参てはたしませう ヲシヘテ 「先またしませ 夫々さうあらうと思ふて始に口を

かためた 必腹をた、しますな 兄の事じや程にかんになをしてかまいまする ヲシヘテ 「ゆかしますか さらハ／＼ よふおりやた シテ 「あつ 扱も／＼無念千万なことじや あれハ参りぞんぶんをとげねばおかぬ あわれ宿にいられかし 是じや物もふ やとに御座るか アト 「あらい物まふの声じやが誰

じやしらぬ 案内とハ いや舍弟か そなたならバ案内なしにすぐにはいりもせいで シテ 「なふ兄じや人 今迄舍弟の子細をしらぬに依だまつていました とこで身共が舍弟をした事が有て又してハ舍弟／＼とおしやる いかに兄弟でも此事においてハかんにん致さぬ程にかくこめされい アト 「是ハ一円に合点のゆかぬ事を云て其ごとくひとり腹をた、します 子細か

あらは氣をしつめてとつくりといひてきかさしませ^{シテ}「其様なぞらとばけた事をお申しやるな 舍弟と云ハ盗みをしたから名ておぢやるハいなふ 一つ身共がぬすミをして舍弟^{マモ}とおしやる 舍弟のしやうこをおだしやれ^{アト}」扱ハわこりよハとこぞでなふられてわせた物であらう 心をしつめてよふきかしませ て、おやの事をばしんふという 母おやの事をばほぎと云 あにの事をば舍兄をと、の事をバ舍弟と云程によふ覺てゐて必腹をた、しますな^{シテ}「其様なだましだてな事をバなをしやつそ 身共をバ舍弟^{アト}と云子細が有か^{シテ}」中々舍弟じやわいなふ^{アト}「某を舍弟と云子細が有か^{シテ}」中々子細が有 一つそや庄や殿へ振舞によはれておしやつたハ^{アト}「中々 ふるまいによはれた^{シテ}」其時台子のそばへそなたのよつて見事なてんもくがあつたればそれをとつてひねくりまわいて他りをぢろく^{アト}と見廻し人のおらぬつかいを見合其ま、ふところへ入てお帰りがつたハ 是ハ天目舍弟でハないか^{アト}「はて〔扱〕おのれハにくゐやつじや 思ひよらぬなんを云かけをる^{シテ}」そのミならずまたおしやる 此中とこやら班な牛を引て来て硯のすミをすりためらる、程に何に成事ぞと思ふて見ていたれば今の牛の白ひ毛の所を墨でぬりかくいて市へ引ていて売しまつた 是ハしつかい牛舍弟のまだら舍弟のぬり舍弟の天目舍弟でハおらないか^{アト}「おのれハ口のあいたまにいわせてをけばぼうずがない かまいて目に物を見せうぞよ^{シテ}」や、身共に目ニ物を見せう^{アト}「おんてもない事〔ト云内ニかたをぬく〕 ぼうをくらわせう^{シテ}」存も

「ト云内ニかたをぬく」よらぬ事じや さあた、いてみよ^{アト}
「おのれた、かいでなんとせう〔た、きにかゝる所を取付て相撲ニ成ル 弟兄をなくる〕^{シテ}」おてつ^{アト}「やい^{アト}」兄を此ごとくに打たをいてばちあたりめ とこへにくるぞ やるまいぞ^{アト}

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

○アト のしめ 長上下 小サ刀 又狂言袴二ても 時によるべし とかく此狂言いなか者の心にてよし 市へ牛を引て行きうるゆへなり ふるまいに行先も庄やなりをしへて のしめ 長上下 小サ刀 扇

拾五 衡

^{アト}「是ハ此他りに住居致者で御座る 先召遣ふ者を喚出し申付ル事が有ル 太郎冠者居るかやひ^{シテ}」はあ^{アト}「居たか^{シテ}」御前に^{アト}「汝を喚出スハ別の事でなひ 俄に晩程客が有ル程に酒屋へゐていつもの通りよひ酒を樽へ詰て取てこひ^{シテ}」畏て御座る 替りを被遣ませひ^{アト}「替りハ先日汝に渡しておいた^{シテ}」夫ハ皆つかひ切て御座らぬ^{アト}「やあ^{シテ}」なひ^{シテ}「中々^{アト}」某が方にもなひが何とした物で有う^{シテ}「されば何と被成てよふ御座らふ^{アト}」いや晩程の事じや程に何とぞよ様に云て取てこひ^{シテ}「参りませうが先日さゝる前のが有と申すすでにおこすまひと致したを私の色々と申て御座るが今度ハ中々をこしますまひ^{アト}」いや前のをも

一所に追付やらふ程に其通りを云て何とぞ取てきてくれひ

シテ「成ませうか成ますまひか存ぜぬ事で御座ルが先参てみませう」アト「随分頼 早うゐてこひ」シテ「畏て御座ル」アト「英

シテ「はあ（主ハ座ニツク シテハシテ柱ニテ） 是ハいかな事 晩程御客が有程に酒を取てこひと被仰るゝが先日参てさ

ゑ前のが有と申て色々に云を私の口調法をもつて取て参て御座るが今日ハ中々おこす事でハ御座るまひ 乍去あれへ参て様子を見る（ト云テ廻りテ） 扱々気毒な事で御座る 何とぞ面白

おかしう申なひてみう いや参る程に是じや 物もふ 案内も

サカヤ「表に物もふと有ル 案内とハたそ」シテ「物まふ

サカヤ「物もうとハ いや太郎官者殿か」シテ「中々私で御座る

サカヤ「此間ハ久敷見へなんだ」シテ「かれ是致てえ参りませぬ」サカヤ「いや先日の算用ハ何とさします」シテ「成程夫をも

いたしまするが又今日も用が有て参て御座る」サカヤ「何事でお

りやる」シテ「たのふだ者申まする 今晩俄に客来が御座ル程

にいつもの通りの酒を樽へ詰て被下ひと申まする」サカヤ「此間

ハ見へぬに依て定てよそでとらしますかと思ふたがお心かわら

ず取て被下て満足致した」シテ「何が扱こなたをさゑ置まして外

でとる物で御座るか」サカヤ「夫ならば追付つめてやらう 夫に

またしませ」シテ「心得て御座る あ、嬉しや 先しすまひた

（ト云内ニ樽持出テ）サカヤ「是々持ておりやれ」シテ「忝なふ

御座る（ト云テ樽取テのく）サカヤ「のふく先またしませ

シテ「いや其内参りませう」サカヤ「ひらに先またしませ」シテ

「何事で御座る」サカヤ「そなたハ前の算用をばせず其上此間の

酒の替りをも追付持て参らふと云て今においてもてこぬ 其様

な事が有物か けふのハ替りをおかぬ内ハやる事はならぬ そ

ふ心得さしませ」シテ「いや内々（の）をも追付持て参ませう

が又今日のハたなふだ者の方から請取ましてはたとしつねん致

て御座る 重て一所に算用申ませう 有様ハ物で御座る」サカヤ

「何でおりやる」シテ「先日からは参りませぬハ別の事でハ御

座らぬ 津嶋へ参りました」サカヤ「扱ハそふでおりやるか」シテ

「何がよひ時分て祭を見物致て御座る」サカヤ「はて夫ハ浦山し

ひ事でおりやる」シテ「こなたハ常々おすきで御座る程にお目

にかけとう御座りました」サカヤ「あゝしつたらばいこう物を

なんと夫を覚ハせずか」シテ「いかさま一ツ二ツハ覚て御座ル

が重ておはなし申ませう」サカヤ「いやそなたがおもしろそうに

云程に先咄てきかさしませ」シテ「夫ならば少咄しませうが二

見が浦で千鳥をよする躰を致たがあゝおもしろふ御座つた

サカヤ「はて夫ハよからふ 見たい事じやが」シテ「左有らバ其

躰を致ませうが是にハ相手か入まする」サカヤ「其あひてハむつ

かしい事か」シテ「いや別に六ヶ敷ひ事でも御座らぬ はんま

千鳥の友よぶ声わと申事をふしを付て被仰ひ」サカヤ「そういゑ

ばよひか」シテ「中々 夫に就ましていろく面白ひ事お致ま

する さあく被仰ひ」サカヤ「心得た（ト云テふし付テ）は

んま衛の友よぶこへハ」シテ「ちりくや（ヒヤウシ少フム）

ちりく ちりくやちりくちりくとんだり」手ヲ左右

ヘヤリテのつて右へ小まわり アト樽ヲ見つめていろ」シテ

「申々其様に見つめて御座つてハ衛がよりませぬ しのぶ心で

御座れ サカヤ「心得た」〔ト云テ扇ヲかさしている〕はんま千鳥の友呼こへハ シテ「ちり／＼やちり／＼ ちり／＼やちり／＼とちりとんだり」〔ト云テ二三返云テ〕 サカヤ「是々どこへ持ておりやる シテ「いや是ハ千鳥が立た所で御座ル サカヤ「衛ハたとうが此樽を其様にする事ハならぬ シテ「はあ 夫ならば何がよふ御座らふ 大もちを引鉢ハ何と御座らふ サカヤ「夫も見たい事じやが シテ「いたして御目に掛ませう 是にも相手が入ます サカヤ「安事ならば身共がせふ シテ「夫ならバてうさやよふさと被仰ひ サカヤ「心得た シテ「さりながらだおもちが入ます 何を致ませう あ、是をちよつといたしませう」〔こしかけヲ見る〕 サカヤ「いや／＼是をうごかす事ハならぬ シテ「少もお氣遣被成るゝな 其鉢斗で御座る程にうごく事でハ御座らぬ 幸ひ是によい物がついて御座る さあ／＼被仰ひ サカヤ「かまへて樽のうごかぬ様にさしませ シテ「心得て御座る サカヤ「てうさやよふさ／＼ シテ「ゑひともし／＼な サカヤ「是々どこへ引ておりやる」〔シテ「いや是ハ引すぎた所で御座る サカヤ「とかく此様二樽の入事ハ面白うなひ シテ「て御座る サカヤ「中々 シテ「樽のいらぬ事 あ、思ひ出しました けいばを御ろうしられて御座るか サカヤ「いや夫も見た事がなひ」〔シテ「とてもこの事に是をも致しておめに掛ませう 是にも相手が入まする このたハ先へ扇をひろげてばゞのけ／＼と云て御座れ 私ハ跡から馬に乗まして色々の曲が御ざる」〔サカヤ「是ハよからふ 樽ハいらぬか シテ「中々 樽などの入事でハ御座らぬ さりながらかき竹がちと

入まする あ、是によひ物が御座る さあ／＼さきゑ御座れ サカヤ「心得た は、のけ／＼ シテ「御馬が参る サカヤ「はい／＼とれハ何事をするぞ シテ「御馬が参る サカヤ「やい／＼とれへ持て行ぞ シテ「是か お馬が参る サカヤ「やれをふちやく者 やるまひぞ／＼

シテ太郎官者 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇
主 のしめ 長上下 小サ刀 扇
アト 酒や 色のしめ 長上下 小サ刀 扇

拾六 仁王

シテ「是ハ此他りに住居致者で御座ル 某何共渡世の送り様が御座ないにより他国を致さふと存ル 夫に就爰にお目掛させらるゝ御方が御座ル程に御暇乞に参らふと存て罷出た 先急て参らふずる 誠に女子をふりすて、参る様な口おしい事ハ御座なひ 去ながら命さへ御座らば又仕合を致て御座るならば重而逢事も御座らふ いや参る程に是じや 物もふ 案内もふ アト「表に物まふと有が誰も出ぬか 案内とハたそ シテ「物もふ アト「ものもふとハそなたか シテ「中々私で御座ります アト「そなたは見れば旅出立じやがどれへゆかしますぞ シテ「其御事で御座ル 私手前ふつとなりませぬにより他国致しまする アト「是ハいかな事 身共ハ又そなたハ人にたのまれて田舎へなとちよつと「たちかへりに」行しますかと思ふたれば夫はにが／＼しい事じや 何とぞ爰元に留置たひ物じや シテ「扱々

忝ない御意で御座りまする 常々御目下さるゝ故其お礼御暇乞
 彼是に参まして御座る 山の神世倅が事を頼上レマスルまする 最早身
 共ハ参りまする アト「先待しませ 身が所へそなたの出入す
 ると有事ハ誰しらぬ者ハなひ シテ「其義ハ皆様方御存知で御
 座りまする アト「さればそこじや 某迄の外分御じやに依て留
 置たひ物じやがそなたが知る通り身共も近年ハ手前ならぬさか
 いで合力コウリキもならず氣毒なことでハ有シテ「いや左様に御意
 なさるれば迷惑に存まする 今迄しんせうをつなぎましたハ皆
 こなたの御影で御ざりまする 其段ハ何方に罷有りましたも御
 をんなわすれ置ませぬ 忝ふ御ざりまする アト「いや御礼迄
 もおりなひ 何とぞ分別のありそな物じやが なふよひ事を
 思ひ出した シテ「いかやうな事で御座りまするぞ アト「別の
 義でハなひ 惣じてそなたハ物真似が上手じやに依てわごりよ
 を仁王に拵て当所の上野へつれて居て今度天よりあらたな作の
 仁王がふらせられた程に皆みな御参りやれいとよそながらふれ
 たらば老若共にくんじゆせう 定てさいせんが有ふ 是をとつ
 てもとでにしたらばよからふと思ふが何と仁王にならしませぬ
 か シテ「扱々よい御分別で御座る いか様になりとも頼上ま
 する よからふやうにあそばされて下されませひ アト「何が
 扱身にまかさませひ 最早よひ時分じや いざをりやれ
 シテ「心得ました して何も道具ハ入ませぬか アト「いかにも
 少人物が有ルが身が所に有 持参いたさう おまちやれ シテ
 「心得て御座ル アト「なふ／＼よい物が有ハ シテ「夫ハ嬉しう
 御ざりまする アト「さあ／＼おりやれ シテ「中々参りまする

此様に何角と御世話に成まする段お礼を申上ませうやうも御
 ざりませぬ アト「其段ハ少もくるしうおりなひ いやはや
 が上野じや 大方此辺がよからふ 拵さしませひ シテ「心得
 ました 手伝ふて被下ませひ アト「心得た (ト云テかたきぬ
 を取テはたをぬかせると下ニしゆはんをきている 扱すきんか
 ふせはちをもたせて前ニこしかけのふたをあけておき 尤ふた
 をはミの上ニかへしておく) シテ「何とよふ御座ルか アト「大
 方よいとも さらバ其躰をして見せさしませ シテ「心得て御
 座る (ト云テ仁王のまねをする) アト「なふ其ま、仁王じや
 シテ「何と似まして御座ルか アト「いや其ま、じや かまへ
 て顕れぬやうにせうぞ シテ「畏て御座る 散錢を取ましてお
 目にかませう アト「夫を待ぞ 身共ハ此様子をふれうぞ
 シテ「中々頼上まするぞ アト「心得ておりやるぞ (シテ大臣柱
 の方ニ仁王の躰をしている アトハシテ柱の方ニてふれる)
 やあ／＼皆々おききやれ 当所の上野へあらたなる作の仁王
 天よりふらせられた程に皆々お参り被成ひや (ト云テ太鼓座
 二下ニイル 立衆出ル はしか、りニテ) 立頭「何も御座るか
 立衆「皆是に居まする 何事で御座る 立頭「各を喚まするハ
 別成義でも御座らぬ 当所の上野に天よりあらたなる作の仁王
 のふらせられたと申程に参りておかミませう 立衆「誠に是ハ
 不思議な事で御座る 参りておがみませう 立頭「さあ／＼御
 座れ／＼ 立衆「心得ました (立頭)「何と思召ぞ か様の目出
 度御代なれハこそ天より仁王のふらせられて御座ルか何ときた
 いな事でハ御座らぬか (立衆)「其通りで御座る) 立頭「是ハは

や上野で御ざるが彼仁王ハどこに立て御ざるぞ さればこそ是に立せられた 扱々殊勝な事で「ハ」御座らぬか 立衆「誠ニ是ハ作と見へました 立頭「私ハ祈誓を掛ませう 則此脇指を上ませう 立衆「身共ハ此帯を上ませう「又さいせんなども上ル おかミテ」 立頭「最早下向致ませう 立衆「いかにもよふ御座らふ 立頭「宿へ帰り皆若ひ衆ゑ此由語りませう さあ／＼帰らせられひ 立衆「心得ました「ト云テ皆々衆やへはいると」 シテ「なふ／＼うれしや／＼ 先是を持て参りて見せませふ 定てよろこばせらるゝで御座らふ いや是じや 申御座りまするか アト「誰じや シテ「私で御座る アト「仕合ハ何とさしました 参が有たか シテ「中々 殊外の参詣が御座つて此様な結構な物を数多立願に上ますと申て置いて参りました アト「誠に様々の物がある 夫でそなたハもよからう程に内へかへつて内義に見せさしませ シテ「尤左様で御座りまするが物で御座る アト「何事ぞ シテ「いや参りの衆が帰らるゝ時に申されますハ宿へ居たらば此由を皆々ゑしらせて明日ハ大ぜいづれで参らふといわれました程に身共ハ参つてましたしてやりませう アト「なふそこな人 よくのふかい事をいわしますも夫でよひ程にひらにおかしませ シテ「いや左様でハ御座りませぬ みな殊外しゆせうな事じやと申まする はやおそなわりまする 私ハ参りまする 明日参りませう アト「是々かまいてゐらぬものじや 身共ハしらぬぞや「ト云テ太鼓座ニイル シテハ小廻りスル」 シテ「いや此様に毎日参りが有様な事ならバ某ハ有徳に成で御座らふ いや参る程にこれじや かの

躰を致う 惣じて仁王ハあん(マ)の仁王うんの仁王と申て御座る此度ハうんの仁王にならふと存ル「ト云テ仁王ノ躰をしていて」扱是ハさんけいかおそい と云テまぐの方ミて立衆出ルヲ見て其ま、仁王のテイヲスル」 立頭「さあ／＼各々御座りませひ 上野へ参詣致ませう 後立衆「心得ました 立頭「何と思召ぞ 天より仁王のふらせらるゝと云事ハふしぎな事でハ御座らぬか 後立衆「仰らるゝ通り是ハきたいな事で御ざる 立頭「はや是で御座る おかミませう 後立衆「よふ御座らふ「ト云テさいせんなどあけおかミテ」 立頭「申 後立衆「何事で御座る 立頭「いやきのふおかミました時ハあん(マ)の仁王で御座つたが今日ハうんの仁王で御座る 不思議な事でハ御ざらぬか 後立衆「いかにふしぎな事で御座ル いや此仁王を能々見ますれば誰やらにちと似たやうに御座る 立頭「誠に誰やらに似まして御座る「ト云テいろふてミル」 殊に人はだで御座る 後立衆「とれ／＼ 是ハ仁王のおわらりまする 少こそくりませう「ト云テ立衆左右へ廻り」 立頭「くす／＼／＼ なふかたりで御座る シテ「あ、助て被下ひ／＼」 皆々「やれ盗人よ／＼ おふちやく者よ やるまいぞ／＼」 シテ「ゆるして被下ひ／＼」

シテ出立 下二じゆばん 上二嶋の物 狂言袴ク、ル 肩衣 腰帶 萱笠持出ル 後二仁王ノ時肩衣取テ両はたぬきしゆはんを出ス あん(マ)びすきんと中をくゝりてかぶる 太鼓ノふち(ハ)を持 前二こしかけ置 尤ふたを返しテ

アト 段のしめ 長上下 小サ刀 扇
立衆大せい出ル 皆のしめ 長上下 小サ刀 扇

拾七 棒縛

主「是ハ此他りに住居致者で御座る 先召遣ふ者を喚出し申付ル事が有 次郎官者居るかやひ アト「はあ 主「居たか アト「御前に 主「汝を喚出スハ別の事でなひ 此間某が留守にさゑなれば居間の酒が殊外へるが汝ハなぜに吞ぞ アト「いやハ終にこなたのお居間の酒ハたばませぬ 主「そちがのまひで誰が呑物じや アト「私ハ心実被下ませぬ 主「なんじや心実吞ぬ アト「中々 主「夫ならば汝でハ有まひ 誰であらふぞ アト「されば誰で御座りませふぞ いや太郎冠者めが合点参りませぬ 主「誠にそち斗せんぎをして太郎官者をせんぎをせぬ きやつが合点ゆかぬ 何としてよからふぞ アト「されバ何と被成てよふ御座らふぞ あ、思ひ出しまして御座る 此間棒を稽古致ます程に夫を御所望被成て其上で棒縛に被成ませひ 主「是ハ一段とよからふ 随分汝もぬからぬやうにせひ アト「畏て御座る 主「先急で呼出せ アト「心得て御座る 太郎官者めすハ シテ「何と召と云か アト「中々 シテ「はあお前に 主「汝を喚出スハ別の事でハなひ きけばそちハ此間棒を稽古してつこふと聞た程に少つかふて見せひ シテ「いやハ棒をつかひました事ハ御座らぬ 主「なかくいそ 次郎官者が告たよシテ「いやお目にかけます様な事でハ御座りませぬ 主「は

てくるしうなひ 慰じや 遣ふてみせひ アト「実とお慰の事じや 少おめに掛さしませ シテ「心得た 同「先棒に打手なしと申てこふつきましたがよふ御座る 主「そふであらふ シテ「扱夜の棒ハ引ましたが十に九もりがやう御座る むこふから打ッて参るをはねかへしつきます 或ハ左右へ払ひます又笠の内と申てこふ致ます棒が御座る (主ト二郎官者かを、見合テ) 二人「がつきめ やる事でないぞ (二人して太郎官者ヲしはる) シテ「某ハ太郎冠者で御座る 主「おのれハにくいやつ の アト「汝ひつくり共して見よ (ト云テ二人してしはる 二郎官者出テ笑) アト「あ、よいきみじや そちハ常々たなふだ人の御留守なれば御居間の酒を吞しまするに依ての事じや シテ「なんと身共斗吞ふたでハ有まいしそちも吞ふたでハなひか (ト云内ニ主二郎官者のうしろへ行テ) 主「おのれもにくいやつじや アト「私は次郎冠者で御座る 主「なんの次郎官者 アト「是ハめいわくに御ざる 主「急度としておれ (ト云テうしろ手ニしはる) シテ「なふそなたハ身共を笑ふたが夫見さしましたか (ト云テ笑) アト「さればせひに及バぬ事じや (二郎官者ハ左り太郎官者ハ右の方ニ下ニイル 主二人のまん中) 主「汝等ハにくいやつじやハ 某が留守にさへなれば居間の酒を吞る どうした事じや アト「いや私でハ御座らぬ 太郎官者で御座る シテ「いや次郎官者が吞ました 主「両人ながら其くわたいに某の帰るまでそうしておれシテ「あ、主「則是をも両人してよふ番のしをらう シテ「畏て御座れ共もし盗人はいりましてハ迷惑に御座る程に是をと

ひて被下^主 「おふ又しぜん盗人を入たらば兩人共にたゞハ
 おかぬぞ 頓てもとらう 二人 「あ、〔主ハ太鼓座二下ニイ
 ル〕^{シテ}「なふ次郎官者ろくにおりやれ ^{アト}「心得た ^{シテ}
 「何と思ふぞ たなふだ人ハ殊外さもふしひ人でハなひか ^{アト}
 「おしやる通りきたない人じやよ ^{シテ}「何と一ツ武ッ吞ふた分
 ハくるしうなひ事じや ^{アト}「其通りじや共 ^{シテ}「何とさびし
 うなつたでハなひか ^{アト}「実と是ハさびしうなつたハ ^{シテ}
 「やい ^{アト}「何事じや ^{シテ}「又例のをさはじめうではなひか
^{アト}「扱々わごりよハむさとした事を云 夫故二兩人ながら此
 様にいましめられたでハなひか ^{シテ}「尤夫ハそふなれ共か様
 にいたしめておかれた程に其替りに一ツ吞ふ 幸是二念の入た
 酒が有 ^{アト}「あゝいらぬ物でおりやる ^{シテ}「いや／＼くるし
 うなひ 盃を才覚すればよい ^{アト}「はていらぬ物じやか 「初
 ニ主こしかけを二人ニ預テ行トすくに其こしかけのふたをさか
 すきニする 又主初二こしかけをあつけすニ置時ハ太鼓座へ行
 テこしかけを持て出すくにふたをさかつきする 又さかつき斗
 持テ出テふたいにてくむ事も有 ^{シテ}「よふ／＼盃を才覚した
 一ツのもふ 「ト云テこしかけのふたにくむ ^{アト}「わご
 りよハ心実吞か ^{シテ}「のまいでなんとせう ^{アト}「たなふだ人
 のお歸り被成たらば唯ハをかせられまいぞ ^{シテ}「いや／＼身
 共ハ吞とふてならぬ のもふ 「ト云テ右の手ニてのもふとす
 る ^{アト}「あゝきやつハのむげな ^{シテ}「是ハのまれぬ しよふ
 が有 「ト云テ盃ヲ下ニ置かゞみてのむ ^{シテ}「扱も／＼よい
 酒じや 今一ツのもふ ^{アト}「のふ太郎冠者 身共も一ツ吞ふ

か ^{シテ}「いや／＼そちハいらぬ物じや ^{アト}「いや吞まひとハ
 思ふたれ共汝が吞を見たればこらへられぬ ひらに一ツのませ
 ひ ^{シテ}「そふもおりやるまひ 「ト云テふたにくミ出スていし
 て ^{シテ}「さあ／＼吞しませ ^{アト}「心得た 「太郎官者小うたい
 とう ^{シテ}「何と有ルぞ ^{アト}「是ハ近比吞ぬ酒じや たのふだ
 人がおしがるゝが道理じや ^{シテ}「其通りでおりやる 「ト云
 テ小謡うとふて酒をたかいに二ツ三ツのふで太郎官者ひかへ次
 郎官者二小舞を所望する 〈七つに成子〉を舞 又酒を次郎官者
 のミテ太郎官者へ舞をこのむ時太郎官者は〈十七八〉か又ハ〈と
 をる〉の謡に二もつや田子の浦 を舞 扱舞過テ小謡の内二主
 はやく立テはしか、り一の松にて云テ ^主「余程慰さふで御
 ざる 急で宿へ歸らふ 兩人共にいましめて置て御座ルがどう
 しておるぞ さればこそにくいやつじや 致やうが有ル 二
 人共二主の歸ルをしらすニ酒をくミて小謡うとふて盃を下ニ置
 ク 主ハそろ／＼と寄て二人の真中へ入テ見ている 二人ハ
 主を見付すに ^{シテ}「やい次郎官者 ^{アト}「やあ ^{シテ}「是見さ
 しませ 此盃の内にたのふだ人の影がうつるハ ^{アト}「何をむ
 さとした事を云ぞ 何しに盃の内へかけがうつる物じや ^{シテ}
 「是々見さしませ たなふだ人の影でハなひか ^{アト}「誠にたの
 ふだ人の景じや ^{シテ}「是と云もさもふしひお人じやに依てよ
 そへ行れても留守に兩人が酒をのむか／＼と思ふてしうしん
 ののこされた物であらう ^{アト}「あゝ其様な事でもあらう ^{シテ}
 「月ハ一ツ ^{アト}「景ハ二ツ ^{シテ}「三ツしをの「アト付ル」夜の
 盃に主をのせて主とも思わぬ内の者かな 「二人なからうつむ

いてのもふとする時に」主「なんじや 主ともおもわぬ」シテ
 「たなふだ人のお歸り被成た」主「おのれ〔ら〕ハにくいやつ
 の」アト「あ、助て被下ひ」〔ト云テにくる 太郎官者ハ大臣柱
 ニかゝみている〕主「おのれもにくいやつじや」シテ「夜の棒
 で参らふ」主「是ハ何事をするぞ」シテ「やあ」〔ト云
 テ主を太郎官者をおいこむ 主きをもつふし〕「やれあふない
 といゝなからにくるなり」

シテ太郎官者 アト次郎官者 二人共二出立嶋の物 狂言

上下 腰帶 扇

主 のしめ 長上下 小サ刀 扇

こしをけ 棒 布切一尺四五寸程二三割にして三筋入ル

〔シテ〕「たなふだ人ハしわい人じやに依テ留守に酒をのむか
 〳〵と思召おもかけがさかつきにうつる トモ云」

〔シテ〕「是に付てうたいやうがある 月ハひとつ 共云」

拾八 合柿

シテ「是ハ此他りに住居致柿売で御座ル 今日ハ落合の市で御
 座る程にあきないに罷出ふと存る 急で参らふする 今日ハ一
 入天氣もよし 定て大勢人もでらるゝで御座らふ程にあきない
 が有ふと存ル いや何角と申内に早是じや 先是に居つこふ
 まだ早ひかして思ひの外人もすくなひ」〔ト云テ大臣柱の方ニ
 すけかさを前ニ置テ下ニイル〕アト「何も御座るか」立衆「是
 に居まする」アト「兼而御約束申た通り今日ハ落合の市で御座

る程にいざ見物に参りますまひか」立衆「是ハ一段とよふ御座
 らふ」アト「さあ〳〵何も御座れ」皆々「心得て御座る」アト「何
 と思召ぞ」宿ニばかりいれれば気がつくしてわるふ御座ルが此様
 ニでますれば心がはれやかになつてよふ御座る なんと一入の
 慰でハ御座らぬか」立衆「仰らるゝ通り此様に皆同道致いて参
 ればいよ〳〵の慰で御座る」アト「其通りて御座る」シテ「され
 ばこそや段々皆みゆるハ」アト「参る程ににぎやかに御座る
 そろり〳〵と売物を見物ながら参らふ」皆々「夫がよふ御座
 らふ」〔ト云テ一返廻ル内〕シテ「柿をめしませい」〳〵落
 合の名物で御座る 柿をめしませい」〳〵アト「何も何と思
 召ぞ 此柿を買ふて土産に致さふでは御座らぬか」立衆「誠に
 お氣が付ました 何もよい柿ならはもとめませう」皆々「一段
 とよふ御座らう」アト「夫ならば見ませう」シテ「柿をめしませ
 ひ」〳〵アト「どれ〳〵柿をとらう」シテ「おめし被成ませひ
 アト」なんと是ハしぶうハないか」シテ「中々しぶうハ御座ら
 ぬ 殊外うまひ柿で御座る めしませい」アト「いや〳〵是ハ
 しぶそうな」シテ「こなたさまにハむざとした事を仰」〔ウ〕
 る、是程の内に一つもしぶいと申ハ御座らぬ 皆能柿で御ざ
 る」立衆「こなたの仰らるゝ通り此様なりの柿はめいよしぶ
 い物で御座る程にいつも御無用に被成ひ」シテ「申々何も方
 ハお目聞のわるひ事で御座る 是程有ル柿の内一つ成共しぶ
 いのが御座ると替りハ取ませぬ ひらに一ツ宛参て御らふじら
 れひ」アト「夫ならば汝くうてみよ」シテ「私がたべましてから
 ハうまいやらしふひやら知れませぬ 先こなたあがつて御らふ

じられませひ 立衆 「いや是ハ皆し柿で御座る シテ はて最

前も申通りしぶくハ私になげ付て帰らせられひ アト 「夫程に

云ならば皆とらふ程に一つ汝くうてみよ シテ 「取てくださり

やうならばたべて御目にかけませう アト 「おふよい柿ならば

とらう シテ 「さらばたませう アト 「先まで 身共がよつて

やらう シテ 「ト云テかきをよるまねおして」 是々これをくうてみよ

皆柿をとつて被下まするか アト 「中々 皆柿をとるとも シテ

「夫ならばたませう 立衆 「申々しふけれバうそがふかれぬ物

で御座る程にうそをふかせて御らふじられひ アト 「成程仰ら

る、通りで御ざる うまくハ夫をくふてうそをふいてみせひ

シテ 「うそをふけと仰らるゝか アト 「中々 シテ 笑テ」 シテ

「なんのふかれぬと申事が御座らふ ふいておめにかませう

アト 「さあ／＼早うくへ シテ 「今くいます 立衆 「くわぬか

シテ 「はてくひまする シテ 「くうまねをする しふかきてくいか

ぬるてい」 あ、うまい柿で御座る アト 「さあ／＼うまくハう

そをふけ シテ ぶう／＼と云テふきかぬる」 シテ 「あ、うも

ふ御座る アト 「なんと何も御らふじられて御座るか しぶか

きで御座るニ依てうそをふきませぬ 皆々 「左様で御ざる シテ

云テかきをほかして」 アト 「扱々おふちやく者で御座る 何も

御座れ／＼ シテ 「申々先待せられい アト 「何事じや シテ 「私

にくへとらうと仰られて御座る程にたべました 皆柿を取て被

下ひ アト 「いや其様なしぶかきハいらぬ シテ 「夫ならば柿を

たべた替りをおいて御ざれ アト 「それじやに依てよい柿なら

ば皆取てやらふず しぶくハ取まひと云たハ シテ 「うまから

ふとしぶからふとしやうばい物をくふとおしやつてその替りを

おかぬと云事が有物で御座るか 早ふおいて御座れ 立衆 「く

どひ事を云 其様なし柿をなんにする物じや さあ／＼御

座れ／＼ シテ 「まづまたせられひ 替りを置て御さらぬ内ハ

やる事でハ御座らぬ アト 「いやおのれハにくいやつ シテ 「ト云

テ皆取ツキ」 シテ 「是ハなんと被成るゝ アト 「なんとするとハ

にくいやつ シテ 「ト云ながら扇二てた、く 或ハつきたをし」

シテ 「あいた／＼ アト 「おのれがやうなやつハまつこふしたか

よい アト 「ト云テすけ笠を引くり返し中のこのはをほふり付テ」

「扱々にくいやつで御座る シテ 「是々柿をおかやしやれ アト

ふ／＼柿返せ／＼ かへせ合柿／＼ととべども／＼とりのこ

さるゝきまもりのいにしへの人丸ハ柿本に住ながら哥をあんじ

てそらうそを シテ 「ト云テあをぬいて」 ふう ふかせ給へるた

とへも有り かなしやわがうそのふかれぬ口をかきむしりこう

くわひしつ、頭をかきのくしざしにあらねどもひろひ

入たるしぶかきをかたげて宿に帰りけり シテ 「柿をめさ

ぬか 柿ハ／＼ 大臣柱 の方より目付柱の方へ云テ楽やへは

いる」

シテ 出立 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇 萱笠の内へもち

の木か玉つはきの葉二ても小枝を五六寸程二切テ十斗

入テかたけ出ル シテ 柱ノ先二下二置テ名乗

アト 立衆二三人出ル のしめ 長上下 小サ刀 扇

〔柿売ハ宇治 ○落合か ○ヲチカタか ○ヲフチか ○仁右衛門方ニテハ〕「だいこのかきが盛じや」 ト申

アト「是ハ洛中ニ住ひ致者テ御座ル 此比ハ宇治がきか盛じやト申程ニ皆ヲ同道致参らふ

アト「いや」是ハしぶかきをあわせかきにした物ぢや

〔むさとした事を仰らる、是ハこねりの上て御座る 立

「うむにしふさうな」アト「そちがかほつきてもしういハしる、くうてみさしませ

アト「夫ならハ身共が聞た事が有 うそをふいてみせい」

拾九 隠狸

アト「是ハ此他りに住居致す者で御座る 某召遣ふ太郎冠者ハいちもつの犬を持て毎日夜行に出て狸を取ルと申す 真か偽か尋にやうと存ル 太郎官者いるか

シテ「御前に」アト「汝を喚出すハ別の事でハなひ ければそち

ハいちもつの犬を持て狸をとると云が真か

シテ「是ハ思ひもよらぬ事で御座る 私さへ御扶持をもらふて被下まするになに

がゑようがましい 犬などをかいまする物で御座る

アト「いや」早かくれがない 皆わせふと有て今晚おしかけてわす

るはづじや 某も色々云たれ共汝と一ツになるやうにおもわ

るゝに依て今晚申入ずにハおかれまひ

シテ「早皆様御出被成るゝはづで御ざるか

アト「中々」シテ「是ハ又そこつな事を被成て御座る 先私と御談合被成て其上での事に被成ませいて

アト「誠に汝と談合して申入れハよい物を

シテ「早皆様御出被成ませふが

アト「誠に皆わせふがにが」敷ひ事じや やい

シテ「なにが私の方にあらバだしませふが心実御座りませぬ

アト「心実汝が方にながぜうならバ市にハ有う

シテ「何が扱御座りませいでハ

アト「夫ならば早ふ一ツもとめてこひ

シテ「畏て御座る」主ハ大臣柱ニ下ニイル」

是ハいいかなこと 某が犬を持たと云事を誰が申上たぞ

此度たす分ハ安う御座れ其後にハ犬までくれひと仰られてハ迷惑な

殊此度のハ大きう御座る 市へいてちいさいと売かよふと存る

「ト云テ太鼓座へのいて成共又ハ中入して成共たぬきをせおふて出ル」

アト「最前太郎官者を狸を求に遣して御座る あれハあの様でも酒すきで一ツのますると我が隠す事をも

云程の物で御座る 慰ながらさゝゑを持て参て一つのませととひおとさふと存ル

「ト云テこしかけをさけて大臣柱より目付柱へ行」

シテ「狸ハ」ト云テ橋かゝりよりうりて出ル」

狸をめさぬか 狸ハ」

「ふたいのまん中ニテ二人行合テ」

シテ「お前ハどこへ御座りまする

アト「宿に居よふよりハと思ふて慰ながらそり」とさゝゑをさげてきた

此他りがよいけいじや 某も一ツのもふ程に汝ものめ

シテ「あのさゝゑを

アト「中々」シテ「是ハよふ御座りませう

アト「酒とさへいハバきげんがかわつて殊外よろこぶ

さらばひらけ

「ト云テ太郎官者こしかけのひばとく内主立てはしが、りへ行

下ヲ見ながらそり」とぶたいへ出ル

主はやく立ニ依てシテもうろたへ立ながら狸をかくしながら立テ大臣柱の方ニイル」

「アト」はて合点のゆかぬ シテ「何をお尋被成まする アト」ち
 とおとした物がある （ト云ながら又大臣柱の方へ行 シテも
 目付柱ノ方へ行 下ニイル」 シテ「何をがなお落し被成ました
アト「いや／＼くるしうなひ さ、へをだせ （こしかけのふ
 たを盃ニして主のむ 太郎官者つぐ 主のんて太郎へさす 主
 しやくをしてやる （シテ「近年のまぬ酒で御座る」と云 又
 一つのみ時主小謡うとふ 太郎のんて （シテ「是ハ何と致しま
 せう」と云 （アト「こちへおこせ」と云 （シテ「兩外に御座
 りまする」と云 （アト「くるしうない」と云てのミひかへて
 舞をこのむ 太郎官者下ニイテ舞 シテ「きりくべて今ぞみか
 きもりゑじのたく火ハおためなり よくよりてあたり給へや
（ト云テろくにいて両手出しあたるてい」 アト「ほねをりに今
 一ツのめ （又小謡有テ盃ヲ主へ返し主ひかへて」 同「最初の
 ハみじかい 今一ツまへ シテ「最早御ゆるされませひ アト
「なんのゆるすと云事ハない 早うまゑ シテ「心得て御座る
 よし足引の山姥が／＼山廻りせぬぞくるしき アト「やい／＼
 山姥が山廻りせぬぞくるしきと云事が有物か 山廻りするぞく
 るしきととうたわぬぞ シテ「いや山姥ハ山廻りせぬぞくるしき
 かぜふで御座る アト「どこにかせぬぞくるしきと云事が有物
 か するぞくるしきととうたへ シテ「いやどう御座つてもせぬ
 ぞくるしきで御座る アト「扱々おのれハせうのこわひやつじ
 や 今度ハつれ舞にせう シテ「夫ハともかくもで御座る 二人
「いとま申て帰ル山の 地「春ハ梢に咲かと待し 二人「花を尋
 て山廻り （大臣柱の方より目付柱方ミテ」 地「秋ハさやけき

かけを尋て 二人「月見る方にと山廻り （口伝」 地「冬ハさへ
 行しぐれの雪の （口伝」 二人「雪をさそいて山廻り 廻り
 へてりんゑをはなれぬもうしうの雲のちりつもつて山姥と
 なれるきじよが有様見るや／＼と峯にかけり谷ニひゝきて今
 まて爰に有よと見へしが山また山に山廻り やま又山に山廻り
 して アト「是ハなんしや シテ「物て御座る アト「ものゝハな
 んじや シテ「むじなで御座る アト「やれおふちやく者 やる
 まいそ／＼

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

アト 紅段のしめ 長上下 小サ刀 扇 腰懸をさけテ

廿 八句連歌

シテ「是ハ此他りに住居致者で御座る 某誰殿と申仁より金子
 を借用致て御座るが度々人を被遣て迷惑致す 今日お断に参ら
 ふと存ル 先急て参らふずる せめて利分でも持て参れハ行よ
 ふ御座るがこふお断斗に参りても御合点被成るればよひが何と
 御座らふぞ いや参る程に是じや 物まう案内もう アト「表
 に物もふと有ルが誰も出ぬか 案内とハたそ シテ「物もふ
アト「ものまふとハ いやそなたか シテ「中々 私で御座りま
 す アト「待かねて居た 今人をやらふかと思ふ所へおりやつ
 た 先こふ通らしませ シテ「いや是がよふ御座ります アト
「よひと云事が有物か ひらに通らしませ シテ「いやもふ是に
 おります アト「是非とも通さねばならぬ シテ「夫ならば通

りませう アト「下に居さしませ シテ」心得まして御座る
 「やい」 「名ヲ云テ」 誰がきた程にそこをしめておけ シテ
 「申々私が盗人でハ御座るまいし左様に急度なされずともよふ
 御座る アト「いや其事でハおりない 算用する間まづそこを
 さいておけと云事でおりやるよ シテ」はあ是ハ此間見ませぬ
 内に御普請をなされて御座る アト「夫見さしませ 此普請の
 でくる間不沙汰をする」と云様な事が有物でおりやるか さあ
 算用をさしませ シテ「致まする 是ハどこからどこ迄も
 念の入った御普請で御座りまする あ、お物数奇な立させられ
 やうで御座る 床の様子あの花ハどなたの御手際で御座ります
 る アト「あれは身共の慰に致したよ シテ」私ハ何も存知ませ
 ぬが花など、申物ハ殊外六ヶ敷ひ物じやと申しまするが あ、よ
 ふ遊しまして御座る アト「さあ」算用を早ふめされひ シテ
 「只今致しまする あの掛物ハどなたのお手で御座る アト「あれ
 ハ世倅が書たのでおりやる シテ」あのかなぼうし様の アト
 「中々 シテ」是ハ御きよふな事で御座る 最早かなぼうし様の
 あれ程に遊しまするか さぞこなた様も御満足に御座りませう
 アト「推量して呉さしませ シテ」あ、お浦山敷事で御座ル
 是ハ御庭を見ますれば花盛りで御座る アト「其通りでおりや
 る シテ」見事な桜で御さりまする 八重も御座り一重も御座
 り扱々うつくしひ義で御座る アト「いやなふ シテ」あ、アト
 「きけバそなたハ歌連哥の座敷へ推参すると聞た 此花に付け
 て少当座をめされぬか シテ」夫ハ昔の事で御座る 只今ハ渡
 世にはかりかけまわりまして左様の事をばえ致しませぬ

アト「いや」そふでハ有まひ 今日ハ格別じや程にひらにめ
 されひ シテ「夫ならバ格別の事じやと仰られれます程に私も
 数寄の道で御座るに依て少案じてみませふほどに先こなたから
 遊バしませ アト「客発句に亭主脇と云事が有程にわこりよ
 らかよからふ シテ」あの私を客に被成て アト「中々 シテ」は
 あいかで御座るがこふも御座りませうか アト「何と シテ
 「花盛り アト「花ざかり シテ」御免あれかし松のがせ アト
 「松の風 よふ出来ておりやる シテ」何と御座るか アト「こふ
 もおりやらふか シテ」お早ふ御座りまする アト「桜になせよ
 雨の浮雲 シテ」桜になすな雨の浮雲 アト「是々桜になすなで
 ハおりやらぬ なせやでもつた句でおりやる シテ」はあ私ハ
 なすなかと存じまして御座る アト「いや」身共ハいつまで
 もなせやでおりやる シテ「第三ハ何と致しませふ 幾度
 も霞にわびぬ月の暮 アト「こひせめかくる入相鐘」シテ少あ
 とへさかり左の手耳の上へさし上」シテ「あ、少うつとふしう
 御さる アト「さふもおりなひ シテ」鶏もしばし心を延てなけ
 る アト「人目ゆるさぬ恋の関守 シテ」名の立につかひなたでそ
 忍ひ妻 アト「やあらそなたはいつ某が名の立つ程便をやつた
 事が有ぞ シテ」ゐや左様でハ御座らぬ さいぜん恋の関守と
 申前句が出まして御座るに仍テそれゆへ忍ひ妻を付まして御座
 る アト「是ハ尤でをりやる 少待しませ シテ」畏て御座る
 アト「いやあの人ハやさしいこゝろで御座る程に内々の借状を
 おませふと存ル なふ今のハなんでかなをりやる シテ」名の
 立に使なたでそ忍び妻 アト「あまりしたへば シテ」余りした

へば アト「ふみをこそやれ」(ト云テ借状ヲ出ス) シテ「是ハ

何で御座りまする アト「夫ハ内々の借状^テおりやが余りけふ

の句がよふ出来たに依て其褒美におまするぞ シテ「夫ハお心

入ハ忝な御座りまするが今「迄」遅りまするさへ御座ります

るに是をバ御じたり申ませふ アト「尤じやが余り句が出来ル

に依て是悲ともおまらするぞ シテ「最早調まするやうに御座

る 調次第に是をもらいまするで御座らふ程にこなたのかたに

をかせられて下されませひ アト「いや／＼どふ有てもやらね

ばならぬ シテ「ぜひ共こなたの方におかせられて被下ひ アト

「兎角やらねばならぬ シテ「で御座る アト「中々 シテ「夫な

らバいたゝきませふ アト「なふ是からハちよつ／＼ときて某

の句の相手に成て呉さしませ シテ「何が扱只今迄是が有てさ

へ参て御座るに此上ハせつ／＼参まして句の御相手になりま

せふ 最早御暇申上ませふ アト「おりやるか シテ「中々 二八

「左落葉」シテ「是ハいかな事 夢の覚たような事じや こ

れと云も某日比和哥の道に心をよする故に天神か玉津嶋の御利

生であらふ 此悦ひに和哥を揚て帰らふ へやさしの人の心や

いつ馴ぬ花の姿の。色顯れて此とのんの。かり物をゆるさ

るゝたぐいなの人の心や」 おもて八句で借金ハすらりとすま

した 誰こわひ者ハなひ 急で宿へ帰らふ

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

○アト 段のしめ 長上下 小サ刀 扇 借状二捧書紙

廿一 胸突

アト「是ハ此他りに住居致者で御座る 爰に誰と申者に金子を

取替て御座ルが今において埒を明ませぬ 今日ハ参り急度算用

を致さふと存て罷出た 先急で参らふずる 其上人を遣せばあ

まつさへちやうちやくを致す にくいやつで御座る いや参る

程に早是じや 某が声を聞て御座らば留守を遣ふ事も御座らふ

つくり声を以て喚出さうと存ル 「扇ヲ開きたいにあて」 物

もふ案内もう お宿か シテ「是ハ聞なれた声じや お目に

か、つてハいかゞな 留守をつかわふ 表に物まふと有ルが案

内とハどなたで御座る 「アトノ名ヲ云」 アト「誰でおりやる

が 「又シテ名ヲ云テ」 誰殿ハお宿か シテ「でまして留守で

御座る アト「左様に仰らるゝハどなたぞ シテ「となりの者で

御座る アト「夫ならバそふ云て下されい 誰で御座るが今日

参つたがお目にかゝりませぬ 又此間に参らふと云て被下い

シテ「心得ました よふ御ざりました アト「是ハいかな事 今

のハ慥に誰が声じやが某が声と聞て留守をつこふたと見へた

致様が有る シテ「扱も／＼あぶない事で御座る すでにお目

にかゝらふと致た お目にかゝつたらばよい物か 「ト云テ下

ニイル 又アト立帰り」 アト「物まふ たれ殿ハ御座るか シテ

「またもどられたと見へた 留守で御座る アト「こなたハどな

たで御座る シテ「となりの者が留守をしております アト

「となりの人で御座るか シテ「あ、アト「夫ならばとなりの人

にあいとう御ざる 是へ出させられひ シテ「留守を致ており

まする 御用があらば夫から仰られひ アト「いやあひましと
ふ御座ル 是へ御座れ シテ「夫へハ参られませぬ アト「ひら
に是へ御座れ「ト云テむりに引出ス」わごりよハ内に居て留
守をつこうか シテ「あ、面目も御座らぬ アト「面目もないと
ハ内に居て留守をつこふと云事が有物でおりやるか シテ「さ
れバ其事で御座ル 段々ふらちを致しまして御座ルに依て御目
にかゝるが面目なふ御座るに依て先留守をつかいまして御座る
アト「そなたハ聞へぬ 某がくれば内にいて留守をつこふ
人をおこせばあまつさへちやうちやくをさします 其様な事が
有物でおりやるか シテ「いや夫ハお使の申なしで御座る 何
しに左様に致物で御座る アト「其様な人でハないと思ふて取
替ておませたれば沙汰のかぎりな人じや 今日ハ急度算用致さ
うと存て参た程にはやう元利共に算用をさしませ シテ「其事
で御座るハこなたのおとりかへ被成て被下ましたに依て何とぞ
才覚致て御返を申ませうと存てあなたこなたへ申て御座るが
と、のへかねまする故に一日／＼とおそなわりまして御座る
何とぞもそつとおまち被成て被下ませひ アト「わごりよハ
たび／＼其様な事ばかりおしやる そふいわず共元利共に急
度算用をしておこさしませ シテ「成程利分ハ算用をゐたしま
せうが元金の義ハ何とぞ来月迄お待被成て下されませひ 来月
た半分上ませふ程に左様に思召て被下ませひ アト「いや／＼
其様に待事ハならぬ程に某が方へおりやつて急度算用せねばな
らぬ程にこふおりやれ シテ「参たと申ても元利共に持て参ら
いで算用も致にくふ御座る 来月持て参て算用致ませう程に夫

まで御待被成て被下ひ アト「いや／＼最早待事ハならぬ さ
あ／＼おりやれ シテ「参りハ参りまするが参ても持て参
らいでハ氣毒に御座る アト「はていわれぬ事をいわずとも先
へおりやれ シテ「あ、参りまする アト「そなたハ今迄おそな
わるはずでハなひ りちぎな人じやと思ふて取替たればさん／＼
／＼ふらちな人じや シテ「私も何とぞ上ましとふ御座るに依て
方々と御無心の申すれ共と、のへかねまする故に御不沙汰ば
かり致します アト「いやくる程に是じや こふお通りやれ
シテ「いや是におりまする アト「是にいてハならぬ ひらにこ
ふとをらしませ シテ「いや是に居付ました アト「いわれぬ事
をゐらず共是へとをらしませ シテ「あ、アト「やい／＼誰が
きた そこをしめてをけ シテ「申々はハ又余りといへばおな
さけないぎで御座る アト「いや／＼そふした事でハない 算
用をするを人が見ればわるい物じや程にさしておくと云事で
おりやる シテ「あ、夫ならバよふ御座るが アト「さあ／＼算用
をめされひ シテ「前から申上まする通り元金の義ハ来月半
分上ませう 先今日ハお帰し被成て被下ませひ「ト云テ立」
アト「いや身が所へ同道してきて帰すことハならぬ 早ふ算用
さしませ シテ「何程算用致とふ御座つても持て参らいでハ算
用成ませぬ とかく今日ハ御返し被成て被下ませひ「ト云テ立
テ行ヲ」シテ「ハヤクトラヘテ」アト「是たどこへ 帰す事
ハならぬ 算用せぬか シテ「致とふても持て参りませぬ アト
「今迄待た事じや程にもつてこぬと云事が有物か さあさむよ
ふをせぬか」シテ「ムネトラヘテイテツクマネ」シテ

「あいた」~~~~「アトノ名ヲ云テ」誰があいてじや

出合~~~~あいた~~~~「アト」なふ何とめさつたぞ^{シテ}「こな

たの余りむねをつかせられて御座るに依ていとうて成ませぬ

相手ハ「名ヲ云テ」誰じやあいた~~~~誰もないかあ

かなしやあいた~~~~「アト」是々余りかしまじういわし

ますな利分ハゆるしてやらふぞ^{シテ}「其様な事でハよふ成

事でハ御座らぬあいた~~~~誰もないか誰が相手じや

あいた~~~~「アト」やれひらにかしまじう云てくれるな夫な

らば元利共にわごりよにおます程に是でハむねのいたミもや

わらこふぞ^{シテ}「よふこなたの元利共二とらずにおこふぞ

あいた~~~~「アト」是々何が偽であらふぞゆるしておま

せふ^{シテ}「あ、夫で胸のくつうが少よふ御ざるまだ少あい

た~~~~「アト」なふ~~~~是をもおますぞ^{シテ}「そりやなんで

御座る^{アト}「是ハわごりよの方からきた借状じや^{シテ}「どれ

少見せて被下ひ^{アト}「是でおりやる^{シテ}「夫ならバ是へ被下

い「ト云テ取テ」誠にはで御ざる夫ならバ最早皆済まして

御ざるの^{アト}「中々「ト云トシテ笑出ス」^{シテ}「是が有たに

依胸がいとふ御座つたお返し被成たればすきとよふ御座ル

「笑テ借状を持てにくる」^{アト}「やれおふちやく者じやこち

へおこせ^{シテ}「是ハ成ますまひ^{アト}「やるまいぞ」

シテ出立 嶋の物 狂言上下 腰帯

○アト 色無段熨斗目 小サ刀 扇 借状捧書紙ヲ文ニ折テ

「シテ帰らうと云時ニアトとらへてむなぐらをすくにもつく

又左りの手にてむなぐらをとらへて右の手の扇をとりなをし

なめの方にてむねをつくまねをもする」

廿二 包橘

「アト」是ハ此他りに住居致者て御座ル先召遣ふ者ヲ喚出し尋

ル事が有太郎官者いるかやい^{シテ}「はあ^{アト}「いたか^{シテ}

「御前に^{アト}「汝を喚出すハ別の事でなひ夜前ハ殊外の大御

しゆでハなかつたか^{シテ}「御意の通り大ごしゆで御座りまし

た^{アト}「某もよふのふだと覚ルが汝ハ何と思ふぞ^{シテ}「こな

たにもずいぶんめしあけられて御座る^{アト}「それについて汝

二何やらあづけたよふに覚ル^{シテ}「いやなにもあつかりハ致

しませぬ^{アト}「いや何やらあづけたよふなが^{シテ}「あ、思ひ

出しましたとつて参りませう^{アト}「急で取てこい^{シテ}「是

ハいかな事夜前三つなりのかうじをおわたしなされたをわす

れさせられたかと思ふてたべたが何とした物であらういや思

ひ出したたのふた人ハ正直な御方じや程に面白をかしう申な

そう申々夜前のハ三つなりのかうじて御座りました^{アト}

「誠にかうじてあつたいそいでおこせい^{シテ}「先私の分別と

おき、被成ませい^{アト}「何と^{シテ}「もはやお立じやと存まし

ても、だちをとつておゑんのさきにつくぼうて御座ればこなた

にもかうじのでしたをしほに被成それをとつてお立被成や

い太郎官者はをもて仰られて御座るそれを請取ましてこな

たのお手を引て参るところ~~~~と致て御座ルに仍テことば

をかけました^{アト}「何と云てかけたぞ^{シテ}「やいかうしよ

／＼と申て御座ればかうしも心有かいたいてこのはをたてについで御門の内にとまりましたか是ハこうじもんのいてすと申事てかな御座りませう アト「汝ハこびた事を覚えているな シテ「扱それを取まするとてふミつぶいて御座るに仍テかわをむいてたばまして御座る アト「くうたれハくるしうない 残りが有ふ程にそれをおこせい シテ「それよりふところへ入て参て御座れば何とやらひいやりと致すに仍テ手をやつて「ミテ」御座ればいいのつかなかにおされてつふれましたに仍テこうしをきめました アト「何と云てきめたぞ シテ「やいそこなやつ手にもてハほぞかぬくる ふところへいるれハつぶる、しよせんおのれがやうなやつハ致様が有ると申てかわをむいてすじをとつてくつとたへまして御座る アト「やあ／＼くうた シテ「中々 アト「今一つあらう程にそれをおこせい シテ「それに付ましてあわれな物語が御座りまする 申上ませう (アト)「急ていゑ シテ「畏て御座る 昔へいせうこくの御時 アト「やれ爰な者 シテ「先お聞被成ませい 三人のるにん有しかバ一人ハ丹波の少将成つねへいはんぐわんやすより入道二人ハしやめん有 しゆんかん一人彼嶋におとまりたる 其ごとく三つ有しこうしが一ツハつぶれ一つハほそぬけはや太郎官者がろくはらにおさまりぬ 人とこうしハかわれとも思ひハおなし心かな 三人の流人か二人ハしやめん有り しゆんかん一人かの嶋におとまりやつたハ何とあわれな事でハ御座らぬか (ト云てなくまね) アト「いや身共ハいつさいあわれにハなひ シテ「あ、此様なあわれな事ハ御座らぬ (アト正面へ少開テ) アト

「是はいかな事 なんののかのとぬかしておこすまゐといたすとよりようが御座る ふへも一つのかうしハなにとして有ぞへ シテ「まだをはたしやらぬと見へた こたへようが御ざる ふしへものとまたいたゐた (アト)「へなにとまたして有ぞ (シテ)「へもふとまたつかまつた (アト)「へなにとまたしたぞへ (シテ)「へもふの「ト」またいたゐた (アト)「何と (シテ)「物と (アト)「何と (シテ)「これも太郎官者が六はらへおさめて御座る (アト)「なんでもない事 あちへうせい (シテ)「はあ

シテ太郎官者出立 嶋ノ物 狂言上下 こしおひ 扇
アト主出立 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

廿三 附子

主「是ハ此他りの者て御座る 先召遣ふ者を呼出シ談合致事か有 太郎官者いるかやい シテ「はあ 主「いたか シテ「御前に 主「早かつた 次郎官者をよへ シテ「畏て御座る 次郎官者めすハ 二郎「何と召と云か シテ「中々 二人「両人の者御前に 主「汝等と呼すハ別の事でない 今日ハ去ル方へ遊山に行程によふ留守をせい シテ「いつも両人の内て一人ハお供を致しまする程に次郎官者成共身共成共参ませう なあ次郎官者 二郎「おふ御供仕ませふ 主「尤汝等か云通りいつも両人の内て一人つるれども身共のけふハ思ふ子細が有ル 両人なからそれにまて 二人「畏て御座る 主「是々これハふすと云て人の身に

だいとくじや 其風かあたれバめつきやくする物じや程によふ留守をせい シテ 「それならハ兩人なから参ませう なあ次郎官者 二郎「おふをともし致ませう 主 「それハなんじらが聞ようがわるい そちが云ハ留守身共の云ハぶすと云てかぜがあたつてもめつきやくする物じや程にそばへよらずによふ番のせい シテ 「畏て御座る 主 「頼りもとらうぞ 二人「やかてお帰りのされませい ト云ト主ハ太鼓座ニ下ニイル シテ 「やい次郎官者 先下にいさしませ 二郎「心得た セうぎハ正面ニ有 アト笛座ノ方 シテハして柱ニイル ろくにいて シテ 「いつも兩人の内て一人召つれる、か二人共におかせられたハ何とした事ぞ 二郎「されバ某ハいちゑんふんべつにあたわぬ わこりよハ何と思ふぞ シテ 「某の思ふハあのふすハ大事のおたからじやと見へた 二郎「いかさま其様な事て有う アトふつと立テ橋か、りの方へ シテ もつ、いて立也 シテ 「是ハ何事じや 二郎「ぶすのきわからあた、かな風か吹てきたによつて ナまぬるいカセ共云 めつきやくするかと マ 思ふてにけてきた シテ 「別の事も有まい わこりよか立さわくに依テ身もよいきもをつふしたのふ 二郎「や シテ 「なんと思ふぞあのぶすをミ見まいか 二郎「いや／＼そばへもよるなど仰られたに見る事ハ成まい シテ 「さりなからしぜん人のそなたのたのふた人の所にハぶすと云てめいよの御宝物が有など、きいたか見た事か有ルかなと、いわふ時い、やついにみたことかないとはいわれまい 二郎「尤なれ共風があたつてもめつきやくすると仰られたものを なんととして見る、物じや ト云

なからしてハふたいのまん中の方へ出ル 二郎ハシテ柱ノ方へ出る シテ 「いやあの風が人の身にどくじやと仰られたほどにかぜをばこちからあをぎ返してみう 二郎「是ハ一段とよからう シテ 「さあらハ某かを、とこふ程にずいぶんあをいてくれさしませ 二郎「心得た シテ 「さあ／＼あをかしませ ト云テシテあをいてよる 二郎「あをくぞ／＼ ト云テあをくシテ のあをきやうとちこうたがよし さあ／＼とかしませ ト云テアトあをいてる シテを、といてにくるアトモにくル 大小ノ座ノ方へ二人共ニ行 シテ 「といたぞ／＼ 二郎「といたか／＼ シテ 「某のを、といた程にわこりよふたをとらしませ 二郎「を、とくぶんないとやすい事じやがふたをとるハこわ物じや シテ 「身共もずいぶんあをいてやらう程にふたをとらしませ 二郎「わこりよもあをいてくれさしますか シテ 「中々 二郎「それならハとらふ さあ／＼あをかしませ／＼ ト云テアトあをいてよる シテ 「あをくぞ／＼ アをいてよる時扇の持やうちかふたか吉 はやうとらしませ アトふたを取テ二人共ニくる 二郎「とつたぞ／＼ シテ 「とつたか／＼ 先いき物でハないぞ 二郎「なぜに シテ 「いき物ならバふたをあくるといなやとひせう事じやが先いき物ではなさそうな 二郎「誠にわこりよか云通りいき物でハなさそうな シテ 「たゞし人かしらぬまでい 二郎「それもしれぬ ト云テシテアトそろ／＼出テのひあかりミル シテ 「ミたか／＼ 二郎「中々 シテ 「何とみた 二郎「青物と見た シテ 「某ハうず黒ひどんミりとした物と見た いやのふ

二 郎 「や」シテ「某ハあのおすをくうてみうと思ふ」二 郎 「扱々そちハむふんべつな事を云 あれがくわるゝ物か」シテ「いやくうてしんだりともくるしうない あとの事ハわこりよにたのむぞ」二 郎 「なんと云てもやる事ハならぬ」シテ「ひこをるそてをふりきりてふすのもとにぞよりにける」

二 郎 「あまりそばへよらしますな 中に何やらあをい物か見ゆる」シテ「いゝや其様な物でハない 黒ひ物がどんどりとして有ルハ」シテハ大小ノ前ニイル アトハシテ柱ノ方ニ

二 郎 「すかぬ事じやなあ」シテ「なふ」二 郎 「や」シテ「某ハあのおすにりやうしられたやらくいとうてならぬ程にくいに行ぞ」シテ右ノ袖とらへて」二 郎 「やれ爰な者 そちをやつて身共かいらるゝ物か やる事てハないぞ」シテ「いやどうでもはなさしませ」二 郎 「どうあつてもやる事てハないぞ」シテ「はなさしませ」二 郎 「いやはなさぬ」つめてからうたい出ス」シテ

「なこりの袖をふりきりてぶすのきわにぞよりにける」二 郎 「是ハいかな事 くうげなハ」シテ「こしおけを前へよせ扇ニてすくいぐうまねしてつむりを打」シテ「む」シテのつむりをおさへ」二 郎 「やい太郎官者 きを付いはい」シテ「さとうじやい」二 郎 「やゝさとうじや」シテ「中々」二 郎 「是ハいかな事 たまされた

「ト云内ニシテひた物ねぶる」二 郎 「ちとちへもよこさしませ」ト云テひつたくり大臣柱ノ方へ行ねぶる」シテ「せわしい 皆にせず共」ト云ながら立てこしをけをとる」少こちへよこさしませ」二 郎 「のふゝ又こちへもよこさしませ」こし桶をとりそこをはらいくうていする」シテ「やいゝ皆にす

るな 皆にしたか」二 郎 「皆にしたかとハあとにそここの

こつたをはらふてくうた」ト云テこし桶を下ニ置ク」シテ

「よい事をめさつた たのふだ人のお帰リ被成たらば申さう

二 郎 「くいそめたがわこりよじや程に身も有ふに申そふ」シテ

「是ハされ事じや」二 郎 「人によいきもをつふさせた」シテ「あ

かけ物をやふらしませ」二 郎 「いや身共ハやふることハならぬ

シテ「あのかけ物をやふらしませねはぶすの云わけがたゝぬ

二 郎 「それならバや」シテ「らうか」シテ「おふやぶらしませ

シテのみた所の方を両手ニテ引さく躰」二 郎 「ざらりゝざ

らゝゝゝやぶつたぞ」シテ「あのやぶらしましたか

シテ「中々」シテ「そもやゝやぶれと云たとてやぶるものか

ぶすと云物ハ世間にをゝい物じやがあのかけ物ハたのふだ人の

御ひさうなさるゝかけものをやぶらしました程に御帰リ被成た

らバまつすくに申さう」二 郎 「やぶれと云たはわこりよじや程

に身もまつすくに申さう」シテ「是もざれ事じや」二 郎 「はてざ

れ事ぶかいぞよ」シテ「あの」シテ「今日度ハもるともにわらう

「いや身共ハわる事ハならぬ」シテ「今度ハもるともにわらう

二 郎 「わこりよもわるか」シテ「中々」二 郎 「それならハわらうか

「二 郎 さきへ茶わんを取シテハあとよりだいを取さきへなげ

る 又シテさきへ茶わん取二 郎 ハあとよりだいを取さきへも

なけてもよし」ぐわらりシテ「ちん」二 郎 「はゝあ われたハ

シテ「みじんになつた」二 郎 「してたなふだ人の御帰被成

たらバなんとせう」シテ「なけ」二 郎 「なけば云わけが立か

シテ「おふたつとも」二 郎 「それならばなこう」シテ「御帰リ被成るゝ

時分じや まづ下に居さしませ 二部「心得た」二人トモ二大

小の前のあたり二郎笛座ノ方 シテハシテ柱方 主ハ橋かゝり

立テ 主「よほどなくそうで御座る」マツ」急で宿へ帰らう

やい／＼太郎官者次郎官者もどつたぞ／＼（ト云テふたい

の方へくる」シテ「さあ／＼なかしませ／＼」（ト云テ二人ト

モ二なく 主ハ大臣柱の方へ通ル」主「某のもどつたをよろ

こぼうとハせいではゆるハ何事じや シテ「いwashませ 二部

「ゐwashませ 主「太郎官者ゐわぬか」（シテひさをなをして）

シテ「其お事で御座る 次郎官者が申事にハあまりさミしう

てねいる程にいざすもふをとらふと申て御座るに仍テいよと申

て御座ればむりにこがいなを取テ引立まするに仍テあまりめい

わくさにあのかけ物に取つて御座ればあのやうにやぶれまし

て御座ル 主「是ハいかな事 おのれらハ何事をしをつた シテ

「それから右左りへ引廻してあの台天目の上へもていてずでい

どうどなけて御座るに依てあのやうに／＼こミじんになつて

御座る 主「扱も／＼おのれらハ気がちごふたか シテ「とても

いけてハおかせられまい程にぶすをくうてしのふと申て なあ

二部「おう シテ「ひとくちくへどもしなれもせず 二部「二く

ちくゑどもまだしなず 主「何事をぬかす シテ「三口四口 二部

「五口 シテ「十口あまり 二人「皆になるまでくうたれども

「シテト二郎むかい合テ」しなれぬ事の出度「さゆふする」

さよ「二人トモ二扇開テつむりにあて主の前へ出る」あらか

しらかたや候 主「なんでもない事 あちへうせぬ」（ト云テ

シテお扇にてうつ 二郎官者を」主「まだそこにおけるか」（ト

云テ是をも打テすくにかくやへはいるなり シテ次郎官者もつ
いてはいる」

シテ太郎官者出立 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

アト二郎官者出立 のしめニテも 狂言上下 腰帶 扇

又アト主出立 段のしめ 長上下 小サ刀 扇 こしおけ

入ル

廿四 口真似

アト「是ハ此他りの者で御座る 先召遣ふ者を喚出し談合仕ル

事が有 太郎官者いるかやい シテ「はあ アト「居たか シテ

「お前に アト「汝を喚出す事別の事でなひ 山こゑて御酒をも

らふたが誰をあひてにしてのもふなあ シテ「お相手こそ御座

れ アト「どこに シテ「某 アト「おのれがやうにすば／＼とく

らふばかりがのふでなんの役にたとう 誰がよからうしらぬま

で シテ「誠にどなたがよふ御ざりませう アト「誰かれとゐを

よりハ汝才覚で呼ましてこひ シテ「畏て御さる アト「夫に好

が有ル シテ「いか様なお好で御さる アト「酒を参りそふでま

ひらいで又参らぬかと思へばよふこしめすお方を汝見つくらふ

て呼ましてこひ シテ「畏て御座る アト「はやう行 シテ「心

得ました アト「英 シテ「はあ 是ハいかな事 仮初ながら

六ヶ敷事を被仰出た 酒を参りそうで参らいで参らぬかと思へ

ば又よふこしめすお方をどなたにハよるまひ 汝才覚で喚まし

てこひを仰付られた どなたがよからふしらぬまで いあ思ひ

出した 爰に某にお目被下るゝ、お方が御がざる 是を喚まして参らふ 何とお宿二御座らふか御がざるまひか知らぬ事じや あれハお隙な者じやが何とお宿に御座ればよひが いや参る程に早是じや 物もふ 案内もふ 客「表に物もふと有が案内とハたぞ シテ「御宿に御がりまするか 客「いや太郎官者か シテ「中々 私で御座る 客「してなんと思ふてわせたぞ シテ「夫ならば追付申ませう 頼ふだ人申されます 山こへて御酒をもらいました程に御出被成て一ツ参つて被下りやうならばかたじけなからふと申されます 客「お使忝なふハあれどもけふハ叶ハぬ隙入が有程に成まひ シテ「こなたのお隙の入せらるゝ、ハいつもの事で御座る程に御出被成て一ツ参て被下りやうならば私迄も忝なふ御座りませふ 客「わごりよが夫程に思ふならばゆこふまでひ シテ「夫ハ忝なふ御座ります さらばこふ御がりませ 客「夫ならば身共が行ふか シテ「中々 おさき多御座りませ 客「さあゝおりやれゝゝ シテ「畏て御座る申お宿に御座らふか御座ルまいかと存て道であんじまして御座るに御出被成ますやうな嬉しい事ハ御座りませぬ 客「身共も隙のなひ者じやがけふハ宿にいやわせてたがひの仕合じや シテ「とこふ申内に早是で御座る 夫にお待被成ませ 客「心得た シテ「たなふだ人御座りまするか 太郎官者が帰りまして御がる アト「いや太郎官者もどつたとみへた 太郎官者もどつたか シテ「御座りまするか アト「もどつたか シテ「御がるかゝゝゝ アト「もどつたかゝゝゝ シテ「只今帰りまして アト「してどなたを呼ましてきた シテ「何もこなたへ御がた

るお方を呼まして参て御座る アト「おのれハひろい事を云是へもあまた人の出入が有が名ハ何と云たぞ シテ「名ハ慥か「たれ成共アトノ名ヲ云」 アト「あれをよふできたか シテ「中々 アト「おのれあれをしらぬか シテ「いゝや アト「あれハめいよのすいきやうじんで酒を一ツなふでハ刀を一すんぬき二ツなふでハ二すんぬきたびかさなればあたりに誰もおらぬやうなすいきやうじんのよふでうる物か 某ハ対面する事ハならぬ 早ふいなせひ シテ「尤おいにやれと申たらばおひにやりませうが重而の御さんくわひにお詞が御がりますまひ アト「誠に汝が云通り重ての参会に詞が有まひなあ シテ「左様で御がります アト「すいきやうじんじやとハ云ながらあれハ京田舎を走りまわつて「つと」目はづかしい人じやに依てあの前でつかおふ者がない シテ「お遣ひ被成るゝ者こそ御座れアト「どこに シテ「某 アト「おのれがやうな腰の高い者が何とつかわるゝ物じや シテ「腰「が」高くハ何程なりともかゞめませう アト「いや そのこしの高ひひきいの事でハなひじぎさほふをしつた者の事を云よ シテ「じぎさほうとやらハ存じませぬ アト「と云ても俄にやとひにもやられまひがなんとした物であらう シテ「誠に何と被成てよふ御座らふ アト「こふいうて某がじぎさほうをしつたでハなけ「れ」共たゝ某の口まねをせひ シテ「あのこなたのお口まねをか アト「中々 シテ「安事致ませう アト「いてゐおふずるハ早々に申入ませうを内客御座つておそなりました 表におりまする こふお通り被成ませひとへ シテ「是ハはしつて参りませうか 静に参り

ませふか アト「めはずかしいといへばおくしてこくふな事を云 いつものごとくに行け シテ「手ハどこに置ませう アト「夫もふだんの所におこふ シテ「畏て御座る お待どふに御座らふ 客「そうもなるよ シテ「たなふだ人申「サレ」まする 早々に申入ませうを内容御座つておそなりました おもてにをりまする こふお通り被成ませと申されます 客「夫ならばとふらうか シテ「中々 御通り被成ませ 客「只今ハ御使泰なふ御座りまする アト「俄に申入まして御座る所に早々の御出泰なふ御座ります シテ「にわかに申入まして御座る所に早々の御出泰なふ御座ります アト「もそつとこふ御通り被成ませ 客「是がよふ御座る シテ「もそつとこふお通り被成ませ アト「やい太郎冠者お盃をだせ シテ「やい太郎冠者お盃をだせ アト「おのれがことじや シテ「をのれか事じや 〔主大臣柱の方へ立テ〕 アト「是ハいかな事 あひつハ気が違ふたそふなやいこひ シテ「や アト「おのれハきが違ふたか 本のお盃を座敷へだせと云事じや 〔ト云テ扇ニテシテのかたをた、く〕 シテ「はあ 〔ト云テシテ柱ノキハニテ〕 是ハいかな事 あひつハ気が違ふたそふな やいこひ 〔ト云テ扇ヲぬききやくをよふ〕 客「何事じや シテ「おのれハきがちこうたか 本のお盃を座敷へだせと云事じや 〔ト云テ扇ニて客をくわす〕 客「何事をぬかず 〔ト云テもとのざへ行〕 アト「扱々ぶしつけな者を遣ひまして面目も御座らぬ 客「少もくるしう御座らぬ シテ「扱々ぶしつけな者を遣ひまして面目も御座らぬ アト「おのれハまだぬかすか シテ「をのれハまだぬかすか アト「立

おれ 其〔口〕まねの事で〔ハ〕ない 正身のお盃を座敷へ持て出よと云事じや 〔主シテノ耳取テ一辺引廻ス〕 シテ「はあ 〔ト云テ客の耳ヲ取テ〕 立をれ 其〔クチ〕まねの事でハない 正身のお盃を座敷へ持て出よと云事じや 〔ト云テ主のまねして客ヲ一返引廻ス〕 アト「はて扱お耳がいう御座らうまつひら御免なれ 〔客少もくるしう御座らぬと云ナリ〕 シテ「はてさてお耳がいとふ御座らふ まつひら御免なれ アト「しよせんこなたの夫に御座ればあいつがなんのかのと申てわるふ御座る 唯是へ御座れ 〔ト云テ客の手ヲ取テ引〕 客「いや是がよふ御座る シテ「しよせんこなたの夫に御座ればあいつがなんのかのと申てわるふ御座る 只是へ御座れ 〔ト云テアトハ客の左りの手ヲ取テ引 シテ客の右の手ヲ引はる〕 アト「いや是へ御座れ シテ「いや是へ御座れ 〔ト云テ客の手ヲ取テ両方へひつはる〕 客「是ハめいわくに御座る アト「おのれがやうなやつハまつこうしたかよひ 〔ト云テシテの足を取テ打こかしのく〕 客「はてさて気毒な所へきた 〔シテおきて客ヲとらへテ〕 シテ「おのれがやうな者ハまつこうしたがよひ 〔ト云テ客の足を取テこかし〕 シテ「見えたか 〔ト云テ楽やへ入 客おきて〕 客「是ハあらけな地走におふた事かな 〔ト云テ楽やへイル 又追込ニもする 其時ハシテ〕 見へたか と云テにくる 客おきて 〔やれやるまいぞ 〕

〔△今日ハ思召寄ましてお使泰なふ御座りまする〕
〔△アトシテヲこかす 又シテ客をこかして 〕シテ「夫にゆるり

と御座れ と云はいると (客)「やれおふちやく者 やるまい
そく 共云)

シテ太郎官者 嶋の物 狂言上下 腰帶

○主アト也 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

客 のしめ 長上下 小サ刀 扇

廿五 颯花

アト「是ハ此他りの者で御座る 先召遣ふ者を喚出し談合仕ル
事が有 太郎冠者居ルかやい シテ「はあ アト「いたか シテ
「お前に アト「早かつた 汝を喚出す事別の事でなひ 此中
方々に哥連歌のはやる事でハないか シテ「御意のごとく夥敷
ひ事で御座る アト「夫に就て某もくわゝりたけれ共汝がしる
ごとく無調法な 某の伯父や人ハつつと此様な事をゑていら
るゝに付喚下してならおふと思ふがよからふか シテ「誠に是
は一段とよふ御座りませふ アト「よからふ シテ「中々 アト「さ
あらば汝は大義ながら都へ登ツて伯父や人を喚ましてこひ
シテ「畏て御座る アト「いていおうずるハ其後ハお久しう御
座りますれ 弥御息災に御座りまする つきましてハ爰許でハ
初心講がはやりまする 夫に私もまじわりとふ御座れ共かたの
ごとく不調法に御座ります 又こなたハ其様な事をゑて御座り
まする程に御太義ながら御下り被成て宗匠をも被成て被下ませ
うならば忝なからうと云て喚ましてこひ シテ「畏て御座ル
アト「早ふゆけ シテ「はあ (ト云ト主ハ大臣柱の方ニ下ニイル

太郎官者ハシテ柱ニテ) 是ハいかな事 仮初ながら急な事
を被仰付た 先急て参らふと存ル 常に皆の咄を聞に都へハ広
ひ海道をさへ参ればうたがひがないと申が是ハはや都近くかし
て殊外にぎやかな さればこそ都じや 扱もくきれいな屋
作りかな いや田舎にハ此様な事ハ有てこそ 某ハ物をはつた
としつねんのした事が有 身共のたなふだ人の伯父子様のお宿
をも又お名をもきいて参らなうたがんと致してよからふ 何
事もよバわりさへすればと、のふとみへた 是から少とよばわ
つてみやう たのふだ人の伯父子様のお宿ハ爰許でハ御座らぬ
か (常ノ通り) じやあ 爰許にハないとみへた もそつとか
ミへ登らう たなふだ人のおちこ様のお宿ハ爰元でハ御座らぬ
か スツハ「是ハ此他りで心のすぐにもない者で御座ル 田舎者
と見へて町表をわつはと云 かれにちとあたつてみやうと存ル
なふく のふそこな人 シテ「こちの事で御座るか スツハ
「中々 此広ひ海道を何をわつはとおしやる シテ「別にれうじ
ハ申さぬ まつひら御免なれ スツハ「いや聊ルハおしやるまい
がして只今ハ何をおしやつたとの云事でおりやる シテ「某ハ
田舎の者で御座る たなふだ人の伯父 (ご) 様のお宿を尋ます
る スツハ「してその伯父子おばおしりやつたか シテ「其伯父
子様も存ぜぬ 又お名をも聞て参らなんだ スツハ「そちハしや
わせな物じや シテ「なせに スツハ「汝が尋ルおじハ某じや
シテ「あのこなたで御座りまするか スツハ「中々 シテ「扱々存じ
ませいで両外申ました まつひら御ゆるされませ スツハ「いや
少もくるしうなひ して只今ハ何としてきたぞ シテ「夫なら

ば追付申ませう たのふだ人申されます 其後ハお久敷う御
 さらします 弥御息災ニ御座りまするか 付ましてハ爰元でハ
 哥連歌かはやります 私もまじわり「とう」御座れ共御存のご
 とく勝て不調法に御座りまする こなたハ左様の事をゑて御座
 りまする程ニ御太義ながら御下り被成て御指南をも被成て被下
 ませうならば忝なからふと申されます スツハ「尤身共もいき
 とうハあれ共かなわぬ隙入事が有程に成まひ シテ「少々のお
 隙入おばおかき被成て御下り被成ませふならば私迄も忝なふ御
 座りませう スツハ「夫程に云程にいかぬもいな物じや 隙をか
 いていこうまでい シテ「夫弥忝なふ御座ります さらばこう
 御座りませ スツハ「先汝いけいや シテ「私ハおあとから案内
 申ませう おさきへ御座りませ スツハ「心得た さあ／＼こひ
 〳〵 シテ「畏て御座る 申お宿を存ませいでよばわりました
 によい所へお出被成て此様な満足なきハ御座らぬ スツハ「いや
 身共もよい所へ出合せて此様な嬉しい事ハないよ シテ「左様
 で御座ります スツハ「してとをいか シテ「早是で御座る
 夫にお待被成ませい スツハ「心得た 「ト云テ一ノ松ニ立テイ
 ル」 シテ「たなふだ人御座りまするか 太郎官者か帰りました
 アト「ゑひ太郎官者が声じや もとツたか シテ「御座ります
 るか アト「もどつたか〳〵 シテ「唯今帰りました アト
 「しておぢごをば喚ましてきたか シテ「中々 お供致いて参て
 御座る アト「でかいな〳〵 やい伯父や人おば此方へとうそ
 うず 供の者をば汝見つくろうてよい所ゑやつておけ シテ
 「いやたゞ御一人御座ります アト「只一人おじやつた シテ

「中々 アト「某の伯父ハ仮初の物語にも一人や式人であるく人
 でハないよ シテ「でもたしかに伯父子様で御座ります アト
 「してどこに置ました シテ「御門外に御座ります アト「余り不
 思議な事じや 少と物がけから見う シテ「おらうじ被成ませ
 ひ「ト云テ扇ヲ開キ橋かゝりの方ヲ主ニ見せる」 なんと伯父
 子様で御座りませふが アト「やいおのれハあれを心真（成程）よふで
 きたか シテ「中々 アト「あれを知らぬか シテ「いや アト
 「あれハ都に隠もない見ごひのさつくわ「ト」云てだいのすつ
 はじやハ シテ「水破ならばからめて参ませう「扱々にくい事
 て御座る すつはならハからめて参らうト云テうてまくりをし
 て行 主とめる」 アト「やい／＼其そゝをからおこつた事じ
 や あの様な物をあらだつれば帰つてあたをなす よび入てふ
 るもふて返せ シテ「水破ならば御無用で御座ります アト「い
 らぬ事をいわず共某次第にせひ シテ「あ、（ト云ト主ハ大臣
 柱の方ニ下ニイル シテハはしかゝりへ行テ」 やいそこなや
 つ スツハ「何事じや シテ「おのれハ爰へよふこうと思ふたな
 あ スツハ「なぜに シテ「たのふだ人の物かけからお見やつて
 あれハ都に隠もないみごいの颯花と云てだいの水破じやと被仰
 る、がここへこふと思ふたなあ スツハ「某も田舎においを持た
 に依て夫が方から呼にこしたかと思ふて是迄きた 夫ならば帰
 らふ シテ「なふ／＼先おまちやれ 水破ならばからめて参ふ
 と云たればあの様な者をあらだつれば帰つてあたをなす ふる
 まふて帰せと仰るゝ、こふおとりやれ スツハ「でも身どもハ
 帰らう「ト云トキニシテ取ツきてトメル」 シテ「いや／＼わ

こりよが帰^らりますれば身共がめいわくする 先こふとふらしませ
 スッハ「夫ならば通らふか シテ」「よふ御座らふ スッハ」「ぶ案内二御座る アト」「ふち案内に御座る スッハ」「某も田舎に甥を一人持て御座ルが夫が方から喚に越たかと存て参て此様なめいわくな義ハ御座らぬ アト」「少もくるしう御座らぬ 其様な事ハあらいで叶ハぬ事で御座る 某の是におつてはなしませうがけつくむつかしう御ざらふ 身共ハ勝てへ参て料理を申付う是で太郎官者とゆるりとはなさせられい スッハ」「何が扱おかまへ被成ますな アト」「太郎官者 夫へよつて咄しませい シテ
 「はあ畏て御座る 「主太鼓座へ行 下ニイル 太郎官者と颯花ト咄ス」 シテ「先是へおりやれ スッハ」「心得た 「ト云テ主の座へ行 シテ目付柱の方ニ」 シテ「なふ たのふだ人のいらるればきうくつでわるひ 先ろくにいさしませ スッハ」「心得た
 「ト云テ二人共二ろくにいて」 是ハたなふた人の屋敷か シテ「中々 スッハ」「物ずきな立様でハ有ぞのふ 「い」や此物ずきでハ色々の手をすかるゝてあらう シテ「さまゝの事をすかれまするハ スッハ」「して先何をすかるゝ シテ「小鳥ずきで御座る 「此はなしの内二主」の松のきわへ立テ」何事を云そ少聞ませう と云」 スッハ「小鳥と有物ハ面白い物じやが小鳥のうちでハ何がすきでおりやる シテ「あれハなんとやら云鳥で御座るが よふねを出すよ スッハ」「なんであらふぞ シテ「いやてばかり是程で御座る 「ト云テ右の手の大ゆひとこゆひとわをして見する」 スッハ「夫でもしれぬがちいさい鳥ならばなんじやなあ 名ハ何「ン」と云たぞ シテ「名ハ慥ぐいとやら

云まするよ スッハ「ぐいすと云鳥ハ有まい 鶯か シテ「おふ其鶯の事じや スッハ」「いや鶯ハようねをたす鳥じや アト」「是ハいかな事 あひつハ鶯の名しらぬは やい／＼こひ シテ「たのふだ人がよばれまする いて参らふ スッハ」「いておりやれ シテ「やあ アト」「おのれハあの鶯の名をしらいでぐひすと云事カ有物カ 其上何をすかるゝといわりやうならば鷹かなどをすかるゝとハいわいて小鳥数寄で御ざる 鈍なやつじや今度とうならば鷹がすきじやとぬかそう シテ「はあ よばるゝに依ていつたれば今「ノ」鶯の名をぐひすと云たと「云」ておもふさましかれました スッハ」「はてくるしうない事じやに シテ「さればいの スッハ」「して又何かすきぞ シテ「今度ハ鷹が数寄で御座る スッハ」「いや鷹なと、云物ハうゑツ方のすかせられいでかなわぬ物じや さだめていちもつであらう シテ「おふいちもつが御座るとも いつも肴町へ出てびぶつかんぶつによらずちよつ／＼とつて参るハ スッハ」「あの鷹がやシテ「中々 スッハ」「是ハ重宝な事じや アト」「是ハいかな事 あいつハ何事を云 やい／＼太郎冠者 「ト云トシテ主の方ミル」 やいこひ 「シテかぶりをふる」 やい シテ「又よばれまする 定てしからふと云事で御座らう スッハ」「そふでハ有まひ先ゆかしませ シテ「はあ 「ト云テ橋かゝりの方へ行」 アト「やいそこなやつ おのれハあの様な事を云物か どこにか鷹がびぶつかんぶつをとつてくる物か シテ「でもお台所の高ハとつて参ります物を アト「まだぬかしをる あれハしも男の名でこそあれ 扱も／＼鈍なやつかな おのれが様なやつをだ

いておけば外分^{（四）}のつくろいハせひでつくろしなふた 某が口
まねをせう シテ「あのこなたのお口まねをか アト「中々 シテ
「やすい事故ませう」（ト云ト主ふたいへ出ルヲ客見ると立テ目
付柱の方へ行下ニイル 主出テ大臣柱の方下ニイル 太郎官
者ハ大小の前ニイル） アト「おまちどうに御座りませう スツハ
「いやくるしう御座りませぬ シテ「おまちどうに御ざりませふ
アト「やい太郎官者お膳をだせ シテ「やい太郎官者お膳をた
せ アト「おのれがことじやハ シテ「おのれが事じやハ（主大
臣柱の方へ立テ） アト「是ハいかな事 あいつハきが違ふたそ
ふな やいこひ シテ「やあ アト「おのれハきがちがふたか
せうじんのお膳の座敷へだせと云事じや（ト云テシテかたを
たゝく） シテ「畏て御座る（ト云テシテ柱のきわにて） 是ハ
いかな事 あいつハきがちがふたそうな やいこひ（ト云テ
扇ヲぬき客をよふ） スツハ「何事じやシテ「おのれハきがちがふ
たか せうじんのお膳の座敷へだせと云事じや（ト云テ客の
かたを扇ニてくわす） スツハ「何事をぬかす（ト云テ本の座へ
行） アト「扱々ぶしつけない者を遣ひまして面目も御座らぬ スツハ
「少もくるしう御座らぬ シテ「扱々ぶしつけない者を遣ひまして
面目も御座らぬ アト「おのれハまだぬかすか たちおれ（ト
云テ耳と左りの手ヲ取テ引廻し） 其真似の事でハない 正身
のお膳の座敷へ持て出よと云事しや（ト云テつきこかし） シテ
「畏て御座る（シテ）「おのれハまだぬかすか 立おれ 其ま
ねの事でハない 正身のお膳の座敷へ持て出よと云事じや
（主のまねをして客を一返引廻ス） アト「はて扱御耳がいとふ

御座らふ まつひら御免なれ スツハ「少もくるしう御座らぬ
シテ「はて扱御耳がいとふ御ざらふ まつひら御免なれ アト
「しよせんこなたの夫に御座ればあいつがなんのかのと申てわ
るう御座る 唯是へ御座れ（ト云テ主客の左りの手ヲ引立る）
スツハ「いや是がよふ御座る シテ「しよせんこなたの夫に御
座ればあいつがなんのかのと申てわるふ御座る 唯是へ御座れ
（ト云テシテ客の右の手ヲ引立る） アト「いや是へ御座れ
シテ「おやこちへ御座れ（ト云テ左右へ客を引はる） スツハ「是
ハめいわくに御座る アト「おのれハにくいやつ の 汝が様な
者をばまつこふしたかよい（ト云テシテノ足を取テこかし
てはいる） スツハ「はてさて気毒な所へきた（ト云テ主のあとへ
ついてかくやへいらふとするをとらへて） シテ「おのれはどれ
へ行ぞ スツハ「宿へ帰ル シテ「宿へ帰ル おのれが様なやつ
ハまつこふしたがよい（ト云テ足ヲ取テこかし） 見へたか
スツハ「是ハあらけない地走^{（五）}に逢た事かな（又追込二もする
其時ハシテ）見へたか と云テにくる 客おきて（一）あのあふ
ちやく者 やるまひそ（一）

〔遠雜類〕

(目次)

一	緝粥 ^(ひめ粥)	拾六	受法
二	鈍根草	拾七	忠喜
三	饅頭	拾八	登知波呉
四	樋酒	拾九	昆布布施
五	保昌	廿	六人僧
六	猪狸	廿一	双六僧
七	鹿狩	廿二	六地藏
八	恋聲	廿三	拄杖
九	口真似聲	廿四	腥物
拾	鶯聲	廿五	牛座頭
拾一	折紙聲	廿六	濟頼
拾二	無縁聲	廿七	馬口勞
拾三	岩橋聲	廿八	餓鬼十五
拾四	右流左死	廿九	東大名
拾五	手負山賊	三十	泥閑

一 緝粥^(ひめ粥)

シテ「是ハ此他りで人の御存知の者で御座ル 先召遣ふ者を呼出しよろこばせふと存ル 太郎官者居るかやい アト」「はあシテ」「いたか アト」「お前に シテ」「早かつた 汝を喚出すハ別の事でなひ 此中御前に詰たれば新地をくわつと拝領したハ何と目出度事でハなひか アト」「是ハお目出度事で御座りますシテ」「夫に就て明日出仕にあがらうと思ふが紺屋へゐてやつた肩衣を取てきたか アト」「されば其事で御座ル 取に参て御ざるが何やらがたらぬと申てはつておこしませなんぞで御座ルシテ」「紺屋にたらぬならばしんしきぬばりのやうな物でハなかつたか アト」「いや左様の物でハ御座りませなんだ シテ」「すさりおらふ おのれがやうな鈍なやつハ何ぞ物によそへて覺て来たがよひ アト」「いや物によそへて参ました シテ」「して何によそへてきたぞ アト」「こなたのつれづれの折節いつも読せられまする書物の内に有物で御座る シテ」「何と云ぞ 某がすいてよむ源氏平家の物語の内に有ル アト」「中々 シテ」「ソレ」違棚^{チガイダナ}に有ル書物をとてこひ アト」「畏て御座る シテ」「やい／＼半卷斗ハ空で覺て居ル 其内にあらばこたへ アト」「畏て御座ル シテ」「是へよつてきけ アト」「心得て御座る シテ」「赤間関早友が沖にて御身をなげさせ給ふ西海四海の合戦の内にあらば有と頓てこたへ アト」「畏て御座る (シテ)」「其比ハ寿永二年の事成に。平家ハ時節の思ひをなし。津の国生田森に陳^(ひら)を取ル。

其城郭ハ前ハ海。うしろハけわしきひよりこゑ。左リハ須磨めてハあかしよな。大手にハ生田の森を拵へ。其内三里が間ミち／＼たりしよな。陸にハ赤旗いくらも／＼たてならべ。天地ひるかへす有様ハ。さながら錦をはつたるがごとく。此様な物でハなかつたか。アト「はつてだに御座ルならばおこしませうが其様な物でハ御座りませなんだ。シテ「爰に又梶原が二度掛といつは。梶原平藏景時源太景季。御陳平山の武者所。すゑしげが一の木戸を切テ落シ。ぶんどり高名数をつくす所に。かくて梶原本陣に歸り源太ハと尋しかば源太ハかたきの方よりもおしつけを見せうする事をふかくと思ひふかいをししのぎをけづり鐐をわりせめた、こふを見て梶原取つて返し前車（センクルマ）のくつかへすを見てハごしやのいましめとする。一じやうにひけや一じやうにか、れやと下知をなす所に源太ハ甲をぬぎたかひほに掛ケ一首の哥ハかくばかり。ものゝふのとつたへにしあつさ弓ひいてや人のかゑす物かなと詠しせば梶原ハ西東散々に打て迫りしがよきかたきをば拾七八騎切ツ落し梶原が二度の掛とハよばわつてしん／＼と引て入たる所にてハなきか。アト「いや左様の物でも御座りませぬ。シテ「爰に又御一門にとりてハ丹後ノ少将忠澄（タケノセウシャウチユウ）か。無官の太夫敦盛（タケノタフツナモリ）か。知盛（チモリ）か。さかもぎきつてまわりしかば河原太郎（カワハラタロウ）か。川原次郎（カワハラジロウ）か。よせてにも亀井片岡伊勢（イセ）駿河武藏坊弁慶（ベンケイ）にてなきか。アト「いや左様の物でも御座りませぬ。シテ「爰に又主ハ誰ともしらねども白糸おとしの腹巻にしらゑの長刀かひこうで鹿毛成馬に打乗ツテナギさをそふて落行を又味方の方（カチ）よりも岡部の六弥太忠澄と名乗りて

六七騎にて追かくる。よきかたきと見馬の上にてむずと組両馬が間へどふどおちうへよしたよししたりしが六弥太頓てとつておさへ乱かしらをつかミあげ首かききりて見てあればしころについたる短尺に花と云字を題（タイ）にすへゆきくれて此下影を宿とせば花やこよいのあるしならましと詠じ給ふハ平の薩摩守忠則にてハなきか。アト「はあ夫で御座りました。シテ「やいそこなやつ。おのれことばのすへできた。紺屋につこうハしひかいひめのりにて有ル。アト「いよ／＼それで御座りました。シテ「夫で御座りましたとハ身が内にあらふずる物がひめのりたゞのりの事をしらぬか。主によいほねをおらせた。にくひやつなれ共先此度ハゆるす。かさねてハ急度云つくる。すさりおらう。アト「はあ。シテ「まだそこをるか。アト「はあ。

シテ 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

○アト太郎官者 腰帶 狂言上下 扇 腰懸

〔シテ〕「爰に又主ハ誰ともしらねども紺地の錦の直垂に黒糸おどしの鎧きて黒鹿毛成馬ニ金復輪の鞍置せ トモ云

二 鈍根草

シテ「是ハ此他りの者で御座ル。いつも鞍馬へ太郎官者をだひ参りに遣します。今日ハ某が社参致さふと存ル。太郎官者居ルか。アト「はあ。シテ「居たか。アト「お前に。シテ「早かつた。汝を呼出すハ別の事でなひ。いつもそちを鞍馬へたび参りにヤルが今日ハ身共が参らふと思ふ程に汝供をせい。アト「畏て御

座る 支度を致て御座ル シテ「こひ／＼」 アト「心得ました
シテ「汝ハ道すがら名所古跡があらば語れ」 アト「畏て御座る
シテ「して此川ハ何という川ぞ」 アト「たかの川と申まする」 シテ
「たかの川と云ハ是か」 アト「中々」 シテ「聞及ふだよりハいかひ
河ぢや」 アト「則是がみぞろ池で御座ル」 シテ「はて大きな池ぢ
やな」 アト「左様で御座ル」 シテ「こひ／＼」 アト「はあ程のふお
前で御座る」 シテ「てうずをくれい」 アト「畏て御座る」 シテ「や
い汝も夫ておがめ」 アト「はあ」 シテ「やひ某ハ今宵ハおつやを
申程に汝夫におきて居て鳥がうとふならバおこせ」 アト「畏て
御さる 頼ふだ人」 シテ「なんぢや」 アト「宿坊から重の内が参
ました」 シテ「やひ某が忍ふで参たおは何として知られたぞ
してお使ハ」 アト「いやおひて帰られまして御座ル」 シテ「どり
や／＼さむい程ニ一ツ呑ふぞ」 アト「あがりませひ」 シテ「肴ハ
なんぢや」 アト「ミやうがとたでとが御座りまする」 シテ「どり
や その蓼をおこせひ」 アト「はあ」 シテ「汝も夫でのめ」 アト
「畏て御座る」 シテ「やい／＼そちハ肴ハ何をくふたぞ」 アト
「蓼荷をたべました」 シテ「いと鈍なやつが」 アト「ミやうがをくひ
弥鈍になつてつかハるゝ事でハ有まひ」 アト「はあ蓼荷をたべ
ますれば鈍に成まするが存ませんで御さる」 シテ「しらすハ
語て聞せう」 是へ寄て聞おらふ 扱も釈尊の御弟子に周梨
ハンドク盤独と云人有り 此ぐどん第一の人にて我が名だにおほゑひで
杖のさきに書てあるきそなたの名ハと尋ぬれば是と云て指出す
程成愚鈍な人にて有つるが然れ共人間の習にてつゐにござうを
被成た 土中につきこめてあれバつかの上よりもみやうが一本

はへ出る 則是をぐどん第一の塚よりでたれば鈍根草とつけら
れて有ル 又釈尊の御弟子に阿難そんじやと申するハ知恵第一
の仏にて釈迦如来靈鷲山にて四拾余年の御説法を一字一点もの
こさず請取被成た知恵第一の仏にて有た 是も終にごだう被成
た 土中に籠てあれば其塚より蓼一本はへ出ル 則是をりこん
草と付られて有 神の御前共いわせず腹を立さする 下向
「ヲ」する うせをろ アト「はあ」 シテ「くるか／＼」 アト「参
まする」 シテ「やい太郎官者」 アト「や」 シテ「某ハおまへにおい
てきた物が有」 アト「何と被成ました」 シテ「物を忘た」 アト「は
て蓼を参ました程二なにもわすれハ被成ますまひ」 シテ「たで
をくうたれ共忘たハ」 アト「身共ハみやうがをたべましたれ共
物をひらいました」 シテ「なんぢやみせひ」 アト「是で御座りま
する」 シテ「夫ハ身共のぢや おこしおろ」 アト「ほしう御座ル
か」 シテ「ほしいかとハ」 アト「こりや成ますまひ」 シテ「ならぬ
とハ にくいやの」 アト「おのれが様なやつハまつこふしたがよいぞ
／＼」 アト「まけくじな やりますまいぞ／＼」

シテ出立 段のしめ 長上下 小サ刀 扇
○アト太郎官者 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

三 饅頭

シテ「是ハ此他りに住居致饅頭売で御座ル いつもの通り今日
も町表へ罷出あきなひを致さふと存ル 先急で参らふずる 何
と今日もあきないがあればよふ御座ルが何角と云内に早是ぢや

さらばいつもの通りみせをかざらふと存ル アト「是ハ遙遠
 国方の者で御座ル 某訴訟の事有り在京致す所に訴訟思ひの
 まゝに叶ふて近日国元へ罷下る 夫に就て今日ハ町表へ罷出土
 産物を調て参らふと存ル 定て国許でハ今かゝと待て居る
 て御座らふ」とこふ云内に是ハ早町表じや 是から見物致さふ
 「ト云テ常ノ廻りに茶の湯道具を見ル 夫より子共のもてあ
 そびなと云テ」何を求めうと身がまゝぢや 是ハなんぞ シテ
 「曼頭で御座る アト「饅頭ぢや シテ「中々上ツ方のお菓子に成
 曼頭で御座る アト「何と云ぞ 上ツ方の菓子になる饅頭じや
シテ「中々 アト「してうまい物か シテ「かたのごとくうまい
 物で御座る アト「うまい物ぢや シテ「左様で御座る めしま
 せひ アト「先くうてみせたらハ買もせうまでい シテ「私がた
 べましてハうまいやらあしいやらしれませぬ こなたあがつて
 御らふじられてよくハ取て被下ませひ アト「いやゝ先汝が
 くふてみせたらば身もとらう シテ「夫ならばふるまわせられ
 ませうか アト「中々ふるまふ くてみせひ そちがくうたら
 ば身もくふ事もあらふ シテ「扱ハふるまわせられうの アト
 「中々急でくてみせい シテ「是ハ忝ふ御座る くいませう
 「ト云テくうまねする」 アト「何とうまいか シテ「あゝうまい
 事で御座る アト「うまくハくゑ シテ「畏て御座る 同「是ハ
 うまい事かな アト「くへゝ シテ「たべますゝ 皆くい
 ました アト「夫程うまい物ならば身も一ツくお物を シテ
 「拵て上ませう アト「いやゝ拵にハ及バぬ なけれハよい
 「ト云テ行ふとする」 シテ「申々 先ツ待被成ませひ アト「何

事ぢや シテ「只今の替りをおいて御座りませひ アト「かわり
 とハ シテ「いや今の代物を被下ませひ アト「代物とハ身がく
 ふたらバ替りをおこふがそちがくふたに仍テおれハしらぬ
シテ「夫ならばたべまい物を こなたのふるまわふ程にくゑ
 〳〵と被仰たに依て皆たべまして御座る どふ御座らふとも
 かわりをとらいで置ませうか 急でにおいて御座れ アト「やあ
 らおのれはにくいやつ の 田舎者じやと思ふてねだるか その
 ような事をぬかして目に物を見せうぞ シテ「夫ハ誰か アト
 「身共か シテ笑テ」 シテ「人の売物を皆くわせて其上に目に
 物を見せうとハ 其様な事をいわずとも早う置いて御座れ アト
 「夫ハ誠か シテ「誠で御座る アト「心真か シテ「心実で御座
シテ「あゝ取ますまい〳〵 アト「是々やらうハ〳〵 シテ
 「せめて是なりと持てのこう たまされた アト「どれへうせお
 る やるまいぞ〳〵

シテ 嶋の物 狂言上下 こしおひ 葛桶持出ル 其内ニ
 白羽二重の切二木綿わたを入まんちうをこしらへ六七
 つ程作ル 店ニ付テ葛桶のふたの上ニかざりて置
アト のしめ 長上下 小サ刀 扇 太刀を持出ル

四 桶の酒

主「是ハ此他りの者で御座る 某今日去ル方へ用事有て参る
 夫に付身共の留守になれば兩人の者共が酒をたべ乱舞など致と

申 是でハ何共留守が心元なふ御座る 先喚出して申付ふや
いゝ 太郎官者有か シテ太郎「はあ 主「いたか 太郎「御前
おります 主「はやかつた 汝を喚出スハ別の事でなひ 今
日ハ去ル方へ用事有て行 よふ留守をせひ 太郎「畏て御座る
御留守ハ御きづかい被成まするな 主「夫二付今日ハ身共の
存ル子細が有程に汝ハ此の次の間に一人留守をせい 太郎「畏
テ御座る 主「又次郎官者にも云付ル事が有 喚出せ 太郎「心
得ました のふゝ次郎官者めすハ 二部「何ぢやめすか 太郎
「中々 二部「心得た 御前におります 主「そちを喚出ス事
別の事でなひ 今日去ル方へ行程によふるすをせひ 二部「畏
て御座る 兩人共によふ留守を致ませう 主「いやゝけふハ
存ル子細が有ル程ニ汝ハ奥の間に一人いて留守をせい 二部
「是ハ何共心得ませぬ 兩人一所におりまして留守を致ませう
主「いやゝ夫ハならぬ 太郎官者ハ次の間汝ハ奥の間に居
てよふ留守をせひ 二部「畏て御座る 主「さあゝ身共がいる
内に両方へはいれ 二人「心得ました 主「下にとうどいよ 太郎
「畏て御座る 主「よふ留守をせい 頓而戻りぞ 太郎「頓テお
帰リ被成ませひ 主「やあ一段としすました 急で参らふ 太郎
「扱もゝ合点の参らぬ事じや 終に此様な事ハ今迄ない事ぢ
や 誠に思ひ付た 留守なれば兩人酒を吞乱りに致氣遣さに此
様に云付られたとみへた 是悲もせい事じや 二部「扱もゝ
いこうさびし事かな いつよそへゆかるゝとても兩人一所に
留守をするにけふハ何と思ふて此様に別におかるゝしらぬ 太
郎官者ハ何として居るぞしらぬ 太郎「次郎官者ハ何をして居

るぞしらぬ 次郎冠者ゝそこに居るか 二部「やあ太郎官者
か 何とさびしひ留守でハなひか 太郎「さればゝさびしひ
事じや 身共ハけふもよそへいかるゝならバ汝と酒を吞ふと思
ふて調ておいハ 二部「夫ハ浦出し事ぢや 定て最早のふ
だであらう 太郎「いやゝ独ハ吞れぬ 身共ものミそちにも
のましたいなあ 二部「夫ハ過分な とうぞ吞やうに思案のし
てみさしませ 太郎「さらバ何とぞ此へに穴を明さし出すや
うにしたいが やあ爰に幸いな事が有ぞ 鼠の明た穴が有 是
から仕用が有ル さあゝ吞々 此竹の先を以て是から樋を
かけて酒をなかつぞ 二部「是ハできた 又思案も有物じや
先わごりよのふでさゝしませ 太郎「夫ならバ身共壺ツのふで
さすぞ さあゝ是からさすぞ 酒をながす 請ていさしま
せ 二部「心得た 請て居るぞ はあ酒がくるハゝ おふて
うどある をかしませ 吞ぞゝ扱もゝこふしてのめバ
取わけいつよりもうまひハ さらば此の盃をそこへさすぞ
「さらバ致さうか 請ているぞ 是々最早有ハゝ 太郎「何と
吞かゝ うまい事か 二部「何共いわるゝ事でハなひ 覚ハ
ないよいきみじや ひといきにハいかぬ 下におこう いざち
とうたをふか 太郎「一段とよからふ 二人して小謡うとふ
二部「「さらバあけふか さあのおた 是をそこへさすぞゝ
太郎「「いかにもいたゝいた 一ツたべう さあゝもそつと
謡しませ 「又二人してうとふ」 あら面白ゝ さあ又そこ
へさす 二部「「いやゝ も一ツかさねてのましませ 太郎「「いや

大盃ぢや 夫でハすきる 二郎「ぜひ共のましませ 太郎「夫ならばも一ツ呑ふでやらう 請もツた もそつと謡ふ 又二人して小謡うとふ」 二郎「扱も」面白い事じやのふ」 同

「さあ呑ふた さすぞ」 二郎「いただいた さあさあついでたもれ 太郎「さらばつぐぞ」 二郎「おふ有ハ こぼれる」 つよいしやくじや 最早あがりかぬるハ 太郎「どふぞして早う上さしませ 大方酒が皆になつたぞ 二郎「夫ならバあけるぞ さあ呑ふた はあ扱も」よいきミぢや よふたハ」 そこもとへもどすぞ もはやとらしませ 太郎「最早呑ぬか」 二郎「いかな事 ならぬぞ」 納にも一ツ呑しませ 太郎「夫ならバも一ツ呑ふで納に致さう 又一ツ有ハ是でハ大分じや すぎるで有う はあうまし」 いこふようたハ 次郎冠者とるぞ」 二郎「はやふとりやれ」 太郎

「身共ハいこうよふた さらばちと横にならふ 二郎「何と云ねるか」 たのふだ人の留守を云付られた ねては成まいぞ やい太郎官者 はやねたか おとがせぬ よいとハおしやるまい はあ太郎官者がねたれハどうやら身共もねむりがくる はかんにんがならぬ ねよふ 主「太郎官者次郎冠者を留守にをいて御座ル 此度ハ酒をのまぬやうに別々に致して置たいつもとハちがひ留守をしているで御座らう 先帰らうと存ル 是ハいかな事 かべに穴を明ケテあれからはへ これハ何じや 扱も」何共ならぬやつ の 樋をしかけて酒を呑おつたと見へた 太郎官者 次郎官者 どちらうせた 是ハ扱ふせつてをるか 次郎官者めも性駄もなふよふてふせりをつた お

のれら何とせふ 大ぢやく者 やいおきあがらぬか」 ト云テ次郎官者をこす」 次郎「いや」もはやたべまい 主「たべまいとハ 身共じやが 次郎「たのふだ人か ゆるさせられい 主「やるまいぞ」 やあおのれ まだふせつてをるかにくいやつのおきおらぬか」 シテ「あ、よふたハ」もそつとうたわふ さんざあ 主「やあおのれ まださ、んざあ にくいやつ の 何とせうぞ シテ「たのふだ御方 御ゆるされませい あ、かなしや 今からのミますまい」 主「何の呑ますまい やるまいぞ」 シテ「ゆるさせられい」

シテ太郎官者 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

次郎冠者出立 シテ同前

主 段のしめ 長上下 小サ刀 扇

作物 一丈斗成大竹のとい竹一本

五 ほうぜう

アト「罷出為ルハ此他りの者で御座ル 某別て心安う致人が御座ルが殊外咄上手にていつ参ても咄にまけて口おしう御座ルに仍テ此中咄を一ツ式ツたくみ出して御座る あれへ参はなそうと存る 今度ハいか成共まけハ致まいと存ル ト云テふたいの方より案内ヲ云う」 シテ「表に案内と有ル 物もふとハたそアト「身共でおりやる シテ「はて扱よふこそおりやつたれ此中ハ何として見ゑなんだぞ アト「されば」彼是と隙をゑひで見ふ事もありないぢや シテ「さらバまづ内へおはいり

やれ アト「心得た シテ「ゆるりと咄そう 先下に居さしませ

アト「心得た シテ「此中ハ久敷あはなんだ内にさぞ珍敷ひ咄
がおじやらう アト「こそおじやるよ シテ「追付聞たひ アト

「さらば咄て聞せう 富士「ノ」山を火打袋に入たと云がいづ
れはいるまひ物を入たてハなひか シテ「誠にはいりにくい物
たがなんとして入たぞ アト「駿河の絵図をきんちやくに入て
おじやる シテ「尤ぢや 此中あわなんだ内に珍敷ひ咄ができ
ておりやるよ アト「さらばわごりよ一ツはなさしめ シテ「こ
そはさそう マメ きかしませ アト「さらば聞ませう シテ「近江
の北海を茶筌にてたてにごひたと云が夥敷ひ事ハなひか
アト「夫ハうそでおりやらふぞ シテ「いやたてにごひたるせう
こにハあわづが出来たわさて アト「いつきいてもわごりよハ
いかい事を咄す 又身共もはなそう シテ「よかるふ アト「伯
耆の大仙寺へ参たれば大きな太鼓がおりやつたハ シテ「何程
な太鼓でおりやつたぞ アト「まわり三里四方有ル太鼓で有た
シテ「扱も 夥敷ひ太鼓かな おれも又筑紫の五百羅かん
へ参ル時播磨のいなミのを通りたれば大きな牛がふせておつ
た アト「何程の牛であつたぞ シテ「ねながら淡路嶋の草をく
うを見たが大きな事ではなひか アト「いわふ事と 其様な事
ハないわしますぞ アト「夫程な牛が有物か シテ「あれ
はこそ三里四方の太鼓の革がなれ 少々シテの牛の革でハ三里四方
の太鼓ハはられまひぞ アト「尤あやまつた 何としてもそな
たに咄かつた事ハならぬ シテ「さらばけふより咄の弟子にならう程
にをしへておくりやれ シテ「安ひ事 しうしんならばおしよ

う アト「近比満足した いつきてもそなたの咄のつきぬ事が
ないか マメ さま咄のたねがおりやるか シテ「中々咄の種こそあれ

アト「さらば種を貰たひ シテ「安事おまらせう あそこにな
づめておいた ほつてとらしませ 「はるまねヲしてアト」な
い と云「シテ「それならハあそこをほつてみさしませ アト
「心得た ト云テはるまね シテ「ない と云「シテ「爰をほつ
てみさしませ ト云ヲ三所程ほらす アト「ない ト云」
シテ「そこにもなくハ是非に及ばぬ ひそくのたねをとてもの
事におまらせう アト「さあ 早うたもれ シテ「はなしの種
と云て別にはなひぞ ほうぜうと云てなにもない事を申す
アト「あら面目もなや シテ「よふおりやつた
シテアト共二狂言上下 こしおひ 扇さす 但シ長上下二
ても

六 猪狸

アト「是ハ播磨の国かこの郡おぎ、の里の代官で御さる 此間
山畑を何やら殊外あらします 鳥類畜類のわざの様にも見へ
ませぬ いか様不審ニ存ルに仍テ今夜ハ自身参如何様者のわざ
ぞ見届けふと存ル 急で参らふする 是ハ散々の妹ぢや 如何
様不審な事で御さる 畜生ならば中々した、かな物のわざと見
へた 先是ニ待て様子をみまらせう 「ト云テワキ座ニこしか
け」 「狸出テつとくる時弓にておどす」 アト「かつきめ シテ
「は、 〳〵 アト「なんのは、 〳〵 おのれのかす事でハなひぞ

シテ「猪狸で御座ル」アト「なんじや 畜類の物を云ハ

能々こうをへた物と見へた 其上猪狸とハなんとした事じやぞ

子細が有カシテ「中々 アト「左有らば急で語れシテ「昔此

播磨の国かこの郡に頭拾二角拾二有猪の住しが一声鳴ハ拾

二声一振ふれバ拾式ふり 其おとが峯にひゞき渡り鳥類畜

類迄もおおおする、に仍テ獸の司となり我等も其眷属として

猪のいをかり今此山の主成ル故猪狸と申ス アト「子細を聞バ

尤じや 夫ならバ迎の事に狸の腹鼓を打と云 打テみせひ

シテ「は、く アト「早ふうてシテ「は、く 下 うちてやさ

しきものおふし いたやのあられ まど打雨の音 しやうこ

かつこ めうはち 鼓 今の狸の腹鼓「口伝」アトイロ「いか

にや狸 能聞よ ころさん事ハいとやすけれど今の腹鼓面白け

れば先々命を助ルなりシテ「余りにうてバ夜も更行に名残の

鼓うたんとてミやうをすて、ぞ打たりけり「口伝」

シテ出立 ぢばん かるさん たぬきの面 昔ハけんとかく

に黒頭のよし

アト「うつほさる」のシテの通り也 うつほハなし 但シ

髭かくる

△シテ出様 まく少上出テ見渡して右の通はい出 又シテ柱

のきわにて世見み 扱アトの前へ何心なく行時おどされ飛歸り

ておわれてシテ「は、く ト云

△打様ひやうし 口伝「は、く 腹斗打

左ノ手ノこう 左ノばち 右ひぢ ばち ばち

は は「トノシヤ切り 口伝多シ」

七 鹿狩

アト「是ハ此他りの僧で御座ル 山を越へ齋に参て唯今歸りま

するシテ「〔橋懸リテ名乗〕罷出為ル者ハさこの三郎と申かり

うで御座ル 今日鹿狩いでうと存ル やあれハ殺生の門出に

見ともなひやつが行 気毒な事じや 致シ様が有 のふく

御坊 どれからどれへ御座る アト「山越て参まするシテ「身

も参る お供申さう アト「いや見ますれば仁鉢と見へました

私ハおつれにハ似合ませぬ こふ参まするシテ「のふ御坊

出家侍と云ていかにもにやうた物でおりヤル程に同道申さふ

アト「いや身共ハ急の者で御座ル程に先さきへ参りまする

シテ「やい坊主 しかと道つれになるまひと云事か して是で

も成まいカ アト「あ、申成ませう〔悪坊〕の如弓にておと

すシテ「少とそふもおりやるまひ 是ハざれ事じや さあ

く先へおりやれ アト「先おさきへ御座りませひシテ「いや

出家を供につる、と云事ハなひ ひらに先へおりやれアト

「其義ならば参ませうシテ「こなたハ殊外ひふがよう見ゆる

定て魚鳥をもした、かに参ルと見へたアト「いや何が出家が

なまぐさいくふ物で御座ルぞシテ「でも其鉢ハ精進物斗くて

いるし、あひではおりやらぬアト「こなたにハむりな事を被

仰まする もつたひない事 たばませぬ〔トイツメテ〕シテ

是でもくわぬか と云^二」^{アト}「あゝ、たべまする」^{シテ}笑
 テ^{シテ}「そうであらふ 夫ならば定てお内義もあらう ^{アト}
 「扱々こなたハ最前から色々の無理を被仰まする なんと女房
 を持てよい物で御座るか 其様な^ハはかひの僧と云て出家
 の内でハ御座らぬ ^{シテ}「心実おもちやらぬか 是でもおもち
 やらぬか^ハ」ト云テ又ヲトス」^{アト}「たくさんに持ました」^{シテ}
 「扱々よひ慰じや のふ」^{シテ}「最前から皆ざれ事で御座ル
 誠にこなたハ見あげました殊勝な御出家ぢや 今からハ某を
 バ旦那ニして被下ひ ^{アト}「こなたさへならせりやうならば
 一の旦那で御座りまする ^{シテ}「夫ハ祝致ひた こうけい
 く申からハ此世あの世迄頼まするぞ ^{アト}「中々 ^{シテ}「最早頼
 まするぞ ^{アト}「何事で御座ル ^{シテ}「此弓矢を持て被下ひ ^{アト}
 「安事で御座るが持様を存じませぬ ^{シテ}「夫ならばおしへませ
 う^ハ」^{シテ}「ヨシユル」^{アト}「こうで御座るか ^{シテ}「一段とよふおり
 やる ^{アト}「申扱旦那にならせられてハ過去帳に付まするお名
 ハ何と申まする ^{シテ}「身をおしりやらぬか 此山下で隠もな
 ひさこの三郎とハ身が事でおりやる ^{アト}「やあ」^{シテ}「さこの三
 郎ぢや あゝ、けがらわしひ 扱々しらいで持た事かな ^{シテ}
 「やいそこなやつ なぜに弓矢を捨てたぞ ^{アト}「汝が殺生^ノ」^{シテ}
 道具をたつとひ出家が手にふれうはづがなひ ^{シテ}「して人か
 殺生をきらやるか^ハ」^{アト}「やい坊子 殺生をする事を仏のきらやる
 か トモ云」^{アト}「おんでもない事 殺しやう ちうだう じ
 やいん まふ」^{シテ}「おんじゆかひとて五戒の内で殺生ハ殊ニいま
 しておかれた ^{シテ}「いやおのれハあたまをまるめたれ共物

ハ知らぬ 殺生せよ」一時も殺生せざれば其身地獄へ矢の
 ごとしと云時ハ如何程しても苦しうなひ ^{アト}「夫ハ心の殺生
 ぢや 物の命を取ル事でハなひ ひがくしやろんぎにまけずと
 今こそ口に出ルまゝに云 おのれはてたらば其むくいでしゝに
 うまれいでかなわぬ ^{シテ}「しゝをいてしゝにならば今坊主を
 いて出家にならう ^{アト}「いる事ハ成まい 胸に三尊の弥陀が
 有よ ^{シテ}「左有らバわつてみやう ^{アト}「今ハ云心の仏で躰ハ
 見へまひ。ましてしばし。さくや吉野々山桜。木をわりて見よ
 花の有かハと云哥のごとく。わつたりとも花ハなひぞ ^{シテ}
 「夫こそ目の前ニ有ル ^{アト}「どこに有ぞ^ハ」トイツメテ ^{シテ}
 「是ハ鼻でハなひか ^{アト}「なんでもなひ事 とつと、ゆかしま
 せ ^{シテ}「あら面目もおりなひ

シテさこの三郎出立 大嶋の物 長上下 小サ刀 扇 物

つき成頭巾 髭懸ル 弓矢持

アト僧 但し出家シテニモスル むじのしめ 黒衣 けさ

角頭巾 珠数

八 恋聲

女「わらハ、此他りの者で御座ル 内のと少ヅ、云分たした
 れば暇をくれられて御座ル 此上ハぜひにおよばぬ^ズ おや里へ
 帰ませう 申 内に御座りまするか ^{アト}「いやなんとしてき
 たぞ ^女「めんばくもない事で御座る 内のがひたとさゝをの

ふでゑびぐるひしられまするに仍ていけんのつよう申たれば暇
をくれられて御座る アト「いや／＼くるしうなひ 少も苦勞
にするなハあの様な男にそおふよりもにやわしひ事があらハか
たづけてやらう あれにそうて一代くらうをせうより余所へゐ
てはんじやうしたがよひ 先内へはいつてか、にもおふてなく
さましませ シテ「是ハ此他りの者で御座ル 女共と申分のい
たためたればわ、しひやつで出て御座る 定て親里へならでハ参
るまい 参て様子を見うと存ル 物もふ アト「誰で御座る
シテ「いや私で御座りまする アト「なんとして御座つたぞ シテ
「いや別の事でハ御座らぬ 女共ハ是へハ参ませぬか アト「い
や／＼此間ハ久しう見ゑませぬよ「此内ニ女ワキ座ノ方へ出
テ舅をよび」 女「申 かのはち知らずがきましたか アト
「中々きた 爰へハそちハこぬと云たぞ シテ「申 今の物を云
たハたれで御座る アト「いやあれハおごうが妹で御座る シテ
「いや／＼慥に姿もちらと見て御座ル あわせて被下ひ アト
「あわせてくれひとハそなたハいとまをだしハめされぬか 身
がしらぬふりをしていればよふ其つれな事いわしまするぞ も
はやふつとあわせぬ とつと、帰らしませ 「云合次第色々」
シテ「夫ならばせひに及ませぬ 身共ハすい狂故心がらと思へ
ば思ひ切ても居まするがあのかなぼうしが、ハ見へぬがどこ
へ居ぞと云てなげくを不便とおもわせられぬか 「ト云テ鳴」
女「あの通りなげかる、を見てあわずにハ成「マス」まひ アト
「是ハいかな事 そちもさうかと思へばそのつれな事を云
「舅ト女ト物云内シテそり／＼とよりてしうとのうしろより

女能見て」 シテ「女共よい時分ぢや かなぼうしが尋ル 早う
こい 「舅きらう 又聲の方へ云内女より色々云合次第 云合
なふ舅殿 一度くれた女房をもどすまひと云 つれてゐてみ
せう アト「やる事でハなひぞ シテ「なんのつれていかひでは
アト「こりや なんとするぞ シテ「なんとするとハ
舅ヲこかし「水掛聲」のごとくとむる 聲ハはいる 女立帰り
「女」と、さま頓テ氏神祭にハきませうぞや ト云テはいル
舅立あがり「アト」親を此様にする者を誰がよぼうぞ △此ト
メノるい多し 何も同前

シテ 嶋の物 狂言上下 腰帶 扇

舅 鬘斗目 長上下 小サ刀 扇

女 薄ノ物 さけ帶 びなん

九 口真似聲

「前（二人袴）同意 シテからい御酒テ御座ルの青梅の抔ト云
事ヲ云 親立テ橋掛ヘ行シテヲ呼ンデしかる 「ヤ」某が口
まねせい ト云 其内舅の方より太郎官者を使におこす」

「ヤ」心得ました 「ト云テ舅ノ前へ出ル」 少用が御座ツて表
へまいツて御座る 「シテ其通りヲ云」 シウト「いや太郎冠者
此所の大法で御座ル程に小舞を舞せられいといへ ヤ」「いや
あれハ不調法に御座る 「シテ其通り云」 おのれが事じやハひ
やひ 「シテ其通りヲ云」 是ハいかな事 なんとした物で有う
「ト云テ橋掛リニテシテヲ呼テ」 おのれハ終に舞をもふたを

見ぬに仍て不調法なと云ハおのれが事じやハひやひ シテ「心得ました」（ト云テ舅ヲまねき今の通りヲ云） シウト「何事をおしやるぞ」ヲヤ「扱々どんな者をつれて参て私迄面目も御座らぬ」（シテ其通りヲ云） おのれハまだぬかすか （シテ其通りヲ云） にくいやつの 立おれ もハや某が口まねおばやめぬ シテ「心得ました」（ト云テ舅ヲ今通ニスル） シウト「扱々はハ迷惑な事で御座ル」ヲヤ「是ハお耳がいたミませう 御免被成ひ」（シテ同断 万事皆（口真似）同断 後おい）

シテ出立 段のしめ きなかし

親 但し兄ニもスル 袴斗

舅出立 常ノ通

太郎冠者 常ノ通

拾 鶯聲

「万事（音曲むこ）同前」をしへての方へ行 習事も同前 音曲のまねする所をほうほけきやうとくいすのまねをする」
「大むかし中むかし当世やうを云テ」 （ヲシヘテ） 「わこりよハ前方鶯を数寄てこうたか今にかわしますか」 シテ「中々今においてかいます」 ヲシヘテ「夫ならハさつと済た」（しうとの前へ三あし出テ二あしもどりきりりとまわり下二とうどいて三つひやうしを打テほうほけきやうとくいすのまねをして夫より何成ともそなたの云たい事をおしやれ 是より（音曲むこ）同前（シテ）
「参る程にはや是しや 是からかのていをいたそう ほうほけ

きやうと云 太郎冠者「殊外表テ鶯かさいづる いや是ハとれからの御出て御座る」（シテ）「むこか参りて候 夫々御申候へほうほけきやう」 太郎冠者「扱ハ智殿で御座るか 是より同前 先はし跡はしりも有」
（マ）
シテ 舅 太郎冠者 をしへて 出立常ノ通り

拾一 折紙簪

「舅出名衆 太郎冠者ヲ喚出シ常ノ通り」
シウト「今日ハ吉日なれば智殿のわするはづで有たが俄にけふハこまいと云ておこされた程に何も用意するなと云付い」 太郎
「畏て御座る」（常ノ通り） シテ「舅にいとしからるゝ花智ですけふハ日もよふ御座るに仍て智人を致すはずで兼て約束を致して御座れ共参るまいと申遣して御座れども去ながら日もよふ御座り其上しきりに参たひ心に成て御座る程に女共を呼出し談合致そうと存ル なふ／＼おりやるか」（女出ル シカ／＼）
そなたを呼出すも別の事でもなひ 俄ニ舅殿の方へしきりに行たひ程に行ふと思ふが何と有ふぞ 女「最前とめて被遣た程に先けふハ御無用に被成ませひ」 シテ「どふ有ても行たい程に支度をさしませ」 女「夫ならば参ませう」（道行） シテ「身共がいたらばよろこばるゝであらう」 女「何が扱およろび被成ませう」 シテ「定て」 女「なんで御座る」 シテ「もらう物ハ」 女「扱ハ御引の事で御座るか」 シテ「中々其引手物の事よ」 女「夫ハおんでもない事 ますますと」 シテ「夫さへあれば何よりじや」 女

「申あれゑ御座つてさもしし事を被仰まするな シテ「心得ておりやる 女「参る程に是で御座る こなたのお出の通りを申ませう 夫にまたせられひ 太郎冠者 太郎「誰で御座る 同「おごろさまで御座るか 女「何とと、様ハお宿(二)か 太郎「中々 女「申と、さま参ました シウト「おごろおりやつたか何と思ふておりやつたぞ 女「内のか参られました シウト「なんぢや智殿がわせた 女「中々 シウト「けふハこまひと云ておこされたか 女「俄に思ひ立て参られました シウト「どこに居らるゝぞ 女「表に御座ります シウト「太郎冠者お通り被成いといゑ 太郎「畏て御座る (ト云テ夫より聲へ其通りヲ云シカ) シテ「不案内に御座る シウト「不知案内に御座る シテ「今日ハ参まひと存て御座共日がよふ御座ルに仍テ俄に思ひ立てまいりまして御座ル シウト「内々待まする所に今日のお出祝着に存まする 太郎官者お盆を出せ 太郎「畏て御座る (舅吞聲へさす 聲請テ吞 盃ヲ下二置テ立 女ヲまねき女立テ) 女「何事で御座る シテ「引出物ハ 女「追付出ませう シテ「はやうださしやる様にいわしませ 女「心得ました シテ「是をばこなたへ進しませう シウト「いたゞきませふ シテ「申私ハ物覚のどんな者で御座ル 是をこつたそこのやらのなと、申事も時が過ままするとかならず失念致します シウト「私なども左様で御座る シテ「とかくやる物ハはやうやつてしもふたがよふ御座る シテ「扱私ハもはや帰ります シウト「今日ハ始て御座つた程にゆるりと咄して帰らせられひ シテ「いやゝもはやかへりまする 是々立々しませ 女「心得ました

先お立被成ひ シウト「とかく御座りまするか よふ御座た更ば 同「なふおごふ 智殿ハもちつといられいで残多ひ 夫に就引出物に某の重代の太刀をおませふと思へ共殊外そんじたに仍小金作りにして進上と思ふて細工殿へやつて置たがまた出来合ぬ 先此折紙をわたしてくれさしませ 出来次第跡から遣ハそう程によいよふに云てくれひ 女「是ハ忝ふ御座ります 定てよろこばれませう わらハも戻ります シウト「又重ておりやれ 女「心得ました 申々なぜに早ふ立せられたぞ シテ「おのれハにくひやつじや 某をおめゝとだましたな 女「是ハ何事を被仰るゝぞ シテ「おのれ引出物が出ルの何のかのとぬかしてはしうもなひ酒を呑た 酒ヲ出さずと先引出物を先へ出したがよひ あのやうなしわひ舅が何の役に立物じやおのれも親に逢うが嬉しさにだましてうせをつた しよせんおのれが様なやつハしようが有 (ト云テタ、ク) 女「なふかなしやゝ ちのの様子もしらいで余りきのミちかい 此折紙を見せたらバ悦せられうと思ふたに様子を聞もせひで此様にちやうちやくをなさるゝ 逆の事にいとまを被下ひ シテ「何じや 折紙とハ何の事じや 女「様子ハわわざと云ませぬ シテ「先其折紙とやらを見せて呉ひ 女「様子を云まいとハ思へ共云て聞せう (ト云テ前の通ヲ云) もはや此折紙を何にせうぞと、さまへどしします シテ「是々夫をもどしてよい物か こちへおこさしませ 女「何と被仰ても渡す事は成ませぬとかくいとまを被下ひ シテ「是手を合する程にかにんしておくりやれ 女「ふつつりと聞まひとハ思へ共男の手を合せら

る、程に夫ならばいとまをもとりますまひ シテ「夫ハ近比大慶な 此よろこびに目出度う和哥を上テ帰らふ 女「一段とよふ御座らふ 〔謡〕 シテ「女房よ」 思ふ中のいさかひハ今に始め事ぞかし よしゆるせ女房と手に手を合せ申なをり おもゑハ「此折紙ハ」むすぶの神にておはすらん

拾二 無縁聲 〔銀三郎〕トモ云

シツト「大果報の者デ御座ル 先召仕ふ者を喚出して申付ル事がある 太郎官者居るかやひ 太郎「はあ シツト「いたか 太郎「お前に シツト「汝を喚出す事別の事でもなひ けふハ最上吉日なれば聾殿のわせふと有ル 表をも掃除をさせうず 又聾殿のわせたればこなたへ申せ 太郎「畏て御座ル シテ「是ハあさ夕舅にいとしかるゝ花聲で御座る けふハ最上吉日なれば聾入をいたそうと存じて罷出た 聾入にハ習氣様牀が数多有と申 某ハ何も存ぜぬ 爰に誰殿と申て某にお目被下さるゝ御方が御座ル 是が万能にたつした人で御座る程にあれへ参て習ふて参らふと存て罷出た 急で参らふずる 何とお宿に御座らふか御座るまひかしらぬ事じや お宿に御座ればよひが いや参る程に是じや 先案内をこをう 物もふ お宿に御ざりまするか ヲシヘテ「表で物もふと有ル 案内とハ誰じや シテ「物もふ ヲシヘテ「物まふとハ いやそなたか シテ「中々 私で御座ります ヲシヘテ「わごりよならばつつかけてはいりたひ物でハなひか シテ「いや御内容も御座らふかと存ましてひかへまして

御座る ヲシヘテ「よひふんべつでおりやる してわごりよハどれへぞゆくか シテ「扱ハはやこなたのお目にも左様に見へまするか ヲシヘテ「中々 シテ「夫ならばざつとすんで御座ル ヲシヘテ「すんだとハ シテ「其事で御座る けふハ日がよふ御座るに仍て舅の所へ参りまする ヲシヘテ「扱ハ聾入をさしますか シテ「中々 ヲシヘテ「夫ならば前方にしらしもせいで 何ぞ用にたとう物を シテ「夫ハ忝ふ御座りまする 夫に就テ参ました ヲシヘテ「何事じや シテ「聾入にハ習氣様牀が数多有と申まする 御存知のごとく某ハ勝て無調法に御座ル 又こなたハさいく 聾入を被成てよう御存じで御座らふ程に何ぞならふて参らふと存て参ました ヲシヘテ「わごりよハむさとした事を云 いつ某が其ごとく細々聾入をした事が有ぞ ヲシヘテ「しても見まらすればせつく 御座りまするハ ヲシヘテ「夫ハあひの行見舞と云物ぢや シテ「扱ハ御座ルたびハ聾入でハ御座りませぬか ヲシヘテ「中々 シテ「まだ御座りまする ヲシヘテ「何事ぢや シテ「御無心ながら此度の事で御座りまする程にこなたにも私と御出被成て被下ませうならバ忝のふ御ざりませう ヲシヘテ「けふハ隙がいれどもわごりよが其ように云程におもてまでゆこうまでひ シテ「夫ハ忝ふ御座りまする さらバこう御座りませひ ヲシヘテ「わごりよゆかしませ シテ「夫ならば私が参りませうか ヲシヘテ「中々先へゆかしませ シテ「申こなたのお出被成て此様な嬉しひ事ハ御座りませぬ ヲシヘテ「其通りぢや シテ「もので御座りまする ヲシヘテ「何事じや シテ「人と申者ハおごりのつく物で御座ル か様に被成て被下るれば我が

物とてようでみとふ御ざる ヨシヘテ「そう云ハみ共を内の者に
 してようでみたひと云事か シテ「いや夫ハもつたひなひ 左
 様の事ハ存ませぬ ヨシヘテ「いやくるしうなひ程に某を内の者
 にしてよべ シテ「左様に致ませうか ヨシヘテ「中々ゆるす シテ
 「夫ならバおゆるし被成ませひ 申誰様とハ被申ますまひ
ヨシヘテ「誠にそう云てハよばれまひ わごりよ何とぞ名を付て
 よべ シテ「物といたしませう 私親が使ました者の名が御座
 りまする 是に致ませふ ヨシヘテ「何と シテ「銀三郎と申し
 た ヨシヘテ「一段とよからう それにしてよべ シテ「おゆるし
 被成ませひ (へ)という方角のことくにしてはしが、りへ行」
シテ「最早是ぢや 案内をこおう 物まふ 太郎「表に物もふと
 有ル 物もふとハ誰ぢや 是ハどれから御出被成ました シテ
 「聾がまいつたとおしやれ 太郎「心得ました (ト云テ) 申聾
 殿のお出被成ました シフト「舅表におもてにおりまする こう
 お通り被成ませひと申せ 太郎「畏て御座る 舅申まする (※)ヲ
 モテニヲリマスル」お通り被成ひと被申まする シテ「こうと
 うろうか (ト云テ)ふたいへ出テ」無案内ニ御座る シフト「よ
 ふこそ御出被成たれ 太郎「申聾殿ハおもてに御座ります シテ
 「いやあれハ聾では御座りませぬ 家来で御座ル 太郎「いや身
 どもが見しつておりまする 智殿で御座る シフト「夫ならば御
 出被成ませひと申せ シテ「いや／＼み共がつれて参ませう
 申こななに御出被成れいと申まする ヨシヘテ「身共が何とでら
 る、物ぞ (口伝有) 太郎官者ヲ使ニしてむりにおしへテヲ聾
 じやト云テ出ス」 シフト「はて扱よふお出被成ました 太郎官

者お盃をたしませひ (盃をして舅へ盃ヲかへツテ舅)「今の物
 を ト云 太郎官者」(心得ました) ト云テちいさ刀をやる
 扱おしへていたゞいていとまを云テ帰ル ふたいへ出ス口伝
 色々有リ シテハはしか、りにいる」 ヨシヘテ「なふうれしや
 思ひの外仕合を致した シテ「申先今日ハお影で忝御座りま
 する 夫を此方へ被下ひ ヨシヘテ「なんと身共が貰ふた物をわ
 ごりよにやらふか シテ「是ハいかな事 聾ハ某ぢや程にぜひ
 共おこさせられい (ヤルまいやろふと云テむりにシテがとる
 おいこミ)

シテのしめ 狂言袴 かけすわふ おりゑほし つと樽
 棒ニ付テ持出ル

アト のしめ 長上下 小サ刀 扇
 舅 のしめ すわふ上下 折ゑほし 小サ刀 扇
 太郎官者 嶋の物 狂言上下 こしおひ 扇

同 銀三郎 (無縁聾)ト同事也 銀三郎狂言ハ長門ノ江
 山氏ヨリ来ル

(シテ)「是ハ此他りて人の御存知の者で御座る 今日ハさいじや
 う吉日なれバ聾人を仕らふと存て罷出た さりながら爰に銀三
 郎殿と申て某に別してお目下さるゝお方が御座る 何成共用の
 事が有うならバ云ておこせといわれたに仍テ先あれへ参てたそ
 一人かりて是をもたせて参らふと存る なんと内にいらりやう
 かしらぬまで いや参る程に是ぢや 物もふ 銀三郎殿内に御

御座るがあれがむことのでハ御座りますまいか (男) 「はて扱それが賀殿で参う 早う是へ御座れといへ (太郎冠者) 「申こなたハ賀殿で御座らう はよふ是へ御座りませふ (銀三郎) 「いやく私ハ賀でハ御座らぬ (太郎冠者) 「いや左様でハ御座らぬ 是非共あれへ御通り被成い (太郎トしうと二人きて引立ル) (男) 「扱々よふこそ御座つたれ やいそこな者 お盆をたせ (太郎冠者) 「畏て御座る (盃ヲたす) シテ 「はいかな事 某が賀じゃがなんとした物で有ふ どうでも盆をせねはならぬ (しかた色々有 銀三郎かひかへたるさかつきをうしろから取テのんでさかもりする) (男) 「申賀殿 此太刀ハこなたの御座らぬさきよりもこしらへ置ました 是を進上仕る (銀三郎) 「是ハ近比忝ない事で御座る 夫ならバ此お肴でも一ツのミませう (ト云テ盃過テしうとへ返し 常ノ通) (男) 「申こなたハ夫二御御座れ 私ハ勝手へ参まする 夫に緩りと御座れ (銀三郎) 「某におかまい被成まするな 是はいかな事 扱々嬉敷事かな シテ 「のふくそなたハきが違ふたか 某が賀でおりやる 殊ニ又其太刀ハ身共のちや程二こちへをこさしませ (銀三郎) 「やあらわこりよハきこへぬ者じや 此太刀ハしうと殿がしきにおくりやつたに仍テならぬ シテ 「ならぬと云てもとらねばおかぬ (ト云テむりニ太刀をとる) キン三郎 「是ハ やいくやるまいぞく (シテ キン三郎 しうと 太郎官者)

拾三 岩橋賀

シテ 「是ハ人にゐとしからる、花賀です 某妻を求て三十日におよども今におひてかづきを取ませぬ 余り不審に御座ル程になこぶどを被成たお方が御座る 是へ参て様子を尋うと存て罷出た 先急で参らふずる (道行常ノ通云テ案内ヲ乞) さて唯今まいるも別の事で御座らぬ こなたにも御存のやうに女共を呼まして最早三十日になります ヲシヘテ 「中々其通りぢや シテ 「夫二就少不審な事が御座ります ヲシヘテ 「いか様な事でおりやるぞ シテ 「別の事で御座りませぬ かづきをとれと申ますれ共今において取ませぬ 定而こなたにハ様子を御存で御座らふに仍テ尋ふと存て参りまして御座る ヲシヘテ 「何とおしやる かづきをとらぬ シテ 「中々 ヲシヘテ 「扱々夫ハ合点のゆかぬ事ぢや そなたハ何ぞ氣二入ぬ事などを云ハせぬか シテ 「側へも寄ませぬ ヲシヘテ 「是々別に某の思ひよりもなひがそなたのお内義ハ日比和哥の道に心をよせて哥すきでおりやる程に何ぞおもしろひ哥をよしましたらば其ま、かづきをとるであらうぞ シテ 「何と仰られます 私の女共ハ内々和哥の道に心をよせて哥すきじやと被仰か ヲシヘテ 「中々 シテ 「夫なれバ重々な事が御座る 私のよひ哥を一二首覚ております程によみましたならバとりませうかいの ヲシヘテ 「おんでもなひ とるとも シテ 「夫ならばこふ参ります ヲシヘテ 「おりやるか シテ 「中々 二人 「左落葉く シテ 「なふくうれ

しや 惣じて物を案しう物^(ママ)でハ御座らぬ あのお方に尋て御座れば早速尋があひて御座ル 先急で罷歸 幸某がよひ哥を覚えています程二あの哥をよミまして御座らふならバかづきをとらんと申事ハ御座ルまひ 「ト云テ橋懸りへ行 まくの方向テ」なふくいさしますか 女「わらハをよばせらる、ハ何の御用で御座ルか シテ「云たひ事が有 先こふ通しませ 女「夫ハ如何様な事で御座りまするか シテ「別の事でもなひ そなたと身共と夫婦になつてもはや三十日になる 今において其ごとくかづきをとらしませぬニ仍テ余りふしんニ存去ルお方へ尋たればそちのお内義^(ママ)ハ日比和哥の道に心をよせて殊外哥ずきぢや程に某に哥をよめ哥をよふだならバ定てかづきをとらしませうと被仰た そなたの氣ニ入うかわしらね共一首よもふ程にかづきを取てくれさしませうか 女「なふく何と被仰る、 わらハが哥ずきぢやに仍テ哥をよもふ程ニかづきをとれと被仰る、か
シテ「中々 女「夫ハうれしき事で御座ル 早うよふで聞して被下ひ シテ「よめ「ト云 うなづく シテ笑ひ」 扱々そなたの哥ずき云事を今迄しらいで残念な 早うよふで聞せふ こふもおりやらふか 女「何とて御御座りまする シテ「葛城や人めを包ム神だにも夜ハあらハれ給ふ習ぞ さあくとりしませ「ト云テとりつく」 女「先またせられひ 扱もく面白
い哥で御座りまする 今一ツよませられい シテ「まだよめ夫ハ無利^(四)でおりやる もふゆるして被下ひ 「かふりふる」 とかくよめぢや迄い 夫ならバ此度よふだならばかならずとらしませいや 女「いつがいつ迄かづいていませふぞ 取ませふ共

シテ「何とよもふぞの こふもおりやらふか 女「何とて御座ルか シテ「岩橋の末とをるべき中ならば何に対面いやと云ベき「女」なふくいとしの人や と云てかづきとる シテおとを見きもをつぶし「前^(一)の通りにかづきをきていさしませ と云「女」夫ハお情ない事 ト云テとりつく シテいやがる にげる 姫おいこミ」

シテ出立 段のしめ 長上下 小サ刀 扇
アト出立 シテ同前

女 はくの物 さげ帯 かつらはねもとゆひ 但しひなん
二ても かづきはく 乙面

拾四 右流左死

シテ「是ハ西国方ニ住居致者テ御座ル 某訴訟の事有りて永々在京致す所にあんどのみぎやうしよをいたゞき其上新地を拝領仕り思ひのま、の仕合にて本国へ罷下ル か様の仕合も在京の内清水へ日参申て御座ル 其御利生にて御座らふずると存ル 御礼の爲観音へ参扱本国へ下ふと存ル「道行」 清水の観世音ハげんぶつしやと聞て御座れ共是程あらたに有ふとハ存ぜんんだ 参ル程にお前じや「下ニイテヲカム内ニ女出テ名乗」 女「わらハ、都に住者で御座ル 思ふ子細が御座つて清水へ毎日参まする けふも参らふとおもひまする「小廻しても又橋掛にて名乗すくニモ」 かくれもなひお観音で御座る程に思ふ諸願ハ叶はふと思ひまする 程なふお前で御座ル「ト云テヲカ

ムヲ男ミテ立のいて」^{シテ}「扱もくよい女かな 在京の内にあれ程な女を見た事がなひ 少と詞を掛テみる 「ト云テ下ニイテ」 申々 ^女「わらハガ事で御座ルか ^{シテ}「れうじな申事で御座るが都人で御座ルか 田舎人とハ見へぬ 都にてハどこ許に御座ル ^女「のふけうこつや どこに居ようとかなふてのやうハ ^{シテ}「いや少申たひ事が御座る ^女「してこなたハこの人ぞ ^{シテ}「身共ハ西国の者で御座ルが訴訟の事有て永々在京致いたが訴訟悉ク叶ひあんどのみぎやうしよをいたゞき国元へ罷下ルがはづかしい申事なれども未妻を持たせぬ しぜん旁々も妻なふて左様の望にて是へ参らせられたらバ妻にかたいたいと存て詞をかけ事で御座ル ^女「なふうつきやうや そなたの様な男を何にせふぞ 其様な事ハ聞たふもおりなひ ^{シテ}「やあらそなたハ聞へぬ事を云人じや 浮世の習でよひ男にもわるひ男にもそわひで叶わぬ物ぢや程に此上ハ是非共そひませう ^女「なふうるさや 其様な事ハ聞もいやで御座ル ^{シテ}「是ハ言語同断もつたひなひお詞かな かならず今よりしてハうるさしと云事ハ仰られな ふきつな詞で御座ルぞ ^女「うるさしと云詞ハふきつなと云子細がおりやるか ^{シテ}「中々子細が御座る 云て聞しませう」^{〔語〕} 忝も延喜の御門の臣下に時平のおとゞ 萱丞相 ^{帥ノ何某} 是三人帝の御前へ参給ふ時時平の大臣ハさき萱丞相ハ中そつ大納言ハ跡に立給ふが萱丞相よにこへ御せひきく御座有たるにより跡と先とハたかふして中ひきく候聞しへいのおとゞ^云とまりて大納言殿と目とめを見合中のひくきを鼓にたとへじよこと仰られてどつと御笑ひ被成

候所に萱丞相世にこへりこん第一の御方なればじよことハ鼓の事中ひくき所をおつ取てりやうちやうめんをうつと被仰てからくとおわらひ候へば御両人ハ左右の御まなこにかどをたてりやうちやうめんをうつとハ跡さきとのつらをうつとて大きにいかり給ふ 夫より御両人ハ帝へ参給ひて萱丞相の御事をさま／＼数をつらねなき事を奏し給ふ 帝ハ何となくうるさしと御りんげん被成ば此詞を心得給わす文字にうつして御覧じければうるさしのうハみぎ るハながす さわひだり しわとゞまる 其時萱丞相ハ右の大臣とやらんにてましませば萱丞相を流し申されおんるの身と成給ふ くなふにたへかね高き山ニあがり天にむかひ凡天帝釈にきらくのほんいを御きせひ候所に天より巻物ふりくだり南無天満大自在天神と御くわんをなされたちまちなるいかつちとなつて都に登りざんさうの御方をもたいらげさま／＼のたゝりまして今都のあるじといわれ給ふなり。萱丞相も右流左死の御一言にてうき事にあはせられて候ぞ。かまいてく／＼是より以後ハうるさしと云事ハ仰候な ^女「扱ハうるさしと申事ハ哥さうしにもなき事にて候か ^{シテ}「中々哥さうしにも候ましいぞ ^女「扱ハ伊勢物語にも候ましいよな ^{シテ}「是ハ思ひもよらぬ事を御申有 其伊勢物語と申ハ仁王五十一代平城天皇第三の王子阿房親王の御子在原の〔中将〕業平好色人にすぐれゑいぐわ身に余りたる事をかきあつめて伊勢物語とこうしたる物にて候間中々夫にも候まじいぞ ^女「旁々ハ何もおしりないと見へた おききやれ むさしあぶミさすがにかけたのむにぞとハぬもつらしとこうもうるさしと

有時ハないとハ申されまいぞ シテ「先おまちやれ」(ト云テ脇

へのき此哥でほうどつまつたと云テ口おしがり扱女のハきへ寄

テ大きに口をあいてみする時」女「何とうるさしの有ルない

の返答ハなふて大きに口あいておミしヤルハ何とした事ぞ

(ヤに海意)シテ「其事ちや 身共ハ西国に隠もないしわらの藤兵衛と申者

じやが旁々に参あいて哥物語ニ詰られて口をあかなんだと人二

わらハれむも口をしさに口をあいて御座ル 是よりこなたの哥

のお弟子成申さふ 女「そなたの様な人を弟子ニ取とふもおり

なひ シテ「夫ハ余りつれなひ 身共ハぜひ師匠ニ頼申そふ

惣而師匠ハあがむる物ちや こなたへ御座れ おふてまいらう

(ト云テ女ヲ男おうて入ル)

シテ男 のしめ 長上下 小サ刀 扇 但し狂言上下腰帶

二てもよし 狂言上下二ても小サ刀ハさす

アト女 はくの物 さけおひ ひなん

(「正本の名乗ハしわくの藤兵衛と申者テ御座ルト有ル」)

拾五 手負山賊

シテ「某ハ此他りで隠もなひ山立で御座る 誠に若キ時分より

親の異見をも聞入ず 唯明暮此年迄有度まゝに身を持勿論商売

も覚ぬ故此海道に出山立を致し渡世を送る けふも是に待てい

て何者でも通れかし 丸はぎにしてくれうと存ル まづ是にし

のんでいよう アト「罷出ふる為者ハ東国方あづまの者で御座る 某都を

見物致さぬ 此度思ひ立爰かしこを見物致し夫より西国修行致

さうと存る 先急で参らふ やれ／＼皆の仰らるゝハ若ひ時

旅をせねば老て後物語がなひと被仰るゝに仍テ俄に思ひ立て御

座る やあ何角と云内に爰ハどこじや 何と美濃の国じや 是

ハはや日も暮かゝる 最早伯おりたひが此他りに宿もなし 今少

参たらバ伯おりが御座らふ 片時も早ク参らう シテ「やあ是え

坊主がきた はひでくれう やい／＼おのれやる事でハなひ

ぞ 其おのれがきてゐる物をも路銀も皆おこせ アト「夫ハ何

ともめいわくで御座る 私ハ貧僧でなにも持ませぬ 道々鉢を

開いて通りまする ゆるして被下い シテ「ゐや／＼少成共金

銀のなひ事ハ有まい 是悲無ハ是へきてゐる物をぬいでおこせ

アト「夫ハ何共きのどくで御座る 出家の事で御座る 慈非

にも成ませう かにんして被下ひ シテ「どうでもゆるす事

ハならぬ 先其衣からぬいでおこせ おこさぬと此長刀にて打

切てくれふぞ アト「あゝあぶなふ御座る 進せましょ／＼

(ト云テ衣ヲぬいてやる) さらバとらせられひ シテ「とらい

でならうか アト「扱も／＼めいわくな事で御座る 何と致さ

う やあとかくだますに手なしで御座る か様の処ではまう(笑語)こ

申てもくるしうなひ まうご申たばかりて是に剃刀を持合まし

た すきまを見て切てくれふと存ル 申々私ハ出家の何もなひ

者で御座る きてゐる物をぬひて進せてハ丸はだかに成まする

ゆるして被下ひ 其御恩にハ私ハかたを打あんまを取事を得

ていまする こなたにも定めてかたがつかへましょ程に肩カタを打

テ進せましょ シテ「何と云 肩を打てくれう アト「中々 シテ

「夫ハよからう いかにも肩がつかへてわるひ 見れバ貧そ

そふな ゆるしてやらう さあ／＼爰へよつてかたをうて

アト「畏て御座る ゆるしてさ急下さるゝならば夜どともになりと打ましょ シテ「是へよつて早う打て 長刀も下におこよう

アト「よふ御座りましょ さらば打ます シテ「扱も／＼そちハ上手じや よいきみぢやぞ／＼「ト云テねむる内ニアトワキへのいて」アト「やあよい時分で御座る 此剃刀で笛をかい

て此谷へつきおとしましょ こわ物じやが「ト云テぬき足をしてそばへよりて剃刀にて切鉢 口伝有り」のふ／＼おそろしや／＼ まんまとしすました 足をはかりに参らう 宿をとらう 是々爰をあけてたもれ 旅の出家じや 宿借ておくり

やれ 女「誰じや こちの人は留守じやに仍て宿をかす事ハ成ませぬ アト「尤でおりやるがさりながら出家の事なり 殊に

夜に入りテ行先もしらぬ 慈非^{ニヒ}にならう かしてたもれ 女「何と御出家か 夫ならバ留守成共借ませう こちへ通らせられひ さら／＼ さあ通せられ アト「嬉しうこそ御座れ

先おちつきました ゆるりとくつろぎましょ 女「一はんのこしらへて進上 ゆるりと御座れ アト「心得ました シテ「扱も／＼坊主めにだまされた きつい事をしをつた事かな さ

れども手もあさひ どうぞして宿へ帰らう 定て最早遙ににげおつたであらう にくい事かな いなれうか知らぬ きつういたむが はあうれしや よふ／＼と是じや 女ども爰をあけ

い 帰つた 早うあけい／＼ 女「こちの人の戻られたそうなら さら／＼ 是ハどふした事ぞ 手をおふておりやつた

か 相手ハ誰じやぞ／＼ 何者がしたぞ おしやれいの／＼

シテ「先女共抱へて呉ひ 下にいたぬ 女「心得た 何と手ハ

いたむか／＼ 何とした事ぞ シテ「扱も／＼ぶ仕合な事ぢや坊主めにであつたがだまされた されども手ハあさひ しぬ

る事でハ有まい 氣遣するな 女「いや／＼しぜんの事があれハわるひ きとうにもなる 幸出家に宿借シテ奥間にじや 念

仏をすゝめてもらいましょ のふ／＼御出家 こちの人が手をおふて戻られました 念仏をすゝめて被下ひ アト「夫ハにか／＼しし事ぢや 出家の役で御座る 是で御座るが 南無

阿弥陀仏／＼ シテ「やい最前の坊主ハあれじや おのれやる事でハなひぞ 長刀をおこせ 女「扱ハあの坊主がしたかや

るまいぞ アト「あゝかなしや 爰へ宿を取合さずハ のふかなしや／＼ 女「おのれ坊主め どこまでも追懸打殺してくれうぞ やらぬぞ／＼ アト「やれ出合／＼ かなしや／＼ シテ

「やるまいぞ／＼「二人して出家を追込なり」

シテ山立 鳴の物 狂言袴括ル 腰帶 上三厚板つほ折

苧くず頭巾 髭懸テ 長刀

アト僧 無地のしめ 衣 角頭巾 けさ じゆず 懷中に

剃刀持テ出ル

女 薄^ハノ物 さけ帯 ひなん

拾六 受法

アト「是ハ此他りの者で御座ル 今日ハ遊山に参ふと存る 某一人でハいかゞで御座ル 何も御座るか 立衆「是に居まする

「今日ハ花見に参らふと存るが何と御座らふぞ」
 段とよふ御座らう
 「さあ、御座れ」
 「先今日ハ心指でどれへ御座るぞ」
 「兼て申た寺の花が今を盛で御座ル 其上庭すきで色々物数寄をして置れ終日慰に成所で御座ル程にあれへ参らふ」
 「中々参らふ 乍去あれハ堅ひ日連宗で中々同行でなければ入ぬと申事を聞て御座ル程に能々聞定て御座つたらばよふ御座らふ」
 「いや其段ハ身共次第に被成ひ 受法すると申せば如何様成ル者でも祝で地走めさるゝと申事を聞て御座ルに仍て左様に申て終日なくそふでよい時分にはづしまらせう」
 「常の通り 道行云テ」
 「いや参ル程二はや是で御座ル私の案内をこひませう」
 「一段とよふ御座らふ」
 「物もふ案内もふ」
 「表二物もふと有ル 案内とハたそ」
 「物もふ」
 「ものもうとハ誰で御座ルぞ」
 「いや私で御座る」
 「是ハ何として御座つたぞ」
 「別の事でハ御座らぬ」
 「常々皆々後生一大事とねがいますが諸宗にすぐれて御宗程有難事ハ御座りませに仍て受法致て今日よりお旦那に成ませうと存て参て御座る」
 「是ハ奇特と心が付て御座ル 最早仏のうけさせられたと申物で御座ル 先こふとをらせられひ」
 「心得まして御座る さあ、何もとをらせられひ」
 「心得て御座る」
 「中々はハ御庭の花が盛で御座る」
 「中々盛で御座る 先下に御座れ」
 「心得まして御座る」
 「扱々よと思ひ寄で受法被成た 誠に仏法ハ有難ひ事でハ御座らぬか」
 「是よりシテハ仏法の事を云すゝめる アドあいさつ

そこへしてにはをほめ酒をはじめたがる」
 緩々と承りませう
 「先有難ひ事をとくと云て聞ませう」
 「酒盛二なり小謡小舞にもよの宗旨の文句を有難など、謡ひシテ」
 「夫ハ成ませぬぞ」と云てとむる 扱酒盛過テ皆々「帰らう」と云
 「さらばお経をいたせう」
 「ト云テ持テ出ル」
 「いやそれハ重ていたせませう」
 「いや其様な無心信テなんと成物ぞ 受法しながら御経をいたせかずハしかいかいが御座らぬ」
 「ト云テ扱後」
 「扱ハ花見二きて某をなぶると見へた 当寺へ足ヲ入た者をば一人でも宗牀ニせねハならぬ」と云テ追つき経にて尻をたゝく 少あたりてよし シテ「さあいたせかせた もはやこちの宗旨じやぞ」と云テ居ル
 「トハ」
 「いたせかぬ」と云
 「なんと云テモ半分ハこちの宗牀じや ト云テおいこみなり」
 ▲シテ出立 むしのしめ 衣 角ずきん じゆず 中けい けさ 経
 ▲アト出立 のしめ 長上下 小サ刀 扇 こしかけのふた
 ○立衆四五人出ル 出立同前
 拾七 忠義
 「是ハ当寺の住寺で御座ル 某二三日も田舎へ参ふと存ル 夫二付新発意を喚出し留守の事を申付うと存ル なふ、新発意おりやるか」
 「はあ某を呼せらるゝハ何事で御座ル

アト「某ハ二三日の逗留で田舎へ行程によふ留守をさしませ
 シテ「畏て御座ル アト「又留守の内に旦那衆のわせたならば
 ゆう迄ハなけれ共随分地走してかへさしませ シテ「心得て御
 座る アト「夫に付て身が「初テ行に」さかやきが殊の外はへ
 て目になつ 是でハ行れまい程にちよつとすつて呉さしませ
 シテ「お安ひぎで御座る 唯今かみそりをあわせてそつて上ま
 せう アト「夫はともかくも早うすつて呉さしませ シテ「畏て
 御座る 「ト云テ太鼓座よりかミそり持て出シテ柱のきわにて
 とにてとぐまねをする」 アト「のふ忠喜 シテ「はあ アト「身
 が留守の内花壇のそうじをもとき／＼せふず 又草花をも手
 入をして呉さしませ シテ「心得まして御座る 「ト云テかミそ
 りとぎすましいきをほうとかけ手あわせをして」 さあらバか
 ミそりもあひまして御座ル程にそつて進ませせう もませられ
 ませひ アト「心得た 「ト云テ葛桶のふたを取よせつむりをも
 むまね」 急でそつて呉さしませ 「此間ニかミそりのゑへ竹づ
 へをゆい付テすりかゝる」 是ハ何事ぢや シテ「其事で
 おりやるハ 七尺さつて師のかげふまずと申事が御座るに依て
 夫でか様に致しまする アト「夫ハ尤でおりやるが殊外あぶのふ
 おりやる くるしうない事ぢや程に是へよつてそらしませ
 シテ「少もおきずかひ被成まするな そつともあぶのふハ御座
 りませぬ アト「夫ならばあぶのふないやうに随分念を入れてそ
 らしませ シテ「心得て御座る 誦 いで／＼かミをそらんとて
 師のかげふまんと云事あれば忠喜ハ七尺とびしさり髪剃
 づかをなが／＼と取のばしおよびごしにぞそつたりける アト

「師匠ハ是をよろこびて猶々それやよくそれやとていねむりす
 れば シテ「忠喜ハ師匠ハ仰にしたがひまたかミそりを引よせ
 て手合しながら前をうしろうしろを前へとさかざりに鼻のさき
 をぞそつたりける アト「其時師匠ハきもをつぶしてたゞずミ
 ければ忠喜ハ面目うしないてあそや爰ニかゞみまわれば師匠
 ハ忠喜をとらゑんとおつかけはつめけるを一飛にとんで門前
 さしてにげ行ハせんかたなくてうらめしがほにて鼻をか、へ
 へて眠藏さしてぞ入にける

シテ出立 新発意 小嶋の物か又ハむしのしめか 狂言袴

アト住寺 白ねり裕又ハむしのしめ 衣 こうしずきん

上に角ずきんをかぶり出ル けさ 中けい さかやき
 する時けさとル 尤角ずきんをぬき下のこうしすきん
 はかりにてもむていをする

かミそり一でう と一ツ 竹つへ 布ノ小刻入ル

拾八 どちらくれ

シテ「罷出たる者ハ此他りの出家で御座ル 爰に誰殿と申て旦那
 が御座ル 是「エ」ハ定「テ」斎ニ参 今日ままひらふと存
 ル所に誰殿より御斎を被下れうと有て人を被越て御座ル 是ハ
 又たまさかの義で御座る程に是へ参らふと存ル 「常ノ通道行」
 又アト「いや御坊よふ御座りました 御出被成る、かと存てせ
 つかく待て居ましたれ共御出被成ぬに依てはよときを仕廻まし

た 此様な残多きハ御座りません シテ「いや少もくるしう御ざりません 先通りまして勤を致ませう スアト「夫ハ忝ふ御座る お通り被成ませひ 〔通りて〔布施無経〕のごとくあひさつ〕」
シテ「是ハいかな事 たまさかのぎと存て参て御ざればお斎さゑ給ぬ 又誰殿ハ定斎の義で御座ル程に是ハ待て御座らふあれへ参てお斎を被下れうと存ル 〔道行〕 いわれぬ 誰殿え先定斎の義で御座ル程に参ルはづて御座つた物を いわれぬ事を致て御座ル 〔案内常のごとく〕」 アト「いや御坊様よふ御座りました 御出被成るゝかと存てせつかく待ましたれども余り日もたけまするに依てはや斎を仕廻まして近比残多御座ル シテ「いや少もくるしうない事で御座る お斎ハ被下て御座れ共せめて勤成共致ふと存て参ました アト「夫ハ近比忝ふ御座ル シテ「先通りませう 〔ト云テ入替り正面じゆずをすり経をよむ 扱しもうていとまこひして〕」 シテ「是ハいかな事 誰殿で被下ぬに仍て是へ参テたべうと存たればとつちもはぐれたお斎をたべぬはくるしう御座らぬがいつも十足の布施物を被下るゝか今日ハわすれられたか 但しはくれまひと云事か 〔〔布施無経〕の云分同前也〕 致用が有 御座りまするか アト「いや御坊様ハまだ歸らつしやれぬか シテ「いや歸りまするか私の申事斗り申ましてはたと失念致しました 内々隙ならば教化も申て聞せひと仰られたれ共私の事なればとやかくやと手透をゑませひで今迄おそなわつて御座ル 幸今日ハ隙で御座る程に申て聞せませうが何と御座らふぞ 〔こたへやうへふせない経同前〕」 アト「かうお通り被成ひ 〔ト云テ通り下ニイテ〕」 シテ「此

方にハお若う御座れ共此様に仏檀を結構に被成るゝハきどくな事で御座ル 此様なお心入ハ此愚僧もおはづかしう御座ル 其上お身の上から申さふ 人間に生じても諸果報とハ旁々の事者 〔マテ〕 先二親ハ堅固にして何のともしひ事もなし 則是が仏法の種にてましますぞ 其子細ハ唐土に廿四孝と申て親に孝々成物を絵図に写し末世の handbook とし其中にくわつきよといつし者 壹人残りたる母有り 壹人の子を持 けいくわいにんしの事なれば親を養バ子がうへに望む しよせん子を失ひ親をはごくまんとて大地を堀ければこがねのかまをほり出し富貴の身と成し也 か様の事を聞時ハ貧僧にハ布施をやり慈非を専とし給ふ此世からの仏なり 一生ハ風の前のくも夢の間にさんじ安シ三界ハ水の上のあわと云時ハ人間ハはかなひ物でハおりないかくどくふぎうを一切がとうよ衆生かいぐ成仏 先教化ハ是で仕廻ませう 又御隙の時分ハ寺へ参らせられい 〔是より〔布施無経〕のごとく〕

「方便の以テとらふと云テけさをふところへ入〔布施無経〕のごとく仕廻同前也」

シテ出立 むしのしめ 衣 角すきん けさ じゆず ち

うけい

アト二人共 のしめ 長上下 小サ刀 扇

拾九 昆布布施

アテイ主 「是ハ辺土に住居致者で御座ル 某存ル子細の有程に
 出家達を申入布施を致さふと存ル 御出家衆に五貫比丘尼に三
 貫 先高札をうとふと存ル シテ 「是ハ此他りに住居致者で御
 座る 一日／＼と暮いて早押詰て御座る となりにハ正月の
 拵してお小袖のなんのかのと云テ夥敷ひ拵を被成る、が某八年
 をとろふよふが御座らぬ 石で手を詰た様な事ぢや 又どこへ
 参て無心を申さふ様な事ハ方々のかたをふさげたに仍テ何
 共ならぬ 先女共をよび出し談合致さふ 是のいさしますか
 女 「わらハを呼せらる、ハ何事で御座ル シテ 「そなたを喚出ス
 も別の事でなひ はやをしつめてあれ共年をとらふやうがなひ
 何とした物であらふぞ 女 「わらわ、こなたのどうも被成れ
 うと思ふて居たれば夫ハ扨何と致さうぞ いつも／＼扨にが
 〳〵敷ひ事で御座る どふぞして三ヶ日の用意を被成る、事
 ハなりませぬか シテ 「いやどうもならぬ わごりよ才覚さし
 ませ 女 「こなたさへ左様に仰らる、にわらハが何として才覚
 致さふぞ どれへぞいて無心の云て成共年を取ル様に被成ひ
 シテ 「最早旁々のかどをふさいたに仍テどこへ無心いいうやう
 もなひが何とせふぞ お寺様えいをふか 是もせつ／＼の事
 ぢやに仍テ何とせふぞ 女 「おふお寺様へがよからふ こなた
 がいやならバわらわばかりいて成共かりて参らふ シテ 「おふ
 夫もよからふがそち独りやらふより某とふたりいてどうぞいふ

て少シ成共かつて参らふ いざおりやれ 女 「心得ました シテ
 「又お寺様ハ何としても余の所（へ）よりも心安ひ お宿に御
 座れかしぢやまで 是ぢや 物もう 御座りまするか 住寺
 「案内とハたそ シテ 「いや某で御座りまする 住寺 「いや誰か
 よふおりやつた 何と思ふておしやつたぞ シテ 「ちかひ正月
 で御座りまするが歳暮のお礼に参ました 住寺 「はや仕廻うて
 歳暮の礼におりやつたか シテ 「中々お礼申まする（ト云内
 に） 女 「お寺様わらわもお礼に参ました 住寺 「やふたりなが
 ら礼にわたしたハ 早う仕舞テわたした物ぢやあらう シテ 「其事
 で御座りまする 仕廻かねまして切々の事で御座れども少と御
 無心申に参ました 最早何成ませ程にどふぞして三ヶ日年を
 取まする程にかさせられて被下ませひ 住寺 「夫ハにが／＼し
 い どうぞしておませたいが少もない程にどれへ成共無心のい
 わしませ 女 「申御てら様此度の事で御座ル 三ヶ日さへたて
 ますれば又どう（モ）成まする程に少シ借て被下ませひ 住寺
 「なふそなた達ハ聞わけのなひ 出家の偽りをいわふか 有さ
 へせばかさいでハ 少シもなひ シテ 「尤で御座りますれ共
 もはやどなたへ無心を申さうやうも御座らぬ 春に成ましたら
 ば急度返を申ませう程にどふ御座ル共年をとらせて被下ませひ
 住寺 「まだおしやる 愚僧ハ其様な者でハなひ あらば如在
 が有ふか 扨何とぞして なふそなたが出家なればよい事があ
 れ共 シテ 「はあ夫ハ先いかやうな事で御座りまするぞ 住寺
 「いや其事ぢや 此当りに心指の深ひ人が有が心指をせふず出
 家衆にハ五貫又比丘尼にハ三貫づ、布施をせうと云て高札うた

れた シテ「ヤ夫ハ誠で御座ルか 住寺「中々 シテ」して俄成の
 出家にも其通りで御座りまするか 住寺「おふ出家でさへあら
 ば違ふ事ハ有まい シテ「何と致ませふぞ 出家に成ませふか
 のふか、 女「やあきやうこつなこと いかに手前がならぬ
 というてそふハ成ますまひ シテ「いやそふでハなひ 五貫と
 ればどこぢやと思ハしますぞ お長老様なりませう 住寺「ど
 ふ成ともじやが女房衆に談合めされれひ いづれ五貫とればよ
 い事でハ有ぞ シテ「あ、成ませう か、成ぞ 女「なふいかに
 年を取事ならぬといふてさまをかゆると云事ハ有まひ シテ
 「いや又後ハどふもいたそふ お長老さま かミをそつて被下
 ひ 住寺「そつてもやらふが女房衆が合点か シテ「あれも合点
 で御座らふ 五貫とればバよふ御座ル 住寺「夫ならばそらう
 「ト云テそる内ニ女はしか、りニて」 女「是ハいかな事 はや
 そらる、 ながく敷い事ぢや 「など、云 かミそり取出シ
 そるまねしてずきんきせてかたきぬをとらせ衣ヲきせて」 住寺
 「よふにあふた 俄なりのようにハなひ シテ「あ、過分に御座
 りまする して五貫ハ誠で御座るの 住寺「中々愚僧も只今参
 るよ 女「なふこなたハはや坊主にならせられたの シテ「を、
 五貫致さふと存じてなつた 五貫でハ先五十日も七十日もゆる
 りとすくる程に 女「夫ならばもはやこなたも其様にならせら
 れた程にじやが 申お長老様ひくににハ三貫で御座ルか 住寺
 「中々出家にハ五貫比丘尼にハ三貫じや 女「誠で御座るか
住寺「儘に高札に有 女「夫ならばわらわも比丘尼に成ませう
シテ「いや、某こそこふなつたれ 又そなたハ若ひおなごの

尼に成と云事が有物か 無用ぢや 女「そふでハあれども最早
 こなたも出家にならせらる、 其上八貫とればさてよふ御座ル
 程にお長老さま私も髪をおろしませふ 二入「そなたハ無用じ
 やがの 女「いやどう有ともそつて下されませひ 住寺「おきや
 らいで の 乍去八貫の布施をとれば扱いかひ事じや程に後ハと
 もあれ先ぞらばそらしませ 女「畏て御座る 三貫で御座るの
住寺「おふ 「ひなんの上をするまねしわたぼうしかふせる」
シテ「わ是ハおかいで はあそつたハ 住寺「さらばいさ行う
シテ「心得ました 「坊主先 男中 跡ニひくに」 シテ「是ハ
 一段の事を致いた 住寺「なふ比丘ハ少跡からわたしませ 女
 「心得ました 住寺「是じや 物もふ 案内もふ 住寺「案内と
 ハどなたで御座るぞ 住寺「高札の面に付て参た 住寺「御出
 家達か 住寺「中々 住寺「こふとをらせられひ 「ト云テワキ
 座へ直し置 女立テ」 女「物もふ 案内もふ 住寺「たそ
 なたで御座る 女「高札の面に付て参た 住寺「お比丘尼か 女
 「中々 住寺「こなたハ是へ御座れ 「ト云テワキ正面ニ置ク」
住寺「さらば勤を致さふ 「ト云テ勤する しんぼちもつて
 申 勤すきていしゆあし打にこんふ五枚長老の前ニ置 又五
 枚新ぼち びくのに前にハ三枚おく」 住寺「御念の入ました
 お菓子迄 住寺「是ハ布施で御座ル 住寺「迎の事にお布施を
 申請ふ 「ト云」 住寺「是がお布施で御座る 「キモラツプス」
住寺「高札ニハ五貫三貫と布施に被成れうと御座ル程ニ早ふ
 おふせを 住寺「いや昔からも 「此」 こんぶ一枚を一貫二枚を
 貳貫と申 是を五貫三貫と申事で御座ル 早ふしもふて帰らせ

られひ「そこできもをつぶす ていしゆ引込」^{シテ}「なふお
長老様 五貫と三貫取ルとおしやつたにより坊主ニ成たれば是
ハ何事ぞ」^女「のふお長老様 こんぶを何ニしませふぞ もと
の様に返させられい」^{住持}「いや某もこふ有ふとハ思ハな
んだ そなた達もよかれかしと思ふ事ぢや」^{シテ}「此様に坊主
になしてきこへぬ わ坊主よふして返せ」^ト云テ坊主をつき
たおす ^{住持}「是ハ何事をするぞ」と云トつかミあふ 女う
ろたへて男の足とる ^{シテ}「是ハ某じや ト云 イロく有
テ坊主を打こかしはいる 坊主おきて」^云やるまいぞく ト

シテ男 嶋の物 狂言上下 こしおひ 後ニ新発意出立ニ
成 へんてつ ごうしずきん

女 はくの物 さけ帯 びなん 後ひくに出立 衣 花の
ほうし

住持^持 むしのしめ 衣 角すきん けさ しゆす 中けい
かミそり入ル 葛桶のふた入ル

アトテイシユ のしめ 長上下 小サ刀 あし打三ツ こ
んふ十三枚入ル

廿 六人僧

^{シテ}「是ハ此他りに住居致す者で御座ル 此中思ひ立て仏詣致
さふと存ル 某斗でもなし 一兩人申合た方も御座ル程に是を
さそふて同道致さふと存ル 参ル程是で御座る 誰殿御宿に御

座ルか」^{アト}「どなたで御ざるぞ」^{シテ}「いや某で御座ル」^{アト}

「何と思ふて出させられた」^{シテ}「其事で御座る 今日ハ日もよ
ふ御座ル程に内々申合たごとく仏詣致さふと存じて是迄参て御
座る」^{アト}「よふこそ御座つたれ 誰殿も是に御座ル 夫へ成
とも参つてさそひませふと存じて御ざる 追付参りませう」^{シテ}

「さらば御座れ」^{アト}「先御座れ」^{シテ}「参らうか」^{アト}「中々
御座れ」^{シテ}「か様に同道致からハしぜん腹の立事が御座ルと
も互に堪忍を致いて同道致さう」^{アト}「仰せらるゝ通り長の旅

ぢや程にざれ事をもせいでも叶わぬ事じや いかやうの事が有
共堪忍を致いて同道致さふ」^{シテ}「いや殊外草臥て御座る 折
節是に辻堂が御座ル 先腰を掛テ休ませう あゝいこう草臥て

御座る 少某ハまところミませう」^{アト}「あの人ハ殊外草臥と見
へた」^{ヌアト}「鹿嶋立じや程にそふもおじやらふ」^{アト}「少是へ

御座れ 申よふねいつたと見へた 夫に就最前あの人は何事を
したり共腹を立まいとゐられた程に少なぶつてみませふ」^{ヌアト}

「誠にかたぐ口がためをせられた程になぶらうか何としてよ
からふぞ」^{アト}「あの人ハねごひ程にこかいてもしられまひ
いざ坊主になそう」^{ヌアト}「夫ハ余りじや」^{アト}「いやく何事

も腹を立まいと云からハくるしう有まひ 其上腹をたてたらば
その時の様子によるう そなたハかミそりをおもちやツたか

ヌアト「いや持ませぬ」^{アト}「ふたしなミな人じや しぜん髭を
すらふと思ふて某ハ剃刀をたしなふだ さらばおもみやれ
ヌアト「心得た」^{其内ニ手合してすりにかゝる}」^{アト}「先一方ハ
すつたが何とせうぞ 思ひ出した 耳へ水をいるればねかへる

物ぢやと聞た「ト云テかミそりのゑにて耳へひとしづくおとすまねをする そこでねかへる 又もんでする ずきんをかぶせかたきぬとり衣きせて」^{アト}「いざ少まともふ」^{又アト}「よからう」「ト云テ二人ならねる 坊主めをさましころもあたまのやうすを見ておとろき二人の者をおこし二人ながらおきて」^{アト}「やあそなたハ何と思ふてほつたひしたぞ」^{シテ}「何と思ふてとハ聞へぬ 此様な事をする物か そなた達ならでハせまひ」^{アト}「いや聞へぬ事を云 夫程に思ひ寄つたらば少某らにもしらせいで」「殊外腹を立二人をしかる」^{アト}「其事ぢやたとへば我等がしたにもせよ 最前何事にてもあれ腹立すくなしと約束した上ハ夫程にいわふ事でハなひ」^{シテ}「尤なれ共殊によつた物ぢや 此ごとく坊主にないてよい物か」「ト云テさんぐ詞からかいして坊主ハもとる 二人ハ行 ぼろず太鼓座三下二居る」^{二人}「扱々聞へぬ人ぢや いざ参らう」「ト云テ大臣柱のそばに居るト坊主立テ」^{シテ}「扱々腹の立事で御座る 此へんほうを致したひ や思ひよつた事が御座る 先宿ゑ戻らう」「ト云テ常ノ通道行少云テ」誰の 内におしやるか 又誰のもおりやるか お出やれ (女)二人ながら出る」^女「なふ夫の声じやが何として帰らせられたぞ 是はいかな事 夫ハなとしたなりで御座るぞ」^{シテ}「されば」そなた達にあふて面目もなひ」^女「先何事で御座るぞ わらハのハ何とめさつて御座るぞ おかへりやりませぬか」^{シテ}「先こふとうらしませ そなた達に逢ていわふとおもへば涙にむせんでいわれぬ」^女「左様に仰せらるれば弥聞とふ御座る 早う被仰ひ

^{シテ}「夫ならばかくいてもいらぬ事 いわふ 先三人の同道して参つた 所を云ても合点が行まひ 道に大きな川があつた 二人ハわたらふと云 某ハふかそふな程に先様子を見てわたらしませと云たれどきかいで手とくとりよふて渡た程に真中で深し所へはまつて忒人ながらぼうやなどのふることくにふらりく流れてしんだ」^女「扱も」にがく敷い事で御座る」^{又女}「夫ハ誠で御座るか」「ト云テ二人の女さめくトなく」^{シテ}「某も不便に思ふて此ごとくにさまをかへて高野へ登るがそなた達がしるまひ程にしらせふと思ふて是へ立よつた」^女「扱ハ誠で御座るか 此中夢見がわるかつたと思ふて御座る 此上ハ河へ成共身をなげてしなふ」^{又女}「わらハもじがひしで成ともしにませふ」「ト云テ鳴」^{シテ}「夫程に思ひやらばしんでいらざる事 つむりをすつて成共念仏を申ておとむらやれ」^女「誠に左様致いて後世を弔ひませう」^{シテ}「夫ハ一段ぢや左様にめされひ」^女「誰たのもふ人もなひ程にこなたそつて下されい」^{シテ}「真実左様におもやるか 夫ならばそつておませう」「二人して我先にとそらする すりてからわたほうしかぶせ」^{シテ}「某ハ最前も云ごとく是から高野へ参る程に次手に此かミを高野へおさめておませう」^女「いか様にも被成て下されひ」^{シテ}「二人ながら比丘尼なりがよい さらば」一段の事を仕た まだ是でハ腹がいぬ 皮者共が遠ひハ行まい 追付て致し様が御座ル」「ト云テ行時二人立テ」^{アト}「彼者ハ在所へもあもどるまいぞ」「そこでたかひに見て」^{シテ}「そなた達ハ誰ぢや」^{アト}「誰とハ何事を云ぞ 誰々ぢや」^{シテ}「声を聞

ば政^{まさし}う誰^{たれ}々じやがふしぎな事ぢや アト「何事を云ぞ シテ
 「其事ぢや 某義ハ在所へもどつたればたがいたゐたやら二人
 ながら河へはまつてしんだといふて在所でハなげく アト「や
 れ其様な事ハないぞ 彼返礼に云物であらふ なかまやつそ
 シテ「いやそふいわばいへ 女房衆がいきてもしんでもと云て
 じがいしてしんだ アト「やれだまされはせまいぞ シテ「夫な
 ればせひもない 去ながらせふこが有ル アト「夫ハ何事ぞ
 シテ「是々此かミを見さしませ 是ハそなたの女房衆の又是ハ
 わごりよのお内義のじや 覚ハないか 二人ながら手に取テ
 見て」 アト「是はいかな事 髪がみじこふてあかひ 又アト「び
 んがちうで有 扱ハ誠か シテ「中々 何の偽があらふぞ
 そなたたちがしるまいと思ふて是迄きてしらせた アト「誠に
 思ひ合する事が有ル 女房が常々いふたハしせんのがあら
 ばいきてはいまひと云たが一定じや なさけなひ事ぢや 〔ト
 云テ二人ながらさめくとなく〕 シテ「夫程におもやらば後世
 を吊ふておやりやれ アト「何としてよからふぞ いざさまを
 かへて高野へ参らふ 又アト「一段とよからう アト「そなたそ
 つて呉さしませ シテ「心得た 二人ながらそりてづきんかふ
 せかたきぬ取衣きてもよし」法師なりもよひハ アト「いざ参
 らふ 去りながら先在所へもどつてからの事に致さふ 又アト
 「そふも仕らふ 〔ト云テ常ノ通道行云テ〕 シテ「参る程に是じ
 や 誰々の女房衆おでやれ 〔二人女出ル〕 シテ「某を此様に
 したがいよいか 〔四人ながら腹ヲ立テ〕 アト「是はいかな事
 何としてよからふぞ あの人^{シテ}の女房も呼出してすらふ

「夫ハゆるして呉ひ 皆々」なんのゆるせ 〔ト云ま、よひ出し
 てすりてわたばうしかふせ六人ながらぶたいへ出テさかもりし
 てシテ舞〕 シテ「あらく面白^マの地主達の遊やな 桜色成小
 袖めして雪のふるに夜あるハさそふ殿とつれて行や心成覧 さ
 ぞな何事も花の都の七条道成の内ぞゆたか成 鐘かすかにて音
 羽念仏の数珠つぶをくり返しくても面白^場や有難やな 地主
 道成を廻ル事ぞ久敷き シテ「唯頼め 南無阿弥陀ぶの御誓願
 我世の中ヲ走り廻らておのづからやぶれし物を紙絹を御法も
 うすき人々を^の実もかれたる声なりと勤けぎよにあひもせで酒吞
 事ハ有明^{アリナガラ}の庵も地主も^{イジ}ゑり いや 妙がたのべつしや あら
 たへがたのべつしや
 〔シテ「昔からもこわされハせぬ事じやと云か此事じや 去なが
 ら是ハたゞ事でハ有まい 後世を願へと有おつけて有ふぞ
 アト「誠にみじかい命を持ていたづらにくらさう事でハなひ程
 に是を^{菩提}ほだひのたねとして後せうを願わふ シテ「それなら
 バ某をんどを取テ申さう なもふだ 三人「なもふだ 女「なも
 ふだ 皆々「なもふたくくくくく」とつはいひやろひ〕
 シテアト又共二嶋の物 狂言上下 腰帶 扇 袴括ル か
 ミそり 後二がうしずきん又ハ角頭巾■〔綴じ込みが
 きつく、最後の一行読めず〕

廿一 双六僧

ワキ「へ我ハとうとく思へどもく人ハ何とか思ふらん」

是ハ東国方の者で御座ル 某諸国修行申さず候間此度思ひ立北
 国修行にかゝり夫より西国しゆ行致さはやと存候 〔道行〕へ遠
 近のたつきもしらぬ修行者をく誰か哀と思ふらん あなた
 こなたではちひらきしらぬ所に着にけり 〔やあ是成石塔を見
 候へば兆子袋数多かけ置れて候 是ハ如何様子細有べし 所の
 人に尋バやと存候 所の人の渡り候か 問 所の者のお尋ハ
 いか成御用にて候ぞ 〔是成石塔を見申せハ兆子袋を数多
 かけ置れ候 いわれのなき事ハ候まし 教へて給り候へ 問
 御不審尤二て候 あれハいにしゑ此所に双六僧と申て双六打
 の候へしが有とき双六の上にて口論の致され相手を切ころし其
 身も当座に相果申され候 則其僧の印にて候 夫に付不思議成
 事の候 此石塔に袋をかけ候へば双六の目が思ひのまゝに出ル
 と申て今においてか様に袋を懸申事にて候 お僧も逆縁ながら
 吊て御通りあれかしと存候 〔念比にお教へ万足申候 さ
 有らは逆縁ながら吊て通ふるにて候 問 又御用の事候へハ
 被仰候へ 〔頼ませう へ扱ハ双六僧の旧跡かや いざ
 〔や〕跡とひ申さんとかねからくど打ならし今宵ハ爰に旅ね
 して彼御跡をとふとかや へ 〔一セイニテシテ出ル 〕シテ
 へ 双六のおくれを打其心半一ツ斗のたのミなりけり 〕ワキ
 へ ふしきやな 是成塚の影よりもまほろしのごとく見へ給ふ
 ハいか成人にてましますぞ 〕シテ 是ハ双六僧と申双六打の
 幽霊成が御吊の有難さに是迄顯れ出たるなり 〔ワキ へ扱ハ双
 六僧の幽霊ならば最後の有様語り給へ 跡をハ吊ひ申へし 〕
 〕シテ 〔さ有らハ昔の有様を語りて聞せ申へし 跡をとふて給わ

り候へ 扱も有つれ へ 事成に例の友達打寄てきをひおく
 れを打けるに相手のくせ者石をまきらかす こハいかにといか
 りて腰の刀に手をかくる へ 朱三さらりとひんぬけば 〕地 へ
 へ 五六のやうなる相手もぬき持白黒になつておふつまくつ
 つしのぎをけづりきつづきられつ我ハおくれになりしかば 〕
 〕シテ へ かなわしと思ひて 〕地 へ かなわしと思ひつゝ三六かけ
 にかゝむ所をつゝけ切にきりたてられて我ハそこにて四の二け
 り 四三をはなれて五二となつて修羅道に落にけり 〕シテ
 へ あゝ、ら物々し いざうとふ 〔カケリ へ あゝ、らくるし
 や か様に苦をうくる事双六の 〕地 へ 最後の一念悪鬼となつ
 て修羅道のくるしミ成を助給へや御僧よ へ といふかと思へ
 ばうせにけり へ

廿二 六地藏

アト 〔是ハ此他りに住居致者で御座ル 此比在所の者共が寄合
 宿のはづれに堂を立て御座ルが是に六地藏を作らせうと申談合
 極て御座ル 夫ニ付某〔都〕へ登り地藏を調べて参れと有事で御
 座る 〔是よりへ仏師〕同前なり 夫ならば六蔵を頼たふ御ざる
 が作て被下れふか 〕シテ 中々作て進上 そなたハ六地藏のい
 われをおしりやつたか 〕アト 〔いや何と御座るか存じませぬ
 〕シテ 〔いち へ 云て聞さう 先六地藏と申ハ一鉢ハミやうい地
 蔵と申て錫杖を持てむけん地獄をすくい給ふ 又一鉢ハむに
 地蔵とて本願を以て餓鬼〔堂〕のくげんをたすけ給ふ 一鉢ハ

しやうさん地蔵とてじゆずを以て畜生堂^(道)をたすけ給ふ 一鉢ハ
そく地蔵とて衣を持て人道のくげんをすくい給ふ 又一鉢は鉢
を持て修羅のくげんを助給ふ 一鉢ハふくりき地蔵とて手を合
天道のくげんをいのり給ふ され共同一鉢なり 何れの仏の
くわんよりすぐれて有難ひ事ぢや程にいかにも六地蔵を作てお
ませう 扱おたけハ何程に致そふ (仏師)同前 山越ヲ云テ
扱ヤトヲキク いや／＼宿をいうたりともおしりやるまひ
五条の因幡堂をしつておりやるか アト「中々存しました シテ
「あのうしろ堂にあらこもをたれておこふ程に明日の今比あれ
へおりやれ アト「心得て御座る 二人「さらば／＼ (ト云テア
ト座ニイル) シテ「是ハいかな事 某ハ心ながらふとくしんな
者で御座ル 終に楊枝を一本つけた事もふて地蔵を請取て御
座るが乍去身共のせいたけと申たも下心が有て申た事で御座る
なふ／＼おりやるか 相談する事が有 出さしませ ツレ二人
「何事でおりやるぞ シテ「わごりよ達を喚出すハ別の事でハな
ひ 田舎者が地蔵をあつらへたひと云て町中をよばハつて廻た
程に身共が詞をかけ仏師になつてまふとたらしめて六地蔵を請
取た 則代物万正に極た程に首尾よふしおふせたらバわごりよ
達にも配分してやらふぞ 地蔵にならしませ ツレ二人「いかに
も配分しておこしやらハ地蔵にならう シテ「夫ハ一段の事ぢ
や 先夫に待しませ 跡から因幡堂へおりやれ やう／＼田
舎者が参る時分ぢや 因幡堂へ参らふ アト「最早地蔵のでき
ます時分ぢや 急で因幡堂へ参らふ やあ仏師殿御座ルか
シテ「中々御座つたか アト「何と地蔵ハ出来ましたか シテ

「中々出来ました うしろ堂へまわらせられ あらこもがたれ
て有ル アト「心得ました シテ「やあ何もおりやつたか さあ
／＼早う地蔵を拵へさしませ わごりよハ鉢と そなたハ錫^{シメツ}
杖 身共ハ珠数 是でよいぞ 面を先きさしませ 二人「心得
た シテ「よいぞ／＼ 仏の様に急度としていよふぞ アト「参
ておかみませう うしろ堂のどこ許ぢやしらぬ や爰にあらこ
もがたれて有 上ケテみよふ さら／＼／＼ 扱も／＼よふ
出来た はよい事かな 残りの三鉢ハどこに有るしらぬ 仏師
殿御座ルか シテ「中々是におりまする アト「あれはよふ出来
まして御座ル 残りの三鉢の地蔵も一所におかみと御座る
どこに御座るぞ シテ「されば所がせまに脇に置ました こ
ちへまわらせられい アト「心得ました シテ「扱も／＼^(どがし)
事かな 又地蔵にならずハ成まい なふ／＼はよふ地蔵の道
具を拵て持しませ 拵^{ゴシラ}が出来たか 見付られぬやうにせう
ぞ アト「扱も／＼是ハよふ出来た あら有難や 南無地蔵大
菩薩／＼ なふ／＼ 仏師殿御座ルか シテ「中々是にいまする
アト「殊外よふ出来ましたがど御座つても一所に六鉢共に
おがみたふ御座ル シテ「いや最前申ごとく所がせばさに一所
におきませぬ事で御座る アト「夫ならバせひに及ませぬ も
一度おかみませう シテ「中々あれへいておがませられひ 是
ハ扱又地蔵にならずハ成まい さあ／＼早う拵へやれ／＼
二人「心得た ほこがあるか しやくぜうが見へぬ シテ「夫々
おそいぞ／＼ アト「是ハ最前とハ違ふた こりや仏師じや
シテ「いや／＼ 仏じや アト「どれも皆人じや 扱ハまいすども

じや にくいやつ の やるまいぞ〜 三人 「あゝゆるして呉ひ〜」 アト 「やるまいぞ〜」

シテアト三人出立 むしのしめ 狂言袴くゝり 水衣 こしおひ ごふしずきん しやくぜう ほこ じゆず
アト 田舎者 嶋物 狂言上下 こしおひ

廿三 拄杖

アト 「是ハ辺土に住居致僧で御座ル 某いつぞや都え用事有テ登り其次手ニ拄杖をあつらへ置ました 漸此比ハ出来ル時分で御座る程に取に参ふと存ル 先そろり〜と参らふと存ル いや出家程世にたのしみな者ハ御座らぬ 今日もまた行先にどれへ成共逗留致シ仏詣をして戻ふと存ル やあ参程に彼拄杖屋ハ是で御座る 物もふ亭主内に御座るか シテ 「表に案内が有どなたで御座る アト 「いや身共で御座ル シテ 「やあ是はいつぞや拄杖をあつらへさせられた御坊か アト 「中々 左様で御座る 何ともはや出来ましたか シテ 「いかにもよふできました 夫にまたせられい 見せましよ アト 「心得ました 見せて被下ひ シテ 「是々是で御座る アト 「扱も〜 是はよふ出来ました 身共のあつらへたに少も違ハなひさうな シテ 「随分念を入ました 夫に付テこなたハいつぞやお目にかゝつた時よりいかにしてもしゆせうニ存ル 何と此拄杖に付て一句持て参ふか アト 「是ハ亭主きどくで御座る 何と〜 シテ 「いか成か 是白木の拄杖 (アト) 「うるしなればぬる事もなし シテ

「ぜんざい〜」 シテ 「扱ハ花ぬりになるゝか 此拄杖おれての後ハいかに アト 「一念ハつく共ニ念をつかず シテ 「扱も〜 こなたハいよ〜 殊勝千万に御座ル 身共もか様のしよくを致しますれど常々出家の心指で御さる 先奥へ通せられ一飯も進せ其上弥々ありがたひ教化にも預りとお御座ル 先とをらせられひ アト 「いかにも人をすゝむるハ出家の役で御座ル成程通りませう 其拄杖も是へ被下ひ シテ 「心得ました なふ〜 御出家 内々私も只今申通り出家の望で御座る程にこなたの弟子に被成てくだされ とも〜 国々を修行致しとお御座る アト 「いかにも身共の弟子に致して只今髪をそり出家に致ハ何寄安ひ事で御座ル さりながらか様の事ハとくと親類兄弟又ハお内義ともよふ相談めされ かりそめなにをと出家しても後悔する事も有物で御座ル 出家になれば夫々の法を勤め経(マデ)とうをも覚ねばならず身持がとつと六ヶ敷う御座ル 去りながら勤べき事さへつとむれば外に心にくらふハなひ どれへ成共参たひ方へハ心のまゝに参りとまりたひ所にハとまる 何に付てもをしいほしいと思ふとんよくをなくはなれてからハ中々心に苦がなふて此世からの仏で御座る シテ 「被仰るゝ通りで御座る 夫故私も俄の事でも御座らぬ 常々の望で御座る成程万事心得ていまする ぜひともし弟子にして被下ひ アト 「何ととくと合点(ゆき)ましたか シテ 「中々 かね」 致ました アト 「夫なら剃刀をあてませう 親類衆御内義も同心で御座るか シテ 「成程女共も日比に云聞せて置ました 身共次第で御座ル アト 「夫ならばよふ御座る さらば用意被成ひ シテ

「心得ました さかやきをもミませう」ト云テする 扱しきに
角すきんをかぶせし」女「こちの人ハ最前拄杖をあつらへた
が取に参られた をもてへでられたが何をしていらるゝぞ 隙

が入ル 見に参りましう やあ是ハこちの人 わごりよハ坊
主に成たか 夫ハ誰にとふて成ぞ 爰な坊主もよふかミをそら
ふと思ふたな あ腹立や」先此かミそりをこちへおこせ

「是ハ何とめさる お内義も合点じやといわれた」女「ま
だそのつれを云か わらハを何とせふと思ふぞ 坊主になる
おのれは先どれからうせた あちゑうせぬか」腹立や

「是ハ何とするぞ 身共ハむりにすゝめハせぬ
内々のそミぢやといわれたまで」女「其様な事を云か おのれ
まいす坊主め やるまいぞ」

「あゝかなしや ゆるせ
やいわ男 よふわらハに合点もさせひで坊主になら
ふといふた わらハ、何となれと思ふ 腹立や」いや最

前の出家が坊主ハ楽な物じや なれというたに仍テすらうかと
思ふて 女「まだ其つれな事を云か おのれ何とせふぞ 腹立
や」

「もはや思ひとまるぞ やれゆるせ」女「あゝ
腹立や」どちへうせる やるまいぞ のふ腹立や」

シテ 鬘斗目 長上下 小サ刀 扇
○アト出家 無地のしめ 衣 けさ 角頭巾 数珠 かミそ

女 薄^薄の物 ひなん さけ帯
こしかけのふた入ル しゆぜう

廿四 腥物

「是ハ此他りに住居致者で御座る 召遣ふ者を呼出し申付
ル事が有ル 太郎官者いるかや」

「常ノ通」汝を呼出すハ別
の事でなひ 内々伯父や者から小金作りの太刀をかりた 夫を
返を仕ル様にといわれた 汝ハ大義ながら持てゆけ

「畏
てハ御座共道がつつと不用心に御座る 某ハ成ますまひ」
「夫で太刀と見へぬ様にしておいた」ト云テ太刀ヲ持テ出テ

「是々こふして持てゆけ」誠に太刀とハ見へますまひ
なまぐさ物の様に御座ル 「路しで人がとふたらばなまぐ
さ物じやといへ」

「畏て御座る」常ノ通り」是ハいかな
事 かりそめながら大事の御使に参ル あのだハぶやうぢんな
がめいわくながら参らう

是からさきが盗人の有所じや はや
日が暮た あゝいこうくらふなつた 是々用心して通ル物ぢや
かまへてそばへよるな 是ハいかな事 何者やら二三十人居
る やい」そこをのいてとをせ」物を云て呉ひやい

「笑テ」こわい」と思ふニ依て人かと思ふたれ
ばくひぢや きもをつぶした 此さがわるい所ぢや」
「最前太郎官者を使にやつて御座るがおくびやう者で御座ルに
仍テ心元ない 中々参ル事成まい 太刀を人」二」とられぬ内
に跡から参り見うと存ル さればこそ爰におそろしがつてひと
り事を云ておる 少おとしませう」

「南無三ばけ物が有
あゝ大仏のせひより高ひハ」がつきめ」

「あゝか

なしや助て被下ひ アト「おのれが持たハなんぢやぞ シテ「是ハ小金作の太刀でハ御座らぬ 腥物で御座ります アト「いや シテ腥物でハ有まひ いつわりをいうたらばしようが有ぞ シテ「あ、有のま、申ませう 助て被下ひ 小金作の太刀で御座ル アト「其太刀をそこをいてゆけ シテ「畏て御座る 則こなたへ進ませます 命のぎハおたすけ被成ませひ アト「命ハ助ル 早ういね シテ「あ、見ませぬ シテ「こわや シテ「急で帰らふ 扱々おそろしいめにおふて御座る いや参ル程に是ぢや たのふだ人御ざりまするか アト「常ノ通り」 アト「戻つたか シテ「唯今帰りました アト「汝ハ色がわるふをかしいかほぢや シテ「よいお目聞で御座る のふ シテ「おそろしい目にあひました 太郎冠者を一人ひろわせられて御座る アト「何とした目にあふたぞ シテ「先お屋敷を出まして大仏の他りへ参ると四五十人して某を取廻しまして おいはぎ共が アト「してなんと シテ「私も常々の手柄の程を見せませうと思ふて真中へとりこめられながらおれをゑしらぬか 頼ふだ者の御内に隠もない太郎官者じや 一人ものかすまいと申て御座れば長太刀のやりのと申てんでに持てかゝる中にもとひかね是にハ近比めいわく仕りまして御座る アト「とびかねとハ シテ「シカクニテ」 シテ「こう シテ「かまゑてつつとおこす物で御座る アト「夫ハ弓矢で御 シテ「らふ シテ「されば弓矢で御座らう やりも長太刀も皆切おつて御座る アト「手柄をしたな シテ「其もつた物ハ何ぞと申に仍テ是ハ小金作りの太刀でハなひ なまぐさ物じやと申たれば夫をおこすまひ

か いこそせと申程にやるまいとハ思へ共爰てしすればいぬじにぢや 主の様にた、ねバならぬ ぜひにおよばぬ こつじきにとらしたと思ふと申て四五十人の中へやつて一もんじに帰りました 手柄を致て御座る アト「あ、おくびやう物じや 其太刀をとつたハ某じや シテ「こなたハ偽を仰らる、 アト「おのれハ大仏よりおびたゞしいなど、こわがる おれががつきめ シテ「ト云トひつくりする」 夫見よ 今もびつくりするハ シテ「落武者と申者ハす、きのほ二もおちると申がじやうじや 夥敷ひ目にあいました其上じやに仍テびつくりと致た アト「慥にしやうこが有か シテ「いつわりを被仰ル、 シテ「しやうこハ御座ルまい アト「ていどか シテ「中々 アト「是々是じや シテ「いやこなたハ富貴な御方で御座るに仍テ此様な物を持て御座ルと存ル アト「また其様な事を云をるか にくいやつ シテ「あ、御ゆるされませひ アト「どれへうせをる やるまいぞ」

シテ太郎官者 嶋の物 狂言上下 腰帶
アト主 のしめ 長上下 小サ刀 扇
太刀をわらにてつ、ミ出ス

廿五 牛座当

シテ「是ハ此他りに住居致勾当」で御座ル 近日京にてす、みの会が御座ルに仍テ登りまするが某ハ此程足を シテ「けが」致た程にそんなじよ シテ「名ヲ云テ」誰殿へ馬をかりにやつてのつて参らふと

存ル 菊都いるか キク「是にいまする シテ「汝を喚出すハ別の事でない 頓而京にて涼の会が有に仍てけふから登ふガ何とあらふぞ キク「一段とよふ御座りませふ シテ「汝〔ガ〕しるごとく某ハ足をけがをしたに仍テあるく事がならぬ そちハそんじよ誰殿へいて大事の馬で御座れどもかさせられてたもと云てかりてこひ キク「畏て御座る 乍去今日登らせられうと思召さバ二三日も前から仰られてこそよう御座らふずれ是ハ俄なからせられ様で御座る シテ「何時かりにやつてもいやと云人でなにいに依てくるしうない 何とぞいてかりてこひ キク「夫ハはや随分申てかりてハ参ませふが少と御無念で御座る シテ「はやういてこひ キク「心得ました〔勾当ワキ座ニイル〕やれ／＼俄な事を仰らるゝ事ぢや けふ登ルと思われうならバ百日も式百日も前に云て被遣たい物でハないか いか心に心安ひ中じやと云ても余りでハ有ぞ 乍去先参て何とぞ申てみう〔道行〕あの馬ハ地道がはいに仍テ身共ハ供がなり ママかにやうかと思ふて何寄めいわくな事じや〔常ノ通案内ヲ云〕
テイ主「菊都か キク「あ菊都で御座ル テイ主「此間ハ見へなんだな キク「其事で御座る 勾当の用の事ハ身共斗に申付らるゝに仍テ一節隙が御座らいで夫で御見舞をもお申さいでめいわく致しまする テイ主「誠に何かについてもそちじやに仍テ隙のないが道理ぢや けふハ隙が有てきたか キク「いやお使に参て御座る テイ主「何とした使ぞ キク「近日何ものすゞミの会が御座ルに仍テ勾当の京へのばられまするが此程足をけがいたされてかちでまいらるゝ事がなりませぬに仍テ大事の御馬で御

座れ共こなたの馬をかさせられて下さるゝ様にと申されておこされて御座る テイ主「夫ハ安ひ事 かそうが乍去身共が馬ハ地道がはい程にそちがめいわくせうぞよ キク「されば今独り事にもこなたの御馬ハ地道が早う御座るに仍テ私がめいわくで御座るトノ申事御座りました テイ主「さあらばそちがめいわくせぬやうにこんだ〔コニタトモ云〕をもつた程に是に鞍置てかそうぞ キク「やれ／＼夫ハ忝ふ御座る さあらば其こんだをかさせられて下されませひ テイ主「定てそちが口をとつてゆこふに仍テそちがはやふあゆまははやからふず おそふゆかはおそからう程にさふ心得い キク「中々 私が口をとりませうに仍テ夫ならば一入忝ふ御座ル 追付かさせられて下されひ テイ主「引だそう程に夫ニまで キク「畏て御座る〔楽やより牛引出ル〕 テイ主「菊都居るか キク「是にいまする テイ主「さあ／＼是をかすハ そちへむきそふじやぞ 引てゆけ キク「あ、忝ふ御座りまする テイ主「京からもどつたらば勾当に隙を貰ふてゆるりと咄にこひ キク「帰次第にお見舞申ませうも私ハ参ませう〔いとまこひをしておのく〕やれ／＼うれしや かりて参る程に勾当の満足あそばさうも一ツの馬ならばはやからふに仍テ身共ハ馬にあつくまひしおそくハしかられうず私一人のめいわくで御座るふが此様なうれしい事ハなひたゞさへきのみじかに依テちつと違へば其ま、ちやうちやくめさるゝさかいでおそろしうてならぬ 是じや 御座りまするか シテ「何と菊都帰つたか キク「戻りました シテ「して馬をかりてきたか キク「中々 馬をかりて参ました シテ「其

馬ハ地道がはい程に汝ぬかるな キク「其事で御座ル 幸こんだをおこさせられて御座ル シテ「夫でもくるしうない しまふて有まいかと思ふて氣遣をしたに一段の事ぢや さあらば追付のつて行ふ キク「急でのらせられひ シテ「汝ハ笠をかたげて馬の口につけ キク「畏て御座る 其杖をばこしにさせられひ シテ「心得た「ト云テ乗て」 さあよくハひけ キク「もはやのらせられて御座るか 引まするぞ シテ「ひけくく」〔道行〕 寄特な事ぢやぞ 何時無心を云ても此ごとくにかしてたもる事ハ嬉しい事ぢやぞな キク「夫ハ随分おきどくなお人で御座る 其上今度ハ私が面白をかしう申て御座ルに依て此こんだをかさせられて御座る シテ「やい此馬ハ何とやらくびかながひやうにおぼゆるがそうでハなひか キク「されば何と御座ルぞ いかなりとなこふハなりますまひが シテ「いな事でなこふ覚る キク「鞍の内ハ何と御座ルぞ シテ「鞍の上ハ一段とゑひ キク「夫ならばよふ御座らふハ扱内ニ立衆三人もイツル」 立頭「是ハ此他りの者で御座る けふハ稲荷の御ゑん日で御座る程に若ひ衆を同道申て参らうと存ル〔皆々ヲ呼出して〕 けふハ稲荷の御縁日で御座る程にいざ参らせられまひか 立衆「実と左様で御座る 同道仕らう「たかにじぎして」 立頭「けふハ天氣がよふ御座る程にさだめて大参で御座らふ 立衆「其通りで御座る 次手にけふハゆるりと慰ませうぞ 皆「一段とよふ御座らふ「など、云テ見付笑々々」 立頭「いづれもあれ御らふじられひ 目あきさへ牛にのつたハ見ぐるしひ者で御座ルに座当の牛にのつたハみら

る、物では御座らぬぞのふ 皆「実も誠におかしいなりて御座る 立頭「あれハ牛じやとしつてのつて御座るか 但ししらいでつたか みともないなりで御座るぞ 立衆「いかさまをかしい物にのつたことでハ有ぞ「勾当聞付」 シテ「やい菊都身共がのつたハ牛じやと云てわらふが牛でハないかいやい キク「やあ夫ハ誠で御座るか「さくりてミテ」 誠に牛で御座ル シテ「やれおのれ馬じやと云て牛をかりてうせる物か キク「してもこんだじやと被仰て御座るに仍テ誠かと思ふてかりて参ました シテ「まだ其つれを （マ） 牛がじやうじやな キク「うたがいもない牛で御座る 角が弐つ迄きつとして御座ル シテ「扱もさてもだまいて牛をかされたと思へばいよく腹が立 さりながら是からをひはないてやらう様も有まひ もそつとの事ぢや ぜひに及ばぬ のつてゆこふまで キク「夫共にくるしうない事で御座る めして御座りませひ シテ「いづれくびがながしおそいと思ふたれば何がどふりこそ牛じや物を 立頭「申々人が聞ぬかと思ふて云事をきかせられひ 扱ハうしじやとしらいでのつたがじやうそふに見ゑて御座る 立衆「近比をかしい事で御座るぞ 皆「やれくく見くるしいなり哉 立頭「いざさらばなにも慰じや 座頭が牛に乗た 見さいなと云てはやしますまひか 皆「一段とよふ御座らう 皆々「座頭が牛に乗たを見さいなくく「何へんもいう 座頭聞腹立」 シテ「おのれらハおれが牛にのらふと「馬乗うと」かまひをつてのやうハ 立頭「さればこそ腹をたつと見へた さあくくはやさせられひ「右ノ通くり返しはやす」 シテ「扱もくくにくいやつ

の 何としてよからふぞ 腹の立事かな ^{立頭}「殊外腹をたつ
 たるはやせ」(ト云テはやす 弥々腹立ル) ^{シテ}「菊都
 〱」 ^{キク}「やあ〱」 ^{シテ}「其笠のゑであひつらを思ふさま
 た、け ^{キク}「まかせておかせられひ」(ト云テ笠のゑにて
 た、きまわる) ^{シテ}「も何もくわす物はないか」 ^{キク}「其こし
 にさ、せられた杖でおりてた、かせられひ」 ^{シテ}「や誠におれ
 が目が見へぬと思ふてなぶるか」 ^{シテ}「どこにをるぞ やるまいぞ
 〱」(ト云テ二人して目くら打に方々をたたき廻ル 三人の
 者共ハはやし笑々かくやへ入ル 二人のさとうハ〱) ^{シテ}「どこゑ
 おのれらやる事でハないぞ やるまいぞ」 牛も其ま、入
 ル」

シテ勾当 しろねり裕 長袴の下 衣 角ぼうし 扇 杖
 菊市 嶋の物 狂言袴く、り 水衣 こしおひ 合子すき
 ん 杖 後ニからかさ持 但しへんてつ二てもよし
 かして のしめ 長上下 小サ刀 扇
 通手三人 のしめ 長上下 小サ刀 扇
 牛出立 黒きけがわのじゆばん かるさん 黒頭に角式つ
 付ル 面牛のめん 但しけんとくにててもよし たつな
 付ル

廿六 済頼

^皆「ろさいに出ル閻魔王〱六道にいざやいでうよ」(地へ取
 テ閻魔王名乗 〈朝比奈ノ通り 尤供鬼二三人も出ル〉) ^(エンマ)

「住馴し地獄の里を立出て〱足にまかせて行程に〱六道の
 辻に着にけり」(閻魔王ワキ座ニならふ鬼共大ぜひ下ニいる
 扱ゑんましやうきにこしかけるとシテ出ル 次第) ^{シテ}「罪を
 つくらぬ罪人の〱誰かわ依てせこふよ」是ハ娑婆に隠もなひ
 済頼と申鷹じやうで御座ル 寿命の程定り為か無常の風にさそ
 ハれ只今冥途に趣候 (道行) 住馴し娑婆の名残をふりすて、
 〱足にまかせて行程に六道にはやく着にけり〱 ^詞是ハ
 道の数多有所へ来たがどの道ゑ参らうか 先此道へ参らう
 ヲニ「あ、人くさい 更ばこそ罪人が来た いかに申候 是へ
 一段の罪人が参りて候」 ^{エンマ}「急で地獄へ責落し候へ」^{ヲニ}「畏
 て候 いかに罪人急とこそ」(カケリ 爰ニテ朝比奈ノ通)
 如何に閻魔王へ申候 ^{エンマ}「何事にて有」^{ヲニ}「只今のさい人
 ハ娑婆隠れもなひ済頼と申鷹匠ニて有と申程に一人殺生を致
 為程に地獄へ責おとそうと申て候へば科人にてハなひと申が
 扱如何様に仕らふするぞ」 ^{エンマ}「左有らハ其罪人を是ゑ出し候
 へ」^{ヲニ}「畏て候」^同「いかに済頼 閻魔王の御前へ罷出候へ」
^{シテ}「畏て候」^{エンマ}「いかに済頼 汝ハ娑婆にて諸鳥をとり 為
 猥惡人にてハなきか 地獄へおとそうするぞ」 ^{シテ}「尤仰にて
 候へども鳥をとり此鳥に喰せてやしなひそだて候程に科人にて
 ハなく候」 ^{エンマ}「扱ハ鷹と云鳥が同じ鳥をとるよな」^{シテ}「中々
 の事」^{エンマ}「夫なれば余りの科にてハなひ 扱其鷹と云ハいか
 様成物ぞ 子細があらば語て聞せ候へ」^{シテ}「成程子細の候間
 語て聞せ申さふする 抑鷹のきつそうと申ハまかぶらにひさし
 をさせバ目ハ明星の如ク箸爪ハ三ヶ月の如クにして前二ハ山を

いだき後に「ハ」山川を流す くれはの毛あやをたゝむ うば
ら毛浪を寄る うれいの毛浪をとどむ 火打羽かざ切おろば
に至ル迄鷹の「〇」名所一もつのきつそうなり とつてハ毛な
し もけあかりうち爪かけ爪かゑるこかけの爪鳥からみに至ル
迄一もつのとつてなり 尾ハならをならしはうわを鈴付大石う
ち小石うちしばひきに至ル迄是鷹の「〇次」名所なり 惣じて
鷹と申物ハ国々に仍テ名も替りけいたん国にハくりてうと云
大唐にてハしゆ鳥といへり 扱日本にてハ鷹と申「ス」此鷹
を以テ諸鳥をとらせ大名小名「〇」禁中公家門跡に「〇次」至
ル迄御慰の物なり 先鷹のいわれ如此ニ候 エンマ「扱ハ其鷹を
取て慰よな シテ」中々の事 エンマ「同シ鳥が又よの鳥をとる
よな シテ」此鷹がよの鳥を取候 エンマ「夫ならバ鷹の科にて
汝が科ハなく候 シテ」左有らハ我等を極楽へやつて被下ひ
エンマ「此閻魔王も鳥と云物の味を知らぬ程に四手の山にハ沢
山に鳥が有程に汝がすへたる鷹にて鳥をとて此ゑんま王にふ
るまへ 其上にて汝が望をかなへてとらせう シテ」安ひ事で
御座れ共せこと申物がなければ鳥をとる事ハなりませぬ エンマ
「あの鬼共をせこに致し候へ」鬼共せこヲスル 一人ハ犬二な
る」シテ「是に待て 是から合せ申さう いで」鷹をつかわ
んとて 地「閻魔王のいぬやりにて鬼共草木をはらいけ
れば四手の山路の南原より雉子のおん鳥飛来ルを濟頼是を見る
よりはやく合せければちうにてかけてぞとつたりける」爰ニ
テきじをとらせて其まゝなけ出ス ゑんま王取テくうまねをし
て」エンマ「扱もくうまひ物ぢや 珍しい物をくれた程に暇

をとらする 娑婆へ帰り三年の間鷹をつかゑ エンマ「いてく
暇をとらせんとて 地「娑婆ニ歸りて三年の間鷹をつかふ
て鶴雁雉子鴨諸鳥をとらせゑがらを髓に届べしと仰をくわしく
承りて帰りければ閻魔王も名残ををしミまねきかへして玉のか
んざし石の帯を濟頼にあたへ給ひければ忝もてうだいめたし
く」二度娑婆にぞ帰りける

シテ 下に白練袴 狂言袴 腰帶 上ニ白練袴ヲつホ折テ

乱髪 左の手にはりこのたかをすへ

ゑんま 厚板 大口 狩衣 腰帶 赤頭 唐冠 末広 面

不悪 腰掛

供鬼 二三人出ル 厚板 狂言袴括ル 腰帶 鬼頭巾 ふ

あくの面 竹杖

廿七 馬口旁

「アト鬼也」《朝比奈》の鬼の次第名乗道行同前 則六道の辻ニ
着ニケリト云 常の通り シテ次第第二テ出ル」

シテ「地獄へ落る罪人のく誰かわよつてせこふよ」〔地ヲ取テ
詞〕是娑婆の博旁で御座る 無常の風ニさそわれ只今冥途へ
趣候「道行」住なれし娑婆の名残をふりすて、くいそが
ん旅のちかづくや六道の辻に着にけり 詞 急程に六道の辻に
ついて御座る 是からよからふ道へそりく」と參らふ「ト

云テ廻ル 鬼〔朝比奈〕のごとくはくらうおじたるがよし」
 「さればこそ日本一の罪人がきた 急で地獄へ責落そふ いか
 に罪人 急とこそ」〔せめ有 はくらうはたらきト云也〕
 「申々 アト」何事ぞ シテ「少こなたへ申たい事が御座る アト
 「何云たひ事とハ おのれ今一責せめてたつた今地獄へ責おと
 そうぞ 夫地獄遠きにあらず 極楽遥なり 急とこそ」〔又せ
 め有り はくらうわきへのき〕
 「いかに閻魔王成共此くつ
 わをはめてからハ身共がしやうが有ル」〔ト云 せめてくる時〕
 申々 娑婆で承つたハ閻魔王ハ理非を聞分させられて地獄へ
 落ル者ハぢごくへやらせらる、〔又極楽へ行者ハ極楽へやらせ
 らる、〕ときいて御座ル 殊ニ鬼神におうどふなしと申事が御
 座ル程に先私が申事をちと聞せられて下されい」
 「是ハ汝
 が云分がきこへた さらば娑婆でのやうだひを語れ 聞てやら
 う」
 「先私ハ娑婆でハ博勞と申者で御座ル やせた馬をこ
 やしあし馬ハ随分よふなすやうにして慈悲を致した者で御座る
 則是はくつわと申てひだるひ時ニたぶればくつわがやミま
 する 最前から申とう存」〔ジ〕たれ共かしやくに隙がなふてゑ
 申さなんだ こふ見るに閻魔王もお草臥と見えて御座る程に此
 くつわを少まいれ」
 「汝が云通り殊外草臥た 左有らバ其く
 つわをくうてくたびれをやめう程にくわせて呉ひ」
 「安ひ事
 で御座る 逆の事にこしめしやうをおしう程に是へよらせら
 れひ」〔ト云テうつむきに犬馬などのやうにしてくつわをはめ
 てのりて云〕 いか閻魔王某を責たがよいか 是がよいか
 「是ハ何とする シテ」何とするとハ此くつわをはめてから

ハ某がしたひま、ぢや 急で極楽ゑの道引をせひ
 口をしや だまされた
 「いそげ」
 まんまとだまされた ゆるして呉ひ
 「なにのゆるせとハ
 くわつし」
 「ト云テこし成むちにてた、く」
 「あいた」
 「ト云テめいわくかる時ばくらう謡」
 魔をたらしツ、
 魔をたらしツ、
 とてこそいそぎけれ」
 「ト謡ながらまくの内へのりこむなり」
 シテはくらう 白ねり給 狂言袴 前を取り こしおひ
 乱髪 扇こしに指ス むち 〔せいらい〕のやうに右の
 方のこしうしろにさしくつわをくびにかけ出ル
 アト〔朝比奈〕鬼同前出立也

廿八 餓鬼十王

〔シテ〔半銭〕のごとく供も同式人ニテモ三人ニテモ 其内一人
 札ヲ持 常のもん札のごとくにする ゑづ如此也 〔長サ三尺
 程〕と書いた札の図〕 大勢出ス時ハさがりは也 〔半銭〕の謡
 ト同前也 大勢ならバ札持式人金ト黒キト持テ吉〕



〔次第〕 〔シテ〕「地獄の主閻魔王」六道にいざやいでうよ
 「地ヲ取テ名乗」〔八尾〕同前〕 地獄の餓死以外の外也 〔左〕有に
 依てこの閻魔王が自身六道に出て罪のきやうじうをたゞさうず

ると存候 シテ「いかにごくそつ トモ」御前に候 シテ「罪人が

来らバつれて来り候へ トモヲニ「畏て候 シテ」皆々座二つく シテ「罪人が

人ハ八尾 同前 何人ニても 但し一セイニテハ二人程出テよ

し サイ人「悲しやな 我むもれ木にあらざれど花咲事もなか

りしに身のなるはてハ哀なり 詞「是ハ娑婆の縁付キ黄泉の旅

人おもむく者共にて候 先そろり トモヲニと参らう トモヲニ「人く

さい マメ「常の如ク責 んまの前へセメ行」罪人を責てまいて

御座ル シテ「夫ハざいがうのふかひ者共ちや たゞすに不及

はやかしやくの時も来ル 急で地獄へ落さふずる サイ人

「あ、めいわくな事で御座ル シテ」かしやくの責も只今なり

と 地 トモヲニ「もちたる札をおつとり直シ地獄の釜をてう シテ

どうてバ罪人共ハ皆つく トモヲニと外に顕たりけれバ シテ「爰ニテ外

ノさい人桐戸より出ワキ正面へ一同ニナラヒテモ」 シテ「責よ

や トモヲニと下知すれバ トモヲニ「あつきハ仰を承りてかしやくを

せんとて立出れバ シテ「十王猶々いかりをなして 地「鬼の持

たる鉄棒 テツボウを追取数多の罪人追立テ トモヲニ「東西南北追廻シひじゆ

つとつくして責けるが地獄の釜をふミはづしてまつさかさまに

落給いて シテ「罪人共よ助て呉よ 地 頼ぞ トモヲニとよばわり

給へば 餓鬼も人数よりて見よと閻魔の腰ニ縄を付て シテ「い

と引上れハ 鳴々がきに引上られて 大勢ばつと寄せい

すれハ シテ「今ハ十王力を得て嬉しやと悦給ひて皆打つれて

閻魔王ハ浄土へとてこそ急けれ シテ「かまの作物出れば正面也

出又時ハ正面かまの心ニして落タルテイ」

シテゑんま 但し僧の方もシテニスル 何も出立 シテ「半銭」の

通り

札持 そばつき すきかんむりニテモ

△■■■■：(綴じ込まれていて判読不能)

廿九 東大名

(シテ)「罷出 ハル為者ハ隠もなひ大名で御座る 某訴訟之事有り

永々在京致 先召遣ふ者を喚出し申付ル事有ル 太郎官者居

るかやい (太郎冠者)「はあ (常の通り)」 (シテ)「汝を喚出スハ別

の事でハなひ 身共も永々の在京の事なれハ殊外気がくつして

わるい程ニ今日ハ町表へ出てなくさもふと思ふが何と有うぞ

(太郎冠者)「尤永々の事で御座ルに仍テさぞお氣もつまらつしやれ

ませうがさりながら御訴訟も御座り夫に町表へ出させられてハ

人の口かい カ御座る 内で何成共お慰に被成てよふ御座らう

(シテ)「内でハ別に慰がないが何がよからふぞ (太郎冠者)「せう

ぎ成共こなりとも又まりなどもよふ御座りませう (シテ)「いや

こせうぎハそばで見ても其ま、ねむう成て慰にならぬ (太郎冠者)

「夫ならバまりに被成ませい (シテ)「まりハけもすれ共是も慰

にハならぬ (太郎冠者)「夫ハなせに (シテ)「人のけるのハうゑ、

上る 某のけれバつとわきき マメへゆき (シテ)「何がよからふぞ

(太郎冠者)「夫ならバ御尤で御座る (シテ)「何がよからふぞ

汝に咄にくい (太郎冠者)「何がよふ御座りませふぞ (シテ)「やい よい事が有か

成にくい事ハ御座りますまひ 何成共早う仰られませい (シテ)

「夫ならバこちあこい (太郎冠者) 「あ (シテ) 「やいそちや (マモ) そばにて云」 (太郎冠者) 「や、夫ハ成ますまい (シテ) 「あや」
 それでなければ慰にならぬ (太郎冠者) 「扱夫ハとくに御座りまするか (シテ) 「いや心安うてハない (太郎冠者) 「ない物が何と成まするそ (シテ) 「爰元ハ都の事ちや程二町表二ハいか程も有ふ汝ハ大義ながら町表へ出テか、へてこひ (太郎冠者) 「あ、 (シテ) 「やい代にハかまわぬ程に随分きりやうのよい者をかゝゑてこい (太郎冠者) 「畏て御座る (シテ) 「頓テもとれ (太郎冠者) 「心得て御座る (是より常の通り (太郎冠者) 「三条通りぢや 急てよはわらふ 常の通 売手(末広) 同前 (太郎冠者) 「此他りニ若い女中ハ御座らぬか か、へとう御座る (すつは) 「いやそなたを果報なと云子細ハ都広いとハいへどそなたの尋さします上郎やのてい主ハ身共ぢや (※女中ハ身共ガ方ニおりやる) (太郎冠者) 「あのそなたか 夫ならバよいきりやうの女中をかゝゑとう御座る (すつは) 「成程よいきりやうのが御座る (太郎冠者) 「して代金ハいかほどで御座る (すつは) 「代物ハ万々両で御座る (太郎冠者) 「夫ハ高直にハ御座れ共か、へませう 急てあわせて下されい (すつは) 「心得ました 追付是へたします程に直につれて帰らせられい (太郎冠者) 「心得て御座る (すつは) 「田舎をだまいて代物を取うと存ル 「アトかくやへ入りしたくの問太郎官者ひとりことを云内アトしたくして出ル (すつは) 「や、したくハ出来まして御座るが (太郎冠者) 「更ハお供めたしませふ こう御座りませい 私も御内に居ます 向後ハ御目を下されませい 頼ふだ人衆御出被成たと申さふならばよろこばせらるゝて御座

らふ 参る程にそちや たなふだ人御座りまするか (シテ) 「太郎冠者もとつたと見へた (常ノ通) してかゝゑてきたか (太郎冠者) 「中々 (シテ) 「どこにおいた (太郎冠者) 「御内に御座る (シテ) 「急ではへ出せ (太郎冠者) 「畏て御座る あゝ是で御座る (シテ) 「扱々よふでさしました こふ通らしませ (ウナツク) やい太郎冠者盃をだせ (太郎冠者) 「心得ました (盃ヲ出ス ア、) (シテ) 「やい きりやうハよいか (太郎冠者) 「中々 よふ御座りまする (シテ) 「汝がいた事ぢや程二ゆだんな有まい (太郎冠者) 「随分きんミ致ました (シテ) 「そうであらう (同) 「夫ならバ一ツのふで (太郎冠者) 「よふ御座りませう (シテ) 「さらハさします (うなづく 女吞テ) さらバこちへ被下い (ト云テ又請ル 太郎つぐ 三ツ四つ吞内ニとり色々有) (シテ) つぐな 扱々上手ぢや (太郎冠者) 「されバ夫程迄ハきんミ仕りませなんだ (シテ) 「さらば目出度のまふ (太郎冠者) 「よふ御座りませう (爰ニテ二ツ三ツのミてとれと云 太郎取テ又戻ル) (シテ) 「やい太郎冠者 汝ハくたびれで有う 勝手へいてやすめ (太郎冠者) 「いやよふ御座りまする (シテ) 「いやゝ用があらハよばふ程にやすめ (太郎冠者) 「夫ならバ勝手へ参まする (シテ) 「なふ太郎官者も勝手へいた程におきさしませ 都女郎とて始からよこにならしました (色々有 わきへ行しかた有り) 是をとらしませ 物をいわしませ とるぞ のふ腹立や やひ太郎官者 (太郎冠者) 「何事で御座る (シテ) 「あれみよ 大のすつはぢや たまされた かほみよ やい愛な者ゝ (すつは) 「あゝゆるして被下い (シテ) 「あのおふちやく者 やるまいぞゝ

〔酒二よいたるてい ねている〕

シテ常ノ通 太郎官者も同前

すつは 前ハ狂言上下 前後すきん 乙ノ面 はくかつぎ

出ル

〔追込之時面取テにくるなり〕

三拾 泥閑

〔是ヲ〔春作〕共云 〔春作〕ハ外ニ狂言有 テイカント云所ヲ春作ト替テ是ヲモ用ル〕

ワキ 「せひなくたもつおんじゆかい／＼人ハたつとく思ふらん

〔地ヲ取 詞〕 是ハ筑紫方より出為僧（^{アシキヤ}）て御座る 某未東国

を見す候程に此度思ひ立東国修行と心指候 〔道行〕 住なれし

我里を立出テ／＼足にまかせて行程に名にのみ聞しおふはか

や樽井の宿に着にけり 詞 急候程に樽井のしゆくに着て候

又是成所に樽を数多置れて候 謂のなき事ハ候まじ 所の人に

尋ませう 所の人の御座るか 問 「誰て御座る」 ワキ 「是成所に

樽を数多置れて候が謂のなき事ハ候まじ 語テ御聞せ候へ」 問

「さん候 あれ二付謂の有を語テ聞せませう いにしへ此所に

泥閑と云し人の有しが殊外の上戸にて毎日ひめい（^{末期}）より暮ル迄酒

を吞程に／＼終にハ吞死にせられし跡なれば所の人々痛敷存

樽酒を数多手向られ候 お僧も逆縁ながら吊うて通せられひ

ワキ 「さあらハ逆縁ながら吊（^吊）て通まするぞ」 問 「御用の事あら

ハ仰られ候へ」 ワキ 「万事頼ませう」 問 「心得ました」 ワキ 「是

ハこれ成ハ聞及にしでひかんのきうせきかや いさや御跡吊（^吊）わ

んと思ひよるべの樽枕／＼むしろもふるきひんそうの破レ衣

をかたしきて 夢の酒きやうを待居たり／＼」 シテ 「新酒しひ

のませしやうちうむねにしむ 上諸白の手樽の内荒茶碗こいし

や 上戸衆の哀のミたきかんなべに中成ごしゆのあつきにもふ

ゆるおミきハ心よや」 ワキ 「ふしきやな 法鉢の身にて 手樽

を持顯出給ふハもし泥閑にてましますか」 シテ 「実やよきさけ

ハ徳利に入ても隠なし 名乗らぬさきにそこぬけとおみしり有

こそふしきなれ た、／＼酒を吞給へ」 ワキ 「御心安思召 五

はい十はい入の大きさも上戸の吞ハいとやすし」 シテ 「まして

や我ハそこぬけの」 ワキ 「実面白の酒宴の友あひにあいたり

所の名も此武蔵の大きさ」 シテ 「思ひ出たり 古性の月すミ

渡ルよもすから」 地 「かの長半があて吞もかくこそあらめ 我

も又すい筒をひらきて酒物語申さむ」〔カケリ〕 シテ 「もとよ

り泥閑ハ」 地 「日本一の酒吞なればかしこのおひわい爰の酒宴

に憚吞推参すれバをそれてごしゆをバしひたりけり／＼」 シテ

「泥閑心に思ふやう あつはれよわき酒吞やとてつけざし中吞

さん／＼にちこや若衆の御盃ておつかけ追つめしいふすれバ

手むかふ者ハあられ酒の吞じにせんと思ひ定ておふきなかめに

ずんふと入テうへよりしめぎをおしあてらるればまなこハ白酒

身ハひや酒の寿命ハ水のあわもりとしゆこう地／＼にすミ酒な

りしを今有がたきミのりを江川のくせいの舟に太筒太平徳利と

つめてさをさし樽を吞つれてすゞしき道のひや酒をせんばひは

かりものミほしゆけば是ぞまことの九こんの浄土くゝのあま
酒や なむあま酒のちろりと見へてぞうせにけり

シテ 小嶋厚板 きなかし こしおひ 角頭巾 中啓 腰

ニ指 面祖父 二升入ほとん樽さけて出ル

ワキ むしのしめ 水衣 狂言はかまくゝり こしおひ

合仕頭巾 じゆず

間 のしめ 長上下 小サ刀 扇